

目 次

卷頭言

はじめに

二神 俊一 1

特集

～二神氏発祥の時代を探る～

中世武士団の移住から見た二神氏について

石野 弥栄 3

二神島の石造物を訪ねて

土居 聰朋 21

奥州人が見た瀬戸内の島

佐々木譲司 30

二神島、二神墓地を訪ねて

(大型五輪塔及び廟墓ラントウから)

安岡 道雄 35

なぜ、二神島・松島なのか

豊田 渉 44

二神島の「三月様」と「松島神社」

豊田 渉 47

海の民・二神氏の信仰—宇佐八幡と妙見社

二神 英臣 53

シリーズ

系譜・家紋紹介 No14 【高山二神氏】^{こやま}

編 集 部 69

会員さんからの投稿

日本国宗本家、天皇はどこから来たか

溝田 孝一 78

二神嘉林の過去帳について

臼木 良彦 84

二神時成について

臼木 良彦 90

片山墓地の柿の木

二神 慶子 97

役員のつぶやき

右目の奥でピカピカ光が……これは、ヤバイ

二神 俊一 99

正義とは砂上の楼閣か、老いたる者のたわ言か

二神 久蔵 103

名古屋帰化人のお墓事情

二神 亮郎 105

宏介さんのよもだばなし！4題

二神 宏介 107

兄との思い出

二神 美知子 110

二神氏の神々

二神 良昌 112

父親の思い出

二神 康郎 114

関西・中部支部から

会 則 116

役員名簿 118

入会申込書 120

編集後記 二神 俊一・豊田 渉 121

編集後記 二神 俊一・豊田 渉 122

はじめに

会長 二神 俊一

忘れもしない、あの昨年の3.11の未曾有の大災害から早くも1年が経過しようとしております。巨大地震・巨大津波・原子力発電所の事故・放射能の拡散などなど、次から次と、襲ってくる尋常でないトラブルに対して、我々はどのように対処していったらいいのでしょうか？

自然の猛威に対して、これほど人間の無力さを思い知らされた事象はありません。このような時にこそ、人々の間の「絆」が大切な「キーワード」として認知され、「きづな」を深めていくことが求められます。

二神系譜研究会も発足後12年目となります。これまでの調査・研究を通じて歴史の糸をひとつづつ手繕り寄せ、少しづつ、新しい事実もわかりかけています。

私達の活動そのものが、「二神」姓およびその一族の系譜の「絆」を深めていくこととなります。今後とも会員の皆様のご支援・ご協力を得ながら、更に系譜の解明に取り組みたいと思いますので宜しくお願ひいたします。

平成24年3月31日



特集

「二神氏発祥の時代を探る」

今回は、数々の二神氏にまつわる疑問や謎に迫ってみたい。すべての紹介は難しいものの、古文書に忠実に沿ったもののみではなく、伝承・推論を加えたものもあるが、前もって、お断りと御了解をいただき、今後の調査・研究に委ねたいと念じている。

その主なものを列記してみる。

- 1 長門から来たとされる豊田種家は、なぜ二神島でなければならなかつたのか？

二神氏発祥の頃は、どんな時代だったのか？

柳原二神文書系図伝書略記の種家のところに、「……長門国敗れ、河野通朝の要請に……」とあるのを、どう読みとるのか？この記述はほかの文書には見られない。それはなぜか……。

- 2 豊田氏が二神氏になった訳は……。長門から来たときに「二神島」であったのか。

「忽那嶋開発記」に、二神島は松島とも記載されているが……。

二神島の荒神山には、「松島神社」があり今も二神豊田氏がお祭りしている。元々、松島神社は現在の「宇佐八幡神社」があった場所に鎮座していたという。

- 3 二神島二神家墓地群の墓石から、豊田種家らの墓石は推定できるのか？

二神島内や二神氏関連地域にある石造物から、読み説くことはできるのだろうか……？

- 4 二神氏と信仰の関係は……？

- 5 河野氏の家臣になった最初の人物は誰だろう……？

- 6 二神島の宇佐八幡神社、妙見社、巖島神社、三月社などの起源や関係・伝承などから考えられることは……？

中世武士団の移住から見た二神氏について

石野 弥栄

はじめに

伊予国二神島に発生した二神氏は、長門国の豪族的武士団豊田氏の一族が移住して成立したという点では、異論のないところであろう。ただ、豊田氏の二神島への移住の時期、契機、背景などを具体的に示す確かな史料を欠いており、不明な点が少なくない。その中で、すでに網野善彦氏は、従来の諸説を検討され、中世史家としてすぐれた論考を発表されている(1)。したがって、ここで屋上屋を架す必要はないのであるが、今回、本誌で二神氏の源流を探る特集が組まれるのにあたり、網野氏をはじめとする先学の業績を踏まえて、中世武士団移住の観点から、二神氏を位置づけてみたい。

一 伊予二神氏の発祥をめぐる諸問題

(1) 二神氏の発生に関する諸説

(菅菊太郎説)

菅菊太郎氏は、二神島の称呼、二神氏の出自と盛衰、安養寺と同寺の大般若経、同島の寺社、伝説、習俗など二神島を多面的、総合的に考究されており、その中で二神氏という武士団の発祥についても触れている(2)。菅氏は3種の二神氏系図のうち、「豊田二神之嫡流系図」(3)によって、長門豊田氏の末孫の種家の時代に伊予国二神島に移り、姓を二神と称し、河野氏に属したと解している。また、伊予史談会の収集した「二神某ノ口上書」という文書(4)によって、二神氏の先祖が家督相続争いに破れて浪人となり、河野氏の領分の二神島に流れ寄り、河野氏に仕えるにいたったとも記す。菅氏は他の二神氏系図も大同小異と述べているが、子細にみれば、そうではなかろう。「豊田藤原氏子孫系図次第」(5)の種家の尻付(注記)には「号 二神 始居住伊豫国二神嶋、故改豊田發二神姓」とあるのみで、二神氏祖の種家が家督相続の争いに破れて、二神島へ赴いた

ことや、河野氏との関係などについては記していない。ただ「二神氏系図傳書略記」(6)所収の「二神氏系図」(仮称)の種世の尻付(注記)に「種世、種家兄弟、父種秀卒去ノ後、家督ヲ争ヒ、鉢盾ニ及ブ。終ニ豊田名跡ヲ失ヒ、種家率浪シテ当国下島ニ来リ、二神島ニ居住ス。依テ二神ヲ以テ名字ト為ス」(原漢文)とあり、また「柳原二神氏古文書并系図」(7)に収める「豊田二神隼人佐道範系図」の種家の尻付に「長門敗北之後、河野遠江守通朝ニ仕、二神島一円ヲ賜フ」とあるから、これらの記述は、菅氏の拠った「二神某ノ口上書」の内容に近い。

さて、菅氏は「二神某ノ口上書」という文書の作者を室町期に登場する家経(安養寺蔵大般若經奥書に見える)の子とし、その記事自体もありうるべきと述べるが、その文書の様式や文言からみて、明らかに中世文書ではなく、近世に成立した先祖書である。したがって、その記述は史料批判を必要とする。

(景浦勉説)

景浦勉氏は二神氏に関する論考(8)で二神島へ移住したのは、二神種家の時代で、安養寺の大般若經の奥書から類推して、室町時代初期とする。しかし、同氏は種家のあとを継いだ吉種が元徳年間から貞和年間にかけて活躍した人物とも記しており、年代的に齟齬が生じる。諸種の二神氏系図によると、吉種の法名が「法善」であり、安養寺大般若經(第358巻・356巻)の奥書に見える「二神鳴住人沙弥法善」のことだとすると、網野氏の指摘するとおり、鎌倉時代最末期にすでに出家し、二神島に居住していたことになり、景浦氏のいう室町時代初期移住説は成立しない。同氏は南北朝期を広義の室町時代初期と表現されたのかもしれないが、それにしても、年代的には問題があろう。また、菅氏の説を踏襲したのか、二神島の古称は「松島」であるとも述べているが、これについては後述したい。

(『愛媛県史』の説)

『愛媛県史 古代II・中世』(石野執筆分)の中で二神氏の移住時期について、記述の根拠を示していないが、南北朝末期と推測している。後述するように、これは年代的に問題がある。なお、筆者

(石野) はのち本誌第3号に載せる「河野氏の時代と二神氏」という講演録(9)では、安養寺大般若經奥書に見える法善（系図では吉種と見える）を二神氏祖と解している。

(宮本常一説)

「忽那嶋開發記」（以下「開發記」と略称する）の「長祿三卯年八月豊田弥三郎事、二神嶋住宅願、正岡氏信濃守俚孝殿任仰彼嶋差置者也」という記事に拠ってそれ以前の二神氏に代わって豊田氏が二神島へ入部し、二神氏になったと解する(10)。私は先の講演録でこの部分を二神島に入った豊田氏が、二神氏と称するようになっても、本姓の豊田を名乗ることもあったのではないかと、宮本氏とは異なる解釈をしている。「忽那家文書」には、確かに河野家奉行人の正岡信濃守經孝(11)が河野氏の命を奉じて発給した文書もあるが、前述の「開發記」の記述は、現存する「忽那家文書」には見えず、しかも「豊田弥三郎」という人物も豊田氏の系図・系譜に登場しない。また、「住宅願」などという中世には見えない語を使用しているのも気になる。この部分は、河野氏による二神氏領の安堵を意味するものかもしれないが、それにしても、豊田氏流二神氏以外の二神氏がすでに二神島にいるとする宮本説は検討を要する（後述）。

(竹野孝一郎説)

竹野孝一郎氏は、片山二神氏の分流林四郎氏所蔵の二神氏関係文書・二神系図を紹介、解説されているが(12)、その中で二神系図に拠って長門豊田氏の二神島移住について触れている。ただ、同氏は移住者が種家であると推測されるものの、その移住年代を1200年代の中頃以降としている。なぜ13世紀中葉が基準になるのか、根拠を明示されていないが、おそらくは二神島の安養寺大般若經（第280巻）の識語に「久安三年十二月五日書写了」とあることによろう。ただ久安3年（1147）は12世紀中葉であるから、誤解とみられ、種家は吉種の父とすると、鎌倉時代後期頃の人物とみなされ、年代的に齟齬が生じる。この年次のもつ意味については、景浦勉氏は前掲論文で二神（豊田）氏の祖先が平安時代末期に書写して齋したものと解され、網野善彦氏は元徳・あるいは永享年間に書写、奉納の際に、

あわせ納められたのではないかと推測している。この経巻には本文ではなく、識語だけ記されているから、本文欠脱後、年次のみ後にメモしたものと解される。いずれにせよ、この年次は豊田氏の二神島移住年代とは関係がなかろう。

(網野善彦説)

網野善彦氏は、二神氏を長門国の有力な国御家人豊田氏の一族が所領とした二神島へ本拠を移したものと解され、その移住年代については、不明としながらも、二神島の安養寺大般若經奥書からみて、鎌倉時代後期の豊田種家、吉種の時代とみなしている(13)。また、同氏の別稿(14)では豊田氏一族がⒶ勲功賞として与えられたⒷ二神島の所職（地頭職か）を分割相続して、島に入部したと考えるのが自然であろうとも解され、二神島の東部の城山にⒸ警固所（海城）を設けたとも推定されている。網野論文の論旨は無理がなく、納得がいくものであるが、鎌倉時代の長門豊田氏の所領構成を示す史料もないし、はじめて二神島地頭として二神島へ入部した人物が種家だったのか、吉種だったのか、明示する確かな史料がないから、推論にとどまる。なお網野氏の別稿でⒶと解すると、だれが豊田氏に二神島を給与したのかという問題が生じるがその指摘はない。またⒷは二神島を豊田氏本家と庶子とが分割したとも受け取られるおそれもある。さらにⒸもはなはだ興味深い推測ではあるが、根拠をあげていない。

(2) 二神氏と忽那氏・河野氏との関係

宮本常一氏が豊田氏の入部以前に前二神氏が存在したように解するのは、きわめて問題である。宮本氏は根拠を示されてはいないが、おそらくは「開発記」や「忽那氏系図」の記載を念頭に置いたのではなかろうか。「開発記」に拠れば、忽那島（本島）は忽那氏祖藤原親賢(15)によって開発され、同島の枝島の六島、つまり、牟須岐嶋・野嶋（野忽那嶋か）・二神嶋（初名松嶋）・怒和嶋・津和（津和地）嶋・桂（柱か）嶋は、その嫡子で、二代目の親朝が寛治年間（1087～94）に開発したという。そして、これら枝島と忽那本島と合わせて「忽那七島」と総称したという。しかし、平安時代後期に忽那氏

祖の親賢、その子親朝が急速に忽那諸島全体に勢力を拡大したことは信じがたい。また、同記によれば、忽那忠重が「七嶋一分地頭」と見え、南北朝期にも「牟須嶋地頭七郎則久」とある。「忽那氏系図」(16)では、忽那家平（兼平弟）の子親遠が「二神嶋地頭」、重俊が蒙古合戦の恩賞として「興居島」を与えられたといい、その子則平が「牟須岐島地頭」、重平（則平の兄弟）が「松島地頭」、重康（重俊の兄弟）の子遠重が「興居島地頭代」、重頼（重義の兄弟）・重明父子が「津和地島地頭」、重氏（重明の兄弟）が「怒和島地頭」、義範（重清の兄弟）が「柱島地頭」、忠重（重俊の兄弟）が「七島代官職」と見える。ともかく、「開発記」や「忽那氏系図」によれば、平安時代後期から南北朝初頭にかけて、忽那氏一族が忽那諸島全域を手中に收め、一族に分割譲与したことになる。しかし、これには以下に示すいくつかの疑問点がある。

(一) 鎌倉時代末期に成立したともいわれる「忽那古系」(17)には、忽那諸島に忽那氏一族が地頭・地頭代として補任され、勢力を扶植したことは一切記されていないし、現存する「忽那家文書」にも見えない。嫡家の重俊とその兄弟などが忽那本島以外の地頭職を獲得したとするなら、「忽那家文書」になんらかの関係文書が残っていてもおかしくない。現に鎌倉時代、忽那氏一族が忽那島荘内部の所職をめぐって熾烈な紛争を繰り返している事実からすると(18)、忽那島本島以外に忽那氏一族が進出したとすれば、全く一族間でトラブルを生じなかつたというのは不自然である。

(二) 「忽那七島」という概念が中世にそもそも存在したか否か疑問である。芸予諸島の大山祇神社（現今治市大三島町。中世では三島社と称する。）のある大三島を中心とする島々が三島荘を構成し、「三島七島」という括りで総称されたことは、信用に足る史料に見えるが(19)、忽那島荘が忽那七島という島々の集合体である形跡は認められない。忽那七島のひとつという津和地島は、文治6年（建久元年、1190）4月19日の造伊勢太神宮（内宮）役夫工米未済注文(20)に「周防国 津和地 沙汰人行能相向使弁済畢」とあるから、鎌倉時代初期に同島が周防国に属し、国衙領であった

可能性がある(21)。また、柱島は南北朝初頭に忽那義範が「柱島下野房」と称し、懷良親王から同島地頭職を安堵されているから（「忽那家文書」）、南北朝初期に忽那氏が同島に拠点を構え、居住した形跡はあるが、寿永3年（1184）頃には、賀茂別雷神社領であり（鳥居大路文書／山口県史料古代編）、鎌倉時代にも同社領として見える。以上からみて、中世前期に忽那七島が形成され、忽那島荘に包含されたとは考えがたい。したがって「七島代官職」・「七島一分地頭」という語も虚構の可能性もある。天正15年（1587）という年次をもつ「開発記」は、最後の忽那氏当主亀寿丸に仮託して近世に作成されたものと考えられ、先祖の業績をより高く顕彰しようとするふしも認められるから、それと内容的に近似する「忽那氏系図」の注記もまた疑ってかかる必要がある。

(三) 「忽那氏系図」によれば、家平（兼平の弟という）の子親遠の尻付に「百合之介 二神嶋地頭」とあるのに、重俊の子重平の尻付には「左馬允 松島地頭也」とあり、内容的に問題がある。「忽那家文書」によれば、家平は鎌倉時代初期の忽那氏惣領兼平の弟で、忽那島荘西浦松吉名を譲渡された庶子であろう。とすると、その子親遠は、鎌倉時代初期から中期の人物に想定される。一方、重俊は建長6年（1254）に忽那島荘西浦地頭職（松吉名）をめぐって舍弟の重康と相論し、幕府の裁定を受けているから（「忽那家文書」）、その子重平は鎌倉時代後期の人物となろう。もし、親遠や重平が実在する人物だとみなすと、二神島は松島よりかなり前に見えることになり、松島が二神島の初名とする「開発記」の記事と矛盾する。なお親遠の通称「百合之介」も、近世の二神村の属島「由利島」に由来するものか、幸若舞や御伽草子、淨瑠璃、歌舞伎など後世に流布した「百合若大臣物語」(22)の影響を受けたものかさだかではないが、いずれにしても、後世脚色したきらいがあろう。以上の検討結果よりすれば、「開発記」や「忽那氏系図」は、確かな根拠に基づいて記述したものとはいえないで、二神島が当初は松島であったことや、豊田氏入部以前に忽那氏一

族がすでに二神島に勢力を扶植していたと解することは、にわかに信じがたい。

さて、二神氏が伊予の豪族的領主河野氏と関係をもつようになつたのは、いつ頃であろうか。この点についても、確たる裏づけはない。前述の柳原二神家所蔵の「豊田二神隼人佐藤原道範系図」の種家の尻付に「長門敗北之後、河野遠江守通朝ニ仕、二神島一円ヲ賜フ」と見えるが、二神島安養寺の大般若經奥書の元徳2年（1330）に登場する「法善」を吉種に比定すると、その父という種家は、少なくとも鎌倉時代後期の人物となり、南北朝中期から後期にかけて河野氏嫡流として活躍する通朝⁽²³⁾と年代的に合わない。忽那氏が河野氏被官になり、所領の給与、安堵を受けるのが室町初期であるから⁽²⁴⁾、その地理的位置からしても、二神氏が南北朝期においてすでに河野氏被官化されるというのは疑問視される。また「予章記」や「予陽河野家譜」（卷之三）に引用されている「今岡陽向軒家伝之記録」⁽²⁵⁾という今岡氏の家伝によると、貞治4年（1365）に河野通堯（のち通直）は、細川氏に追わされて九州へ渡海し、征西府（南朝方の懷良親王）に帰順して北朝方（幕府方）に対抗したというが、同6年（正平22年）に九州からの帰国にあたり、「二神十郎左衛門尉」（諸種の二神・豊田系図によれば、吉種の子種直か）らが加勢したという。このとき敵方の怒和・牟須岐島を焼き払ったとも見えるが、この今岡氏の家伝が事実とすると、そのころ忽那諸島の勢力が分裂していたことになろう。この頃の軍事情勢は、上述の今岡氏の家伝に拠らざるをえないところがあるが、当時北朝方の鎮西管領に任命された渋川義行の九州下向を阻止したのは、瀬戸内海西部・中央部の制海権を握っていたとみられる河野氏一族やそれに与同する勢力であったことからすると⁽²⁶⁾、大筋では信用できる記述であろう。その頃の二神氏は、二神島を拠点に河野氏に軍事的に協力する姿勢を示していたのではなかろうか。

二 中世武士団移住の種々相と二神氏

(1) 中世武士団の移住について

中世武士団の移住は、政治・経済的な面で重要であるばかりではなく、文化・宗教面に果たした役割も大きいと思われる。一般的に中世における武士団の移住は、鎌倉時代がもっとも顕著であり、それにつぐのは、南北朝期である。

鎌倉時代における武士団の移住は、所領経営を契機とするものが圧倒的に多い。源平の争乱や承久の乱で西国の武士団の多くが没落したのち、その空白を埋めるかのように、関東の鎌倉御家人らの多くが西国で所領（地頭職）を獲得し、やがて惣領あるいは庶子が、様々な事情から西国の所領に移住している（西遷御家人化）。もちろん、関東の御家人が東北地方へ移住するケースもあり（北遷御家人化）⁽²⁷⁾、西国の武士団が九州・東山道・北陸道・関東で得た所領へ移住したケースもあって多様な形態をもつ⁽²⁸⁾。

ところで、鎌倉時代の武士団の移住の契機としては、自主移住説と幕府による指令説とがあるといわれるが⁽²⁹⁾、どちらかというと、所領経営をより徹底化するために、自主的に所領へ下向し（滞留）、そのまま土着したものが主流であり、それゆえ、移住年代も武士団によって区々なのである。

南北朝期の武士団の移住も基本的には鎌倉時代のそれと変わらず、勲功賞として新たに所領を獲得して、その経営のために現地へ赴いた場合もあるが、南北朝争乱で軍勢として遠隔地へ派遣され、そのまま進駐先へ土着したケースもまま認められる⁽³⁰⁾。

伊予国の武士団にかぎってみれば、生え抜きの豪族的武士団の河野氏や新居氏、忽那氏などを除くと、圧倒的に多いのは関東からの西遷御家人である。それも武藏国（現東京都・埼玉県・神奈川県の一部）の事例がもっとも多い（後述）。それに対して二神氏は中国地方の長門国（現山口県）から瀬戸内海の二神島へ移住したのであるから、東遷御家人とでもいうべきもので、異例といえよう。

(2) 伊予国における鎌倉御家人の所領と移住

鎌倉時代に伊予国に所領をもつ他国の武士団を網羅的に検出した

上で、豊田氏の二神島移住を位置づけてみよう。当国における地頭補任地については、『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』第二編第一章に「鎌倉時代伊予国の地頭補任地」表が掲げられているので、ここではそれを参考にしながら述べてみたい（ゴチックは追加分。四角の枠でかこったものは推定による。）。なお、市村高男氏が四国の西遷御家人について、その概観を述べており、伊予国についても、『愛媛県史』の記述を踏まえて言及している⁽³¹⁾。

- ① 宇摩郡寒川地頭小川氏（武藏国多摩郡小川牧が本貫。武藏七党の西党。）
- ② 新居郡新居郷地頭金子氏（武藏国入間郡金子村が本貫。武藏七党の村山党。）
- ③ 周敷郡北条郷地頭多賀谷（江）氏（武藏国埼玉郡多賀谷が本貫。のち安芸国蒲刈・倉橋島へ移住）
- ④ 越智郡高市郷地頭小早川氏（相模国早河莊土肥郷が本貫。のち安芸国沼田莊・都宇竹原莊へ移住。）
- ⑤ 越智郡弓削島莊地頭小宮()氏（武藏国多摩郡小川郷小宮が本貫。弓削島莊地頭職を一族が分割知行。武藏七党の西党。）
- ⑥ 久米郡地頭金沢氏（武藏国久良岐郡金沢郷が本貫。北条氏一門。）
- ⑦ 久米郡野口保地頭金沢氏（同上）
- ⑧ 久米郡良生名・国清名地頭金沢氏（同上）
- ⑨ 久米良郷地頭大仏氏（相模国鎌倉郡深沢郷大仏が本貫。同上。）
- ⑩ 浮穴郡荏原郷等地頭土岐氏（美濃國土岐郡が本貫。惣領家や庶家が荏原郷に滞留した形跡がある。清和源氏頼光流。）
- ⑪ 伊予郡玉生莊地頭北条氏得宗（北条氏嫡家）
- ⑫ **伊予郡砥部内千足地頭大森氏**（駿河国駿東郡大森が本貫。のち伊豆・相模両国へ進出。大和源氏宇野氏流か。大森彦七盛長流が砥部に土着。）
- ⑬ 喜多郡地頭宇都宮氏（下野国河内郡宇都宮が本貫。貞泰流が移住したか。）
- ⑭ **喜多郡出淵村地頭仙波氏**（武藏国入間郡仙波莊が本貫。武藏七

党の村山党。)

- (15) 喜多郡長浜（浦）地頭兵藤氏（三河国宝飯郡長山荘篠田が本貫。
設楽氏系伴氏。）
- (16) 宇和郡地頭橘（小鹿島）氏（小鹿島の苗字は出羽国男鹿島による。のち肥前国長嶋荘へ移住。）
- (17) 宇和荘地頭橘（小鹿島）氏（同上。宇和郡海辺部にその一族が土着。）
- (18) 恒松名地頭高柳氏（武藏国埼玉郡大河土厨が本貫）
- (19) 味須郷法師名地頭大内氏（周防国の在庁兼国御家人）
- (20) 行元名地頭飯田氏（相模国鎌倉郡飯田荘が本貫）
- (21) 成吉別府地頭内藤氏（周防国熊毛郡勝間村・都濃郡末武保を本拠とする）
- (22) 二神島地頭豊田氏（のち二神氏。長門国豊田郡が本貫）

以上、22の事例を検出したが、このうち、伊予国に移住した武士団は、②・③・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯の7例にすぎない。③は南北朝末期までに安芸国へ移住したとみられ⁽³²⁾、⑯も郡地頭職を停廃されて肥前国長島荘へ移住している。土着した場合も⑫の淵氏⁽³³⁾、⑬の氏⁽³⁴⁾と在地名を姓としているが、他は本姓を名乗っていて、大部分は移住していない。

さて、次に④・⑯・⑰・⑲・⑳の事例、つまり中国地方の武士団で、伊予国に所領をもつものを検討してみよう。④は安芸国沼田荘地頭の小早川本宗家（朝平）が保持していたと解されている。つまり、鎌倉時代末期の正和3年（1314）に同郷代官景房が海賊人を逮捕して幕府から褒賞されたことを小早川氏に通達しているから、そのころ同郷が小早川氏領であったというのである⁽³⁵⁾。この点については、やや検討を要する点も認められるが⁽³⁶⁾、一応ここでは小早川氏の所領としておきたい。⑯は周防国の大内氏（大内介）所領17か所と三河国高須郷・伊予国味須郷（味酸郷）法師名が見える。この史料は、すでに大内氏研究者の論著に取り上げられているが⁽³⁷⁾、年代推定されておらず年代不明であるが、鎌倉時代のものとみてよかろう。なお「味須郷

(味酸) 法師名」は温泉郡「味酒郷」(現松山市)の誤読の可能性が高い。大内氏の遠隔地所領獲得の時期、契機なども全く不明であるが、鎌倉時代中期、六波羅探題の評定衆として在京していた大内重弘をはじめ、鎌倉時代末期にも在京人として確認できるから⁽³⁸⁾、幕府との緊密な関係から手中にした所領であろう。⁽²⁰⁾は相模国の御家人飯田氏（源姓）惣領家の所領で、元徳2年（1330）10月28日に義頼から嫡子の義雄へ譲与した所領のひとつである⁽³⁹⁾。飯田氏は名字地（本拠地）の相模国飯田郷をはじめ長門国大野荘地頭職、伊予国行元名（所在不詳）という散在所領を保有しており、それらは重代相伝の所領とあるから、鎌倉時代末期に獲得したものではなく、かなり遡るとみられる。なお、長門国大野荘（現山口県豊浦郡菊川町）には戦国期に大内氏給人として飯田氏が見えるから⁽⁴⁰⁾、同地に移住した一族もいたろう。また、戦国末期、安芸国佐東川河口に配置された、毛利氏配下の「川内警固衆」の一人として「飯田十郎左衛門尉義武」がいるが⁽⁴¹⁾、彼は長門国へ移住した飯田氏の末裔であろう。21は貞和6年（1350）12月に内藤徳益丸（盛世）代審覚が足利直冬へ提出した申状⁽⁴²⁾に「尾張国浅井郷、周防本郡東方・勝間村、伊与国成吉別府⁽⁴³⁾以下地頭職」が内藤氏歴代の所領として知行してきたという。その副進文書（証拠書類）に「右大将家以下御下文、手継状案」を提出する予定があったという。内藤氏側の主張が正当であったとすると、同氏は鎌倉時代初期の源家將軍時代に上記の散在所領を獲得していたことになる。のち、大内氏の重臣となったのは著名。

いずれにしても、鎌倉時代の御家人たちが、本拠地を離れて遠隔地の所領へ移住するには、移住先が「一所懸命」の地でなければならない。長門国の豊田氏一族が伊予国二神島へ移住したのは、逃亡、流浪したあげく、漂着したのではあるまい。本拠地での家督争いに敗れたということは、当時の趨勢からみてありうるが、それにしても、何のあてもない地へ移住するはずもなかろう。移住先としてふさわしいのは、やはり所領として久しく知行してきた地にちがいない。こうした視点からすると、豊田氏は種家、吉種父子かそれ以前

に二神島を所領として獲得し、長年知行してついに移住したと考えたほうが自然である。豊田氏の所領は二神島の一円地頭職とみられるが、同島がもともと本所權門（莊園領主）として存在していたか否か、今のところ明らかではない。

さて、鎌倉時代末の長門国における豊田氏の動向や存在形態をしめす史料は、きわめて僅少であるが、豊田氏の二神島移住を考える前提として、一、二紹介したい。

(史料1)

長門国二宮造営用途事、就関東御教書

先度相觸之處、無音、甚無謂、

早可被致沙汰也、仍執達如件

延慶三年九月廿日 前近江守（花押）

豊田孫太郎殿

(史料2)

長門国豊田千熊丸嘆申旨候之間、代官參上候、

委細被尋聞食、便宜之時、入耳候之様、令申

給候者、可為御利益候哉、

恐々謹言

称名寺

上掲の（史料1）(44)は、長門守護北条時仲が豊田氏惣領とみられる種長(45)に宛てた施行状で、おそらく前年の長門国二宮の忌宮社炎上に伴い(46)、その造営を命じた幕府命令を受けて、守護の北条氏一門（時村流）の時仲が造営用途の進上を督促したものと解される。また、（史料2）(47)は日付、差出人が欠けていて不明であるが、文末の書留文言からみて、鎌倉六浦荘内の金沢称名寺長老（剣阿か）に宛てたものとみられ、差出人は、「北条（金沢）貞将」に比定される。北条（金沢）貞将は、北条氏一門（義時の五男実泰流）貞顯の嫡子で、正中の変後の正中元年（1324）11月に六波羅探題（南方）に補任されて上洛、朝廷の監視の任務を全うしている(48)。そして元徳2年（1330）に任を終え、鎌倉へ下向、やがて鎌倉幕府の滅亡時に新田義貞軍と戦い、戦死している。したがって上掲文書は、

いざれも14世紀初めのころのものであり、北条氏との関係が知られる。(史料1)では、豊田氏惣領家が幕命を無視して領主権の拡大をはかる動きを示しているのに対し、(史料2)では豊田氏幼主(千熊丸)が北条氏一門金沢貞将へ愁訴したらしいことが読み取れる。その内容は判明しないが、とにかく北条氏一門と緊密な関係を結び、自己の立場を維持しようとする動きと読み取れる。また、これとは別に「鎮西引付記」(49)に鎮西探題引付衆の一人として登場する「豊田太郎左衛門」がいる。この豊田氏と同様に周防国の中頭御家人平子氏(三浦氏流)も同引付衆として見えるから、藤井崇氏の指摘するように、防長の有力御家人のうち、長門探題北条実政の時代に被官化されたものが、実政の鎮西探題への転任にともない、鎮西探題のスタッフとして起用されたものと考えられる(50)。この「豊田太郎左衛門」について、系譜上の位置を確定した論考はないが、諸種の豊田(二神)氏系図に見える「種秀」(大夫判官太郎、左衛門尉)ではあるまいか。ただし、鎌倉時代後期以降の豊田氏の系譜は、網野氏の指摘があるように、錯乱しており、家督継承の順序もさだかでない(51)。

鎌倉時代後期、長門・周防守護(長門探題)は、北条氏一門の時仲(政村流)や金沢流の実政、時直らが任じられ(52)、とくに時直は幕府滅亡寸前に周防・長門両国の軍勢を率いて伊予の反幕府軍討伐のために渡海したり(53)、長門国の大峰(現山口県美祢市)や守護館(探題所在)で反幕府軍と交戦したりしているが(「博多日記」)、豊田氏本宗家は時直を支える主要勢力であったらしい。

やがて南北朝初頭には、内乱の渦中に投げられた豊田氏のうち、庶家とみられる種治が足利尊氏に随従し、勲功賞として北条得宗家被官(有力御内人)長崎高資の旧領である越前国主計保(現福井県福井市)を与えられている(54)。

むすび

以上、長門国から伊予国二神島へ移住した豊田氏一族(二神氏)について、中世武士団移住の観点から位置づけを試みた。豊田氏の二神

島移住の前提として、その所領構成や所領経営の実態を直接裏付ける史料を欠いているので、他の事例から推測したにすぎない。伊予国へ移住した武士団にかぎってみれば、関東から移ったもの（西遷御家人）、それも武藏国からの移住が圧倒的に多い。それに比べて中国地方の武士団で伊予国に所領をもっていたものは、若干検出できたものの、移住した例は、本稿で取り上げた長門豊田氏以外に認められない。豊田氏の移住は、西国における国御家人の移住（東遷）とでもいうべきもので、東国武士団の西遷のように、鎌倉幕府による西国支配の伸張（浸透）としては位置づけられない。鎌倉期武士団の移住は、一般的に所領支配（経営）にもとづく自主的なものが多いが、豊田氏のように、移住先が同じ西国内にとどまっている場合、どのような契機で所領を獲得し、移住を果たしたのか、問題となる。豊田氏（二神氏）の場合も一族間の所領争いの帰結としての移住と捉えるのが、もっとも自然な解釈ではあろうが、その際、所領争論に敗れて流浪し、二神島に漂着したなどという後世成立とみられる流離譚は信じがたい。長門豊田氏が移住先に二神島を選択した理由は、やはり移住を可能にする条件がなければなるまい。したがって、豊田氏が入部する以前に、忽那氏一族が二神島を含めて忽那諸島の島々の地頭職を掌握し、勢力を扶植していたとする忽那氏関係の系図・編纂史書などの記述を額面どおり受け取ることができない。もし、それが事実だとすると、豊田氏の所領支配や移住が容易にできるはずもなかろう。二神島が西瀬戸内海の周防、伊予両国界という地理的位置からすると、政治・軍事的な理由、たとえば、蒙古襲来以後の幕府の指令によって、二神島が西国の海賊追捕や異国警固に関連して警固所として設定された可能性も捨てきれない⁽⁴⁴⁾。しかし、今のところその確証はえられないので、今後の検討課題としたい。

註

- (1) ①網野善彦「史料紹介 伊予国二神島をめぐって一二神氏と「二神文書」（『歴史と民俗』創刊号 1996年）、②同「「海の領主」をめぐって—忽那氏・二神氏に関連して—」（『芸備地方史研究』200号 1996年）
- (2) 菅菊太郎「二神島の研究」（『伊予史談』72号 昭和7年）

- (3) 伊予史談会蔵二神系図三本のうちの「懷中系図」。
- (4) 管見によるかぎり、伊予史談会文庫に当該史料は見出せないし、「西園寺文庫」(松山大学)の目録でも確認できない。
- (5) 神奈川大学常民文化研究所所蔵「二神家文書」のうち。ここでは、愛媛県歴史文化博物館架蔵の「二神家文書」(愛媛県史編纂にかかるマイクロ写真)による。なお、当系図は「片山二神文書」にも収める(註6参照)。
- (6) 「片山二神文書」(松山大学所蔵「西園寺文庫」)のうち。当系図は伊予史談会(西園寺源透)が二神氏関係の文書・記録等を書写して合綴、表紙したものの。ここでは二神系譜研究会の複写本に拠った。
- (7) 旧愛媛県温泉郡柳原二神家に伝來したものと、昭和13年に伊予史談会の景浦雅桃氏が謄写したもの。ここでは二神氏系譜研究会の複写本に拠った。
- (8) 「室町時代における二神氏の活躍」(『伊予史談』183号1966年)。なお、同氏編『大山祇神社関係文書』付二神家文書(伊予史料集成第5巻、昭和52年)解説編も同一内容。
- (9) 拙稿「河野氏の時代と二神氏」(『海の民 ふたがみ』3号、2001年)。
- (10) 宮本常一著『瀬戸内海の研究』(未来社刊 復刊第1刷 1992年)第6章。
- (11) 「忽那家文書」文正元年7月11日の奉書(折紙)、応仁元年8月22日の連署奉書を正岡信濃守が河野氏奉行人として発給しているが、その実名を「俚孝」(『愛媛県史資料編』1426号。以下『県史資料』と略称する。)、「俚孝」(景浦勉著『忽那家文書』/伊予史料集成第1巻)、「俚孝」(大日本史料第8編之1)と読むが、これは法名ではなく、正岡氏歴代の実名の通字(「経」の字を付す)からみて、「経孝」と読むべきであろう。
- (12) 竹野孝一郎「大分市府内町林四郎氏所蔵 二神文書および二神系図について」(『玖珠郡史談』12号 昭和59年)
- (13) 綱野氏前掲論文①
- (14) 同氏前掲論文②
- (15) 忽那祐三著『梓物語—続忽那水軍の実像』(セキ印刷刊 2011年)で「尊卑分脈」から忽那氏祖親賢と同名の人物を多く検出されるが、藤原北家道長の一門からは全く見出せないので、これはやはり実在の人物ではなく、仮託されたものとみなされよう。
- (16) 『愛媛県史』編纂時に撮影された写真による。ここでは山内譲氏の御便宜を得た。
- (17) 東京大学史料編纂所蔵忽那トロ氏所蔵文書のうち。後掲拙稿(註18)及び綱野氏前掲論文(註14)で全文を掲載して紹介している。当系図は綱野氏によれば、鎌倉時代末期に作成された古系図で確かなものと解している。当系図の末尾が南北朝初頭の人物(幼名)で止めているから、南北朝初期頃の成立ではあるまい。
- (18) 拙稿「伊予国の地頭御家人忽那氏について」(『史学研究集録』2号 国学院大学史学大学院会発行 昭和48年)
- (19) 拙稿「中世の伊予河野氏と三嶋社(大山祇神社)について」(『一遍会報』320号 平成19年) 参照。
- (20) 『吾妻鏡』(新訂増補国史大系)第二 建久元年4月19条。

- (21) 伊勢内宮造営役夫工料の催徵にあたった「沙汰入行能」(出自未詳)は、文治2年以來、東大寺造営料国になった周防国の國務沙汰人とみられる。
- (22) 『日本の古典』(大修館書房刊)所収「幸若舞 百合若大臣」等。
- (23) 河野通朝(通盛の嫡子)の初名は「通将」(通称六郎)といい、河野氏惣領の所領である肥前國神崎莊小崎郷等の代官となり、やがて通盛から同所領を譲与され、南北朝後期の康安3年(1363)に惣領(家督)として再確認されるなどの動向については、拙稿「南北朝期の河野氏と九州」(『栃木史学』4号 国学院栃木短期大学史学会発行 平成2年)参照。
- (24) 拙稿「室町時代の忽那氏について—河野氏との関係—」(『文化愛媛』14号 1987年)
- (25) 『予章記』(長福寺本等)「今岡陽向軒ノ注置分」や、『予陽河野家譜』(卷之三)にも引用される「今岡陽向軒之家伝之記録写」は、「今岡陽向軒」という人物の呼び名からして、その原形は戦国期以降の史料とみられ、南北朝期の同時代史料ではなかろう。ただ、その登場人物で確かな史料上に見えるものもあるので、一概に捨て去ることはできない。今後、その信憑性について、検討する必要があろう。
- (26) 前掲拙稿(註23)参照。
- (27) 『鎌倉武士西へ』(地方文化の日本史3 文一総合出版刊 昭和53年)概説(西垣晴次氏執筆分)参照。北遷武士の代表として陸奥国では武石、結城、曾我、留守、国分、大河戸、朴沢、山村、那須、菅原、足利、倉持、畠山、朽木、葛西、山内、熊谷、出羽国では安達、武藤、二階堂、大江、安保等諸氏があげられている。
- (28) たとえば伊予河野氏について、かつて散在所領を検出するなかで言及した。九州諸国に移住した河野氏一族(拙稿「鎌倉末期の河野氏と九州」『国学院雑誌』83巻5号 昭和57年、同註23拙稿参照)、美濃国や信濃国へ移住した河野氏(拙稿「鎌倉・南北朝期の河野氏と美濃国—美濃河野氏源流小考—」『伊予史談』283号 1991年)等について検討した。
- (29) 外山幹夫「鎌倉御家人の移住について」(『日本歴史』256号 1969年)
- (30) 市村高男「中世四国における西遷武士団のその後(上) —土佐国久礼城主佐竹氏を中心にして—」(西南四国歴史文化論叢『よど』6号 平成17年)。同論文で触れられているが、南北朝初頭に土佐國の国大將細川皇海に属して吉良氏(三河國が本貫。吾川郡に土着。)、佐竹氏(常陸國が本貫。高岡郡に土着。)とともに、佐伯氏(堅田氏。豊後國が本貫。)が南朝方と交戦している(「下元家文書」等)。ち、これら諸氏は、いずれも土佐國に土着している。
- (31) 市村高男氏前掲論文(註30)参照。
- (32) 河合正治「内海中央部の海賊衆—伊予衆の北上と安芸小早川氏勢力の南下—」(『瀬戸内水軍』所収。広島県教育委員会発行 昭和51年)
- (33) 拙著(共著)『歴史探訪 伊豫仙波一族』(大護神社奉贊会発行 平成20年) 第1部参照。
- (34) 拙稿「喜多郡の中世領主について—南北朝・室町期の国人領主を中心に—」(『温古』復刊20号 1998年)、同「兵藤氏の伊予国移住・土着をめぐって」(『長浜史談』29号 平成17年)

- (35) 河合正治著『中世武家社会の研究』(吉川弘文館発行 昭和48年) 第2編第2章、376p。同氏前掲論文(註32)、『愛媛県史』古代Ⅱ・中世第二編第一章第二節311p。
- (36) 正和3年(1324)月29日の六波羅御教書(萩藩譜録児玉主計広高／『県史資料』457号)、同年7月21日の六波羅御教書(小早川家証文／『県史資料』458号)。ほぼ同じ頃に伊予国越智郡高市郷の代官景房が海賊人(右衛門五郎と雅楽左衛門次郎)を逮捕したことを守護代の信重を通じて報告を受け褒賞した旨を六波羅探題が安芸国の有力御家人の児玉氏と小早川氏に通知したものであり、児玉・小早川氏は海賊禁圧のために設置された安芸国の両使とみられるから(網野善彦著『悪党と海賊』第2部第4章に両使について言及されている)、当時高市郷を所領化していたわけではなさそうである。ただ、鎌倉幕府が滅亡すると、小早川朝平は同郷等を後醍醐天皇から安堵されているから(小早川家文書／『県史資料』551号)、のちに小早川氏領化したことは間違いない。
- (37) 松岡久人「大内氏の発展とその領国支配」(魚澄惣五郎編『大名領国と城下町』所収 昭和32年)、御園生翁甫著『大内氏史研究』147p。前者は「伊予国味須郷法師名」と読み、後者は「伊予国味酸郷法師名」と読む。
- (38) 松岡久人「鎌倉末期周防国衙領支配の動向と大内氏」(竹内理三博士還暦記念会編『荘園制と武家社会』所収昭和44年)、森幸夫著『六波羅探題の研究』(続群書類従完成会発行 平成17年)等参照。
- (39) 源義頼譲状(東京古典会創立六十周年記念善本入札目録所載文書／『県史資料』540号)。拙稿では『弘文荘善本目録』(訂正版 昭和52年)所載の同文書も参考にした。
- (40) 『角川地名大辞典 35 山口県』大野項参照。
- (41) 宇田川武久「戦国時代における毛利氏の水軍編成」(『国学院紀要』4輯 昭和47年) 同氏著『瀬戸内水軍』(教育社歴史新書65)
- (42) 所在地不詳。津々木谷氏から西禅寺(大洲市)へ寄進された「鳴野名」(成野名か。「西禅寺文書」に成野氏見える)を当てる見方もあるが(竹内理三編『荘園分布図』下)、「成吉」別府とは、「シゲヨシ」か「ナリヨシ」別府と読むべきで、その比定は適当ではあるまい。
- (43) 内藤盛世代審覚申状并足利直冬安堵外題(「萩藩閥閱録内藤小源太」／『県史資料』758号)
- (44) 「伊予古文」第6所収(東京大学史料編纂所蔵)。同書は奥書によれば、西園寺源透が蒐集した伊予に関する文書集(全7冊)を大正15年6月に東京大学史料編纂官の山本信哉が謄写したとある。当該文書は、当時松山市新玉町居住の得能通一氏蔵とあるが、原文書(正文)が現存しているか未確認。当文書の発給者の「前近江守」(北条時仲)の花押の形状(花押影)を忠実に写し取っている(「忌宮神社文書」・「三浦文書」参照)。
- (45) 豊田(二神)氏に関する諸種の系図の尻付に「孫太郎」とある種長に比定される。「二神氏系図伝書略記」の種長の尻付に「孫太郎 延慶三年依長門国二官就造營之事被成下関東御教書之由前近江守判形證文有之」とあり、本文所掲の(史料1)を引用している。とすれば、片山二神家が長門豊田氏惣領家の文書(正文)

を所持していて、系譜作成に利用したが、のちなんらかの事情で得能通一氏の手に渡ったと考えられる。

- (46) 「忌宮神社文書」によれば、長門国二宮（忌宮神社）が延慶2年（1309）に焼失したので、幕府はその造営費用を長門一国平均役として賦課したが、豊田氏や厚東氏などはすぐ幕命に応じていないようである。『豊田町史』（昭和54年発行）は、豊田種長が二宮造営に尽力したと記すが、確かな史料によるかぎり、その形跡は認められない。
- (47) 『金沢文庫古文書』武将書状編514号。
- (48) 森幸夫前掲書（註38）参照。
- (49) 薩藩旧記・「旧典類聚」所収。ここでは佐藤進一著『鎌倉幕府訴訟制度の研究』（昭和21年初版、平成5年復刻）に依拠した。
- (50) 藤井崇「鎌倉期「長門探題」と地域公権」（『日本歴史』689号 2005年）
- (51) 綱野氏は前掲論文①（註1）で、諸種の豊田（二神）系図が種長を吉種の4代前的人物とするのは不自然であり、兄弟関係が父子関係として記されているのではないかと推測されている。たしかに種長の子という種藤（知行寺と号す）、種秀（鎮西探題引付衆か）父子は庶家とみられるから、それを除くと種長、種世、種家らは兄弟の可能性が高い。本論所掲（史料2）に登場する「豊田千熊丸」は、年代的にみて種長世代の人物ではなく、次世代の者であろう。
- (42) 佐藤進一著『増訂 鎌倉幕府守護制度の研究』（東京大学出版会刊 1971年）周防・長門国の項参照。
- (53) 「博多日記」（続々群書類從史伝部第三は「楠木合戦注文」と合綴。両史料を合わせて「正慶乱離志」とも呼称する場合もある。伊予へ進攻した長門探題軍のうち、豊田氏配下の軍勢、豊田氏庶流田耕氏主従らが討死したという。
- (24) 拙稿「豊田種治の関係文書について」（『海の民 ふたがみ』8号 平成17年）参照。

石野弥栄氏

昭和19年（1944）、愛媛県南宇和那愛南町（旧御荘町）に生まれる。国学院大学大学院文学研究科修士課程修了、同博士課程単位取得。國学院大学付属國學院高校勤務を経て、角川文化振興財団で『角川日本地名大辞典』『角川日本姓氏家系大辞典』などの編纂に従事。

平成6年から同18年3月まで愛媛県歴史文化博物館の学芸課長を務める。ついで同18年4月から平成21年3月まで湯築城資料館個史跡湯築城跡館長を務める。平成23年10月からN H K文化センター松山教室「伊予水軍の歴史を語る」講座で半年間にわたり講演。現在は愛媛大学非常勤講師。

二神島の石造物を訪ねて

土居 聰朋



二神島 妙見神社にて 筆者右から 2人目

二神系譜研究会の二神英臣事務局長と豊田渉会報編集長のお誘いで、同じ職場の佐々木譲司さんや、長男の正虎とともに二神島を訪れたのは、平成23年12月26日のことです。これまで仕事で二神島に足を運んだことはありましたが、このたび、ほぼ丸一日をかけて、二神家墓地をはじめとした島内各地の史跡を改めてご案内いただきました。そこで私たちが出会ったのは、五輪塔や宝篋印塔と呼ばれる、多くの中世の石造物でした。

二神島には、安養寺、宇佐八幡神社、厳島神社、妙見神社などの寺社があって、このうち安養寺には元徳2年（1330）などの奥書がある大般若経が伝えられ、同島における中世の信仰を物語る貴重な史料となっていますが、二神家墓地をはじめとして島内各地に残る中世石造物は、二神氏と二神島に生きた人々の祈りの歴史を伝える、もうひとつの貴重な地域史の痕跡といえます。小稿では、誠にささやかながら、

二神島に残る中世石造物を調査した際の報告や、そこから浮かび上がる今後の課題や見通しについてお伝えできればと思います。

中世には、五輪塔、宝篋印塔、層塔、宝塔などの石の塔が各地でさかんに造られました。このうち五輪塔とは、下から方形、円形、三角形、半円形、団形の5つの部位で構成された塔で、それぞれ地輪・水輪・火輪・風輪・空輪と呼ばれています。胎蔵大日如来と呼ばれる仏の姿を抽象的に示す形とされ、5つまたは4つの石で各部位をつくり、それを積み上げて塔の形にしています。

また、宝篋印塔とは、もともとは「宝篋印陀羅尼」という経典を納めるための塔とされ、基礎・塔身・笠（屋蓋）・相輪の各部位からなり、二神島の二神家墓地でも、二神家種の法名が刻まれた宝篋印塔がすでに確認されています。

こうした石の塔を造ることは、仏の姿を石で刻む石仏を造ることや、木製の仏像や仏塔を造ることと同じく、「作善」＝仏縁を結ぶための善き行為であり、自身の現世安穏や来世のため、あるいは亡き近親者の供養として造立されました。

もともと五輪塔や宝篋印塔といった石造物は、上記のとおり複数の石でできた部位を上下に組み合わせて塔の形にするわけですが。二神島では、造立当初の組み合わせのまま完全な形で残っているものは見受けられず、すべて残欠（欠けて残った各部位）を適宜組み合わせて祀られていましたが、私が圧倒されたのは、島内に残るその数の多さです。

これまで、二神島の石造物については、神奈川大学日本常民文化研究所（以下「研究所」といいます）及び関係者による二神家墓地の調査が行われ、田代郁夫氏・若松美智子氏により「二神家墓地調査中間報告」が公表されています（田代・若松2002、以下「中間報告」といいます）。中間報告によれば、研究所は1996年、1997年、2000年に二神家墓地の調査を行い、近世以降の墓の銘文と型式の調査・近世墓標の模式図と配置図の作成・中世石塔の散乱状況の平面図の作成・島内

の石造物の分布調査・墓地内の一一部の発掘調査が実施されており、このうち中間報告では、五段に分かれた二神家墓地の各段の様相（平面図）、近世墓地の形成と墓標型式の変遷、墓地の一部の近世墓及び中世墓の発掘調査の成果が掲載されています。中世から現代に至る二神家の墓制を通観できる大変優れた成果であり、網野善彦氏も「十四、五世紀から現代にいたる二神家の墓所であったことがほぼ確認されたわけで、調査は多大な成果をあげることができたのである」と評価しています（網野1999）。また、このときの二神家墓地調査の様子はビデオでも紹介されています（紀伊国屋書店2000）。

ただ、「中間報告」というタイトルが示しているとおり、調査成果の全てが盛り込まれているわけではないようで、近世墓の造立の様相は詳細に検討されていますが、銘文のない中世石造物については、平坦部の一つの発掘調査の成果のほか、平坦部ごとの平面図及び石造物残欠の一覧は作成されているものの、残欠一点ごとの法量や石材、形態などは掲載されておらず、「墓地全体の近世以前の様相の把握は今後の課題である」とされています。

また、前述したとおり、二神家墓地の周囲の墓地や、安養寺の境内の一角にも、明らかに中世から近世初期のものと思われる五輪塔や宝篋印塔などの石造物の残欠をみることができ、豊田涉編集長によれば、こうした石造物は他にも島内集落の中に残されているとのことですが、こうした二神家墓地以外の場所の石造物の所在について、研究所による分布調査の成果は中間報告の中では掲載されていません。

一方、愛媛県教育委員会でも、2000年度・2001年度に「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査事業」を実施した折、しまなみ海道沿線の石造物調査の補足調査として、調査員（当時）の大成経凡氏により二神島を含む忽那諸島の石造物の調査が行われ、事業報告書で一部言及された（愛媛県教育委員会2002）ほか、『海の民・ふたがみ』3号で分かりやすく紹介されています（大成2001）。大成氏により、二神島内の本浦及び本浦以外で少なくとも17箇所で石造物を確認できしたことや、特に一石五輪塔について検討された成果が述べられています。ただし、島内の分布箇所や、一石五輪塔以外の石造物については詳細な報告が

なく、二神家墓地の中世石造物ならびに二神家墓地以外の島内各所に残る石造物は、その様相について未だ十分な資料が作成・公表されていないのが現状といえます。

このような現状を踏まえ、午前中は妙見神社、宇佐八幡神社、厳島神社等を御案内いただき、民宿で誠に美味しい昼食をいただいた後、私たちがまず向かったのは二神家墓地の下にある藪本家墓地でした。ここでは、近世や近現代の墓石のほかにも中世から近世初期のものと見受けられる石造物の残欠があり、「伊予の白石」と称される（森1998）凝灰岩製の五輪塔の残欠として地輪2点・水輪10点・火輪5点・風輪1点・空輪3点、花崗岩製の五輪塔の残欠として火輪1点・空風輪1点、安山岩製の宝篋印塔残欠として基礎1点・基礎塔身1点・笠1点・相輪1点を確認することができました。



続いて、私たちは二神家墓地に上がりました。二神家墓地は、五つの平場が造成されており、下から「一ノ段」「二ノ段」「三ノ段」「四ノ段」「五ノ段」と称されていますが、まず足を踏み入れたのは一番下段の「一ノ段」です。ここは、大小2基の石廟や近世墓標6基が並び、研究所の調査によって、大型石廟内部に納められた宝篋印塔が近世初祖の二神家種の墓であることが明らかになった場所です。

中間報告の平面図では上記の石廟及び近世墓標しか表記されていませんが、実は一ノ段の片隅には、中間報告の本文中ではその存在が指摘されているとおり、近世墓の他にも中世石造物の残欠があります。今回、私たちがその内訳を確認したところ、少なくとも地表面からは、凝灰岩製五輪塔の水輪3点・火輪2点・空輪2点、花崗岩製五輪塔の火輪2点・風輪5点、砂岩製と推定される五輪塔の風輪1点、宝篋印塔の相輪2点、一石五輪塔1点をみてとることができました。

次に私たちは二ノ段を経て、三ノ段に上りました。ここは研究所の中間報告でも「中世後半から近世初頭の石塔類を大量に確認し、二神家墓地調査の端緒となった場所である」とされ、五輪塔残欠などの中世石造物の分布状況を含む平面図及び一覧が作成されています。このうち、二神英臣事務局長が特に着目していたのは、中間報告の一覧表ではB-51と番号が振られた、三ノ段に残る五輪塔残欠の中でも最大の水輪でした。そこで、改めてこの水輪を見てみると、石材は「伊予の白石」と称される凝灰岩製と思われ、現在は上下逆になっていますが、本来の上端部の径は約44.0cm、下端部の径は約27.0cmで、高さは37.0cmでした。最大径も計測できれば良かったのですが、当初の予想を超える大きさで、手持ちの略測具では計測できなかったのが悔やまれます。

B-51の水輪には、それ自体に年号が刻まれた銘文はないので、残念ながら造立された年代を直接知ることはできません。しかし、年号が刻まれた他の石造物と比較することで、大まかな時代の推定が可能です。愛媛県内において年号が刻まれた凝灰岩製の五輪塔は2基あり、ひとつは東温市西法寺の建長6年（1254）銘の五輪塔水輪、ひとつは貞治元年（1362）銘が刻まれた中島本島にある真福寺の五輪塔です。両者の形を比べてみると、西法寺五輪塔水輪は真円の上下を切ったような形であるのに対し、真福寺五輪塔水輪は上端の直径よりも下端の直径が短い、いわゆる壺型をしており、全体の形も細長い、すなわち幅に対する高さの割合が西法寺のものより大きくなっています。

愛媛県内の在銘五輪塔水輪（凝灰岩製）

五輪塔	所在地	年代	高 (cm)	最大径 (cm)	高／ 最大径	上端径 (cm)	下端径 (cm)	上端径 ／ 下端径
西法寺 五輪塔	東温市	1254	29.8	40.8	0.73	33	33.4	0.99
真福寺 五輪塔	松山市 中島町	1362	43.5	52	0.84	43	25	1.72

この両者と二神島墓地のB-51五輪塔水輪を比較すると、上端径より下端径が小さい、いわゆる壺形になっていますが、上端径を下端径で除した数値は1.62で真福寺五輪塔よりもやや低い数値になります。最大径が不明なことから、高さを最大径で除した数値も不明ですが、最大径は上端径よりも大きかったので、少なくとも高さを上端径で除した0.84よりは低くなり、高さも真福寺五輪塔よりはやや低い数値です。これらのことから総合的に考えると、二神家墓地の凝灰岩製五輪塔水輪B-51は、南北朝時代の、貞治年間よりは若干年代が遡る時期に造られたものである可能性が高いと推定されます。

この水輪は二神家墓地にありますから、当然二神氏との関係が想定されるわけですが、同時代の史料をみると、安養寺に残る大般若経の中には、元徳2年（1330）に二神島住人沙弥法善を大願主として僧信鏡が書写したとする奥書を持つ数巻と、貞和2年（1346）に同じく沙弥法善と僧道密を大願主として修復したとする奥巻を持つ数巻があり

（白水1996）、後世に作られた二神家の系図では、この法善を二神島に移住した種家の子、吉種としています。ただし、前述したとおりこの水輪には年代や名前が刻まれておらず、二神氏の近親者や僧侶の墓、あるいは一族等で造立した供養塔の可能性もありますから、一足飛びにこのB-51が法善=二神吉種の墓の一部であると断定することには躊躇せざるを得ず、造立の対象の特定は今後の課題とせざるをえないようと思われます。

なお、三ノ段では、花崗岩製の五輪塔の残欠も多く確認されています。試しに地輪の一つを計測してみると、幅35.0cm、高さ28.0cmでした。文和3年（1354）の銘を持つ今治市の今治城管理事務所所蔵の花崗岩製地輪の大きさが幅36cm、高さ27.5cmですから、これは同年よりやや新しい、14世紀後半に造られたものといえそうです。

私たちは、二神家墓地の中世石造物のごく一部について確認した後、二神家墓地から少し離れた個人宅裏の畠で、多くの凝灰岩製や花崗岩製の五輪塔の残欠が石垣の部材として利用されている場所を見学し、最後に安養寺に足を運びました。帰りのフェリーの時間をにらみながら駆け足で境内を散策したにすぎませんが、安養寺の境内の一角に、

多くの五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔の残欠が祀られているのを確認できました。境内の工事をした際に土中から出土したとのことで、石材は凝灰岩製、花崗岩製、安山岩製のほか、礫混じりの凝灰岩製の五輪塔も見受けられました。

さて、今回確認できた二神島の中世から近世初期にかけての石造物として、少なくとも凝灰岩製、花崗岩製、安山岩製、礫質凝灰岩製のものが見受けられます。愛媛県の佐田岬半島を対象地域とした市村高男氏を中心とする研究グループの成果

(市村他2011) を参考にすると、



灰色又は黄白色の凝灰岩製五輪塔は、中予地域を中心に愛媛県内のか近隣他県でも確認できる「伊予の白石」と呼ばれる愛媛県産の凝灰岩製のものを含み、花崗岩製の五輪塔は、淡いピンク色のカリ長石の目立つものとそうでないもの、水輪のホゾを設けているものとホゾを設げず浅い窪みにしているものがあることから、広島県から愛媛県にかけての芸予産のものと、本御影と呼ばれる六甲山周辺で産出する花崗岩とが混在している可能性が想定されます。また、安山岩製の宝篋印塔は、その特徴的な形態から、山口県津和野から周南市にかけて分布する平野石と呼ばれる石材で、角礫を含んだ凝灰岩は香川県から運び込まれた石材の可能性があります。

石材の産地の特定はさらなる調査に拠らなければ詳細は不明ですが、いずれにしても、これら全ては島内で産出する石材ではなく、二神島の外から持ち込まれたものであることは明らかだと思われます。島外各地の愛媛県中央部や芸予地域・香川県・山口県・兵庫県などから、瀬戸内海を行き交う船舶の積荷として、海を越えて二神島にもたらされた石造物を詳細に調査・記録し、その歴史的なあり方を考えることは、海を舞台に活動した二神氏をはじめとする中世二神島の人々の営

みや祈りのすがた、原風景を探る上で貴重な成果の一つになることは間違ひありません。

二神家墓地については、すでに考古学のプロセスを踏まえた一定の調査が行われていますから、同墓地のさらなる調査について、これまでの成果を生かすために最も望ましいのは引き続き専門組織が主体となって考古学的な調査を行うことでしょうが、現状の墓地の遺構を崩さない範囲でも、これまで記したとおり全く何も調査できないわけではありません。また、二神家墓地以外の各地に残る石造物については、最初に述べたとおり、そもそもどこに何基あるか十分に把握できていないのが現状であり、過去に調査が行われたのもすでに10年以上も前のことなので、まずは現状を確認することが望れます。また、隣島の怒和島宮浦遺跡の調査（中島町教育委員会2002）で出土した五輪塔残欠を含む集石遺構などとの比較検討も意義のあることでしょう。

こうした調査は、なかなか一人ができるものではなく、また、調査した後も、ゆかりの方々や地元にお住まいの皆様と成果を共有しないと、せっかく調査しても余り意味がありませんが、先に触れた佐田岬半島では、地域の町立資料館である町見郷土館^{まちみ}に協力する地元住民サポーター「佐田岬みつけ隊」により、地元住民の方々自身が地元の石造物を調べる活動が行われ、2冊の報告書も刊行されています（町見郷土館・伊方町教育委員会2004、町見郷土館2008）。こうした活動事例を参考に、二神島において、研究者の力を借りつつ、二神系譜研究会の方々や二神島にお住まいの方が参加する形で、まずは石造物の分布調査が行われ、今後の保存に結びつけば素晴らしいことと夢想いたします。簡単に具体化できることではないでしょうし、私自身どこまでお役に立てるか分かりませんが、何かの機会がございましたら、また声をかけていただければ幸いです。

最後に、余談になりますが、学校が冬休み中のため調査に同行していた息子の正虎は、二神島の島内めぐりや石造物調査が強く印象に残ったらしく、今でも「二神島は本当に楽しかったね」と折に触れて話してくることがあります。貴重な体験をさせていただいた二神英臣事務局長様、ならびに豊田渉会報編集長様に心よりお礼申し上げます。

これからも二神系譜研究会の皆様には何かとお世話になることがたびたびあろうかと思いますが、今後ともよろしくお願ひいたします。

(参考文献)

白水智 1996年「二神島安養寺所蔵 大般若経の奥書について」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』13

森章 1998年「四国の五輪塔の系譜」[伊予の白石の五輪塔]『史跡と美術』第690号 史跡美術同攷会

網野善彦 1999年「海の領主」『古文書返却の旅』第四章、中央公論社発行 紀伊国屋書店 2000年『シリーズ歴史を学ぶ 二神島』第二巻

大成経凡2001年「石造物が語る海民ロマンー石五輪塔から見た二神島」『海の民・ふたがみ』第3号

田代郁夫・若松美智子 2002年「二神家墓地調査中間報告」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』18

愛媛県教育委員会 2002年『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 石造物編』

中島町教育委員会 2002年『愛媛県中島町宮浦遺跡発掘調査報告書』

町見郷土館・伊方町教育委員会 2004年『伊方の石造物調査報告書 I』

町見郷土館 2008年『伊方の石造物調査報告書 II』

市村高男・黒川信義・高嶋賢二編 2011年『石造物が語る中世の佐田岬半島 運び込まれた各地の石材』岩田書院

土居聰朋氏（愛媛県立歴史文化博物館学芸員）

現職、愛媛県立歴史文化博物館学芸員として県内の歴史文化と民俗に関する仕事に携わる一方で、伊予史談会や四国中世史研究会などで活躍中。『瀬戸内水軍散歩』（2002年12月・山川出版社）の編集・執筆にも関わる。最近では『石造物が語る中世の佐田岬半島』（2011年8月・岩田書院）の執筆陣にも参加。

奥州人が見た瀬戸内の島

佐々木譲司

はじめに

最初にごあいさつ申し上げます。

昨年4月からイヨテツケーターサービス株式会社に入社し、指定管理として愛媛県歴史博物館の企画普及グループに所属しています佐々木と言います。

昨年まで山形県の私立高校で教員をしておりましたが、大学6年間で没頭してきた日本史研究（特に中世史）を再び勉強してみたく思い現在の職に就きました。現在は少しずつながら伊予の海賊衆・忽那氏の研究をしております。

高校卒業まで東北地方の岩手県で育ち、静岡・福岡・山形を転々としてきましたが、どういう訳か四国には昨年まで一度も足を踏み入れた事はありませんでした。縁あって愛媛県に就職が決まり、瀬戸内の海を目の当たりにし、中世伊予の研究をして、はや一年になろうとしています。今後、伊予の諸先輩方からのご教示を賜わる事ができればと思っております。何卒よろしく。

二神島

さて昨年の12月末の頃、公私共に日頃からお世話になっている土居聰朋氏のお誘いがあり、二神英臣氏・豊田渉氏の先導を受け二神島の墓石調査に同行させていただきました。

午前9時半、高浜出向のフェリーに乘ります。普段は忽那氏研究のため、乗る船は中島行ですが、この日は二神島行きです。

筆者にとって、瀬戸内の海は無限の可能性を照らし出すスクリーンボードのようにも見えます。近畿から中国・四国を経て九州にまで達する瀬戸内の海は、長い歴史の中で文化の交流の場となっていました。それぞれの帆を風になびかせ行き交う船、海面から小山のように頭をもたげる島々、その島を本拠とし西へ東へと内海を跳梁跋扈する海賊

衆……教科書中の活字として見てきた事柄が、この海を見ていると映像を見ているように、ありありと脳裏に映し出されるようでした。

まだ見ぬ島の事を思い浮かべながら、出発の船に乗りました。

妙見神社

二神港に到着してすぐ、島内の妙見山に向かい、妙見神社を見学しました。社の神・妙見大権現は航海安全、豊穰豊漁を授かる神として篤く信仰されていましたといいます。



妙見神社

神社が安置されている山の中腹からは、伊予灘を一望に見下ろす事ができました。その昔は、島から四国本土へ向かう船の姿を確かめる事ができたに違いありません。高所に立ち、神の視点にいささか近づいた感がありました。

宇佐八幡神社

次いで山の麓に戻り、宇佐八幡神社を見学しました。最初は「宇佐八幡」と聞き、まっさきに学生時代に行った大分の事を思い出しましたが、愛媛県内には数ヶ所も「宇佐八幡」があると聞きました。この共通した呼び名一つとっても、海は決して「壁」にはなっていない、むしろ「道」となり文化の共通性を生み出していると感じました。そう考えれば伊予と豊後は隣国同士、九州に住んでいた時代、なぜ一度くらい行っておかなかったかと少し



宇佐八幡神社

後悔しました。

神社は、二百段近い石段を登りきった所に安置されていました。この高所からも、港に面する海を見下ろす事ができます。現在集落となっている地域も、かつては海面下にあり神社のすぐ目の前は海岸だったと聞きました。その当時は、船で島にやってくる人には神社の存在がすぐに分かったかもしれません。ここでも、人は海を通して神とつながっていた事が分かります。

二神家墓地

午後は、二神家墓地において中世～近世の墓石調査に参加しました。

行きの船中で聞いたところによると、墓の主である二神氏は元々長門の出身で豊田氏と名乗っていたそうです。南北朝時代頃に二神島に移り、在地の領主となりました。筆者の研究対象である忽那氏がさかんに海賊活動を行っていたのも南北朝期。同時期に両者の間でなんらかの折衝がなかったのかという思い付きが、ふいに頭をよぎりました。

調査地は何段かに分かれており、場所によっては丸や四角の石が混在している所もありました。土居氏が調べたところ、「伊予の白石」と呼ばれる凝灰岩性の石や讃岐産出のものなど、複数の地域から石が集められている事が分かりました。そして、なお興味深いことに、かつては崩れ落ちてばらばらになった五輪塔の各部分が、麓の民家で石垣として利用されていたと言うのです。

目の前の墓地に点在する石の一つ一つにはそれぞれ生まれた環境がありました。南北朝期にこの島に移住した二神氏も、元をたどれば他國の人間です。そして、それに従ってきた海民とよばれる人々もたくさんいたでしょう。彼らの生まれ育った地も、ばらばらになった石の



二神家墓地出土五輪塔一部

ように、それぞれ異なるものだったかもしれません。

そうした人なりものなりが、この島において一つに結び付けられ、墓地という形で完結した形をつくっています。彼らを結びつけた海という媒介物の限りない可能性を、この場においても感じました。

おわりに

はなはだ稚拙ながら、筆者は二神島調査の直前に忽那氏の歴史をまとめたものを、学会にて発表させてもらえる光栄に預かりました。研究を始めて約半年、進まぬ筆にてこずりながらも筆者をここまで突き動かしてきたのは、ひとえに海に生きる人々のいきいきとした姿でした。

過去を伝える文書の中で、彼らは陸の権力と時に戦い、結びつき、従いながらも強かに生き延びてきました。岩手県の内陸に生まれ育った筆者にとって、海は特別な存在であると同時に、つかみにくく存在でもありました。史書を読み漁り、実際に島に渡るようになってイメージは幾分か変わりましたが、いざ研究となると、そのつかみにくさに悪戦苦闘する事しきりです。

筆者にとって、海、そして海賊は長く付き合っていく事になるであろう研究対象になります。今回、調査にお誘いくださいり、色々とご教示くださった諸先輩方には、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

氏　　名：佐々木譲司（ささきじょうじ）

生年月日：昭和58年11月8日（満28歳）

本　　籍：岩手県

学歴（中学校卒以降）

平成11年3月　江刺市立江刺第一中学校卒業

平成11年4月　岩手県立水沢高等学校普通科入学

平成14年3月　岩手県立水沢高等学校普通科卒業

平成14年4月　静岡大学人文学部社会学科入学

平成18年3月　静岡大学人文学部社会学科卒業

平成18年 4月 九州大学大学院修士課程入学

平成20年 3月 九州大学大学院修士課程修了

職歴（大学院修了以降）

平成20年 4月 宮城県立迫桜高等学校非常勤講師（地理）

平成21年 3月 宮城県立迫桜高等学校非常勤講師退職

平成21年 4月 鶴岡東高等学校常勤講師（社会科）採用

平成23年 3月 鶴岡東高等学校常勤講師退職

平成23年 3月 イヨテツケーターサービス株式会社契約社員採用・
指定管理先として愛媛県歴史文化博物館に出向

所有資格

高等学校教諭専修免許（地理歴史）・学芸員資格

二神島、二神墓地を訪ねて (大型五輪塔及び廟墓ラントウから)

安岡 道雄

はじめに、

平成18年秋の早朝、高浜より高速船に乗り二神英臣事務局長と共に二神島へ日帰り渡海をした。目的は石造物調査である。幸い以前から島へ渡る日程を依頼していた処、氏の快いご好意のお陰で実現することが出来た。

この時の調査は帰り便の都合により短時間であったが、島の人情豊かな人々の事や平和な漁村の風景は今も心に残る懐かしい思い出となっている。あれから5年余りの月日が経過し、その時に採寸した五輪塔や家型石廟など数基について、調査報告を残した状態のまま気になっていた。今回を機に未発表の怠慢をお詫びし、当時の実測値についての拙い個人的見解の一部を述べてみる事にする。

(一) 大型五輪塔について

二神島は瀬戸内海西部（防予地方）における海の要衝である。島内二神墓地の大半を占める中世石塔群は、まとまった量、質共に一流で墓地から見る葬送、供養形態の研究上、貴重な島の遺産と言えよう。平成12年の神奈川大学日本常民文化研究所のチームによる第三次調査以来、特に注目される処でもあり、この成果を基に更なる会の発展を期待する者である。この頁では三の段の中世墓地の中心的大型五輪塔を取り上げ考えてみる。

先に五輪塔の意味について自分なりの解釈を説明する。五輪塔は胎蔵界大日如来の三昧耶形（さんまやぎょう）である。つまり、密教での本尊大日如来はそのまま阿弥陀でもあり、五輪塔を建てるこの意味は「死後成仏し往生できる」に集約出来、本尊大日如来と一つになり即身成仏すると言う事であろう。一般的には五輪塔を墓地に造塔、納骨したりする事で一体と成し、同様の効果を生む思想（目的）と言

えよう。

では話を本題に戻す。二神墓地の一段から五段及びその周辺に散在する供養塔類の中で、とくに中世の景観の強い三の段に注目し、その中の五輪塔「水輪」とその残欠が落下したと考える一の段「空輪」は本来の一体型が想定出来、この2つの部位を併せると大型五輪塔が見えてくる。復元図作成を以て、その寸法や同一石材からの周辺類例と形態差について時代判定を考えてみる。

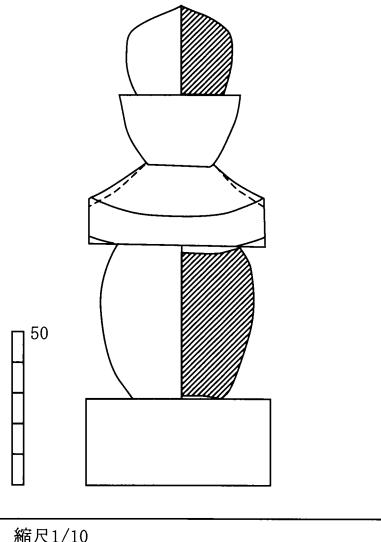
先ず三の段の奥側「水輪」から近在の同石材である凝灰岩製品を比較参考資料として在銘基準塔七基の水輪（北条夏目、福性寺二基、中島真福寺、伊予長泉寺、稻荷、及び紀年銘品に順ずる塔としての今治、端谷推定鎌倉後期）より説明する。

この「水輪」は伊予の白石（しらいし）とも呼ばれ中予一帯に多く産出、分布する石材である。文脈整理の為、以降大型水輪を「二神水輪」と呼称し、大型空輪を「二神空輪」で話を進める。

「二神水輪」の全体の様子は縦長式の球円形ではなく側面の張りの少ないタイプであるが、宝塔の有する特有の首部造りはなく五輪塔水輪は明らかである。亦、三の段五輪群の中でも最大で、高さ49.4センチ、最大径48.1センチで最大幅の位置は下から55%の所にあり、ゆったりゆるやかな壺型と言える。また、火輪部と地輪部に接する水輪上下の径は上端43.0センチ、下端で28.5センチとなり、特徴は、中島、真福寺水輪部の貞治元年（1362）銘と比較的に類似している。南北朝期に多い形態を示し、縦長で下端径の窄（すぼ）まり率の高い真福寺は、上端／下端系数1.72で、対する「二神水輪」が1.47と窄まり率は低くゆるやかとな

二神島 二神墓地
復元想定図

1の段 大型空輪
3の段 大型水輪



る。その事を年代に当て嵌（は）めると、北条夏目（福性寺）の元享2年（1322）との中间値（1.12）を示し、この計測値でみると南北朝初頭頃の造立と考えられ、真福寺との高さ比較では二神分で6%高い値である。

高さ／最大径の率の大きい方を古式と考える時、その値は中島真福寺の0.83の径と広くなり、二神分で1.03と同寸に近づく。この事は数値上、「二神水輪」が新しく真福寺塔は古式となるが、特に重要視点の下窄まり率の少なさと最大中心径が下から55%に位置して中心部に近づく。全体の縦横サイズが50%弱の大型タイプの三点を挙げ類例比定をすればすれば、北条福性寺元享2年（1322）と正安4年（1302）銘の二基及び後者水輪と同型を有する今治端谷（凝灰岩製）の事例、縦横比0.77には至らないとしても、1330年を前後する鎌倉後期から南北朝期の境目として、時代の過渡期型と考えられそうである。編年区分での線引きは何時の時代も流行に新旧混在があり、半世紀程度の幅は付き物であろう。

また、総体的に「二神五輪」では一般的な大日如来の真言であるア・ヴァ・ラ・カ・キヤを各輪四面に刻す彫り込みがなく、中予地方の伊予の白石系の分布では多い形式と見られる。造立時には墨？書記入のあった可能性も考えられるかもしれない。

当地凝灰岩の地方色の傾向は、容姿、形態的に伊予東部（道前、今治地方）に多い花崗岩製流通品とは大幅に格差（高さで一割以上）が見られ、時代判定での地域石材と形態把握は特に重要と言えよう。

次に一の段大型空輪、「二神空輪」を考えてみる。総高28.8%，最大径35.6%，下端径28.8%で背は低めである。先端部の角度130度で尖（とが）りを造り出し、左右へゆるやかにムクリながら傾斜する。その後上部最大径で肩が張りやや内向きぎみの直線でゆるく降る。

「空輪」最大径の位置に類似し、下から60%の所を示す事から、双方の時代的な張り出し位置のバランスは一致する。

空輪部は石材を問わず全国的に在銘記入のない部位の為、様式特定から見た年代判定しかなく、現在まで残る五輪塔（地、水、火、風、空輪）全部位が揃っていたとしても、本来の同一体である保証は未定

であり、各種編年様式で探る方策しかない現状と考える。

この事から「二神空輪」を見ると、高さ幅共に大型で凝灰岩製では県内でも数少ない最大級のものである。空輪の大きさではこのクラスになると総高の高い五輪塔六尺や九尺塔でも余りサイズは変わらなくなる傾向があり、南予西予市宇和町の明石寺五輪塔の古式（推定鎌倉初期頃）供養塔も同様サイズであり時代による好事例と言えよう。また同型では伊予市長泉寺、東温市仙幸寺、北条市福性寺等の古刹寺院に分布し、その墓地では鎌倉後期、中期頃の造立塔が多く見られる。

では空輪、水輪からその復元図を基にその他の部位についての形態予想を推定してみる。長方形の「地輪」は中世大型では幅に対し、高さの1／2以下（伊予の凝灰岩製品）は評準的であり、現存する今治端谷五輪塔を参考比定しての推測で高さ28^{セン}、径60^{セン}を想定した。一方、三角形状の「火輪」の軒全体は真反り風形式を留め、左右でやや厚みを増し、屋根勾配がゆるく背は低いと考えてみた。

次に空輪の受け部分である半月形風輪部では、二神墓地でも多く見られる形式、空風輪分離式タイプで中世前半に多い傾向品と石材から想定は深鉢型であろう。この時代（鎌倉南北朝）に多い地方特有の背が高く側面は丸みを帯び下方内側に窄まる形と考えられる。

総括としての全体像は総高五尺余りのこの地方での「中世大型五輪」と言えるものである。「伊予の白石」の全体分布から見て鎌倉末期から南北朝初頭における水輪の高さを強調した五輪塔と言えよう。

伊予の府中、今治周辺で大型花崗岩製石材による在庁官人層などの背の高い五輪塔も見られるが、河野氏の本實地、北条（風早郡）側では在地性凝灰岩の古い五輪塔は全体に背（総高）は低い傾向と考えられる。

二神島「大型五輪」は三の段中世墓地の中で初期造立の中心的役割りを占め、その周りに小五輪塔などの供養塔類が建立されていった経過を辿る事は他県での墓地事例で知る処であり、この墓地における「大型五輪塔」は初祖的性格を持ち、開発始祖での地頭及び荘官等の有力層と考えられよう。この当時流行した「逆修塔」又は（預修供養）として造立した可能性は強く、生前に自らの法事を執り行うと同時に父

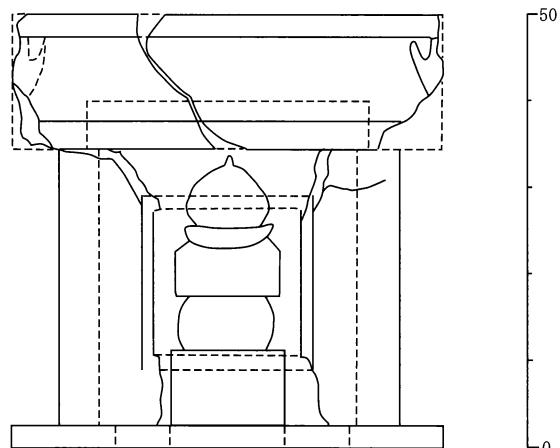
母等の追善供養を併願した塔と推測する。併願供養の場合はその功德の七分の一は死者が受け、残り六分は追善をした本人の得分となり、願主のみの場合、七分の七の全得を願主が受ける事になる。この場合、個人や集団（結衆や同一信仰の結束による地縁、血縁等）の願主があり、また純粹な遺骨など納めた「墓塔」を始め「納経塔」「総供養塔」などの他に、逆修後に納骨し「墓塔」として供養した例を含め、その目的や願意の内容は多様である。

島内二神墓地全般の供養塔類に中に中世前半に造立の多い層塔、宝篋印塔、宝塔類が見当たらない事の意味は、風早や中予における有力墓所の事例の様な各種混在とは異り、五輪塔中心である事から考えると守護河野氏周辺と二神氏の主従位置関係及び、官位等の問題と併せた相関関係が見出せそうである。

(二) 廟墓ラントウについて

ここでは一の段にある家型石廟について当時の採寸に言及せずに、その性格を述べてみる。一の段二基の石廟は、近年の全国的研究による名称から考える限り、水谷類氏の提唱する名称「廟墓ラントウ」が妥当と考えられよう。氏はこの「廟墓ラントウ」が弥勒（みろく）信仰を基に造立展開した事を指摘し、全国を対照に調査して来た研究者である。今回はその関連からその流れを受けての二神島内石廟の一考察してみる。

先ず一の段道側の二基の内一つの石廟（切壺式家型造り）は大型で欠損もなく、よく原型を留めてい



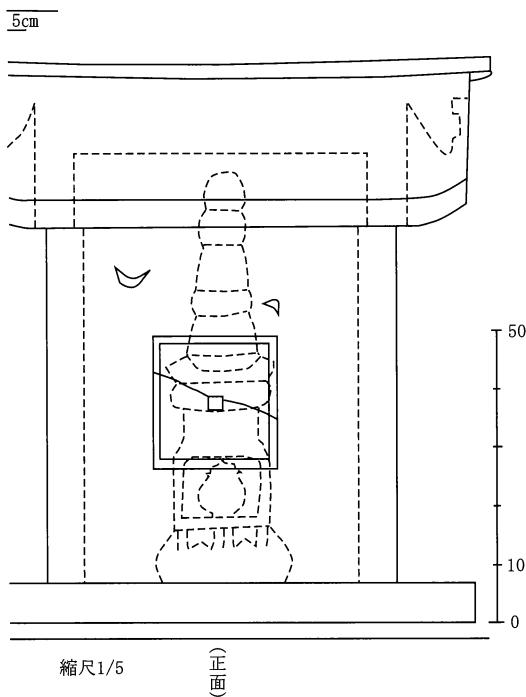
る。この安産岩製石廟は、豊田渉氏の推定、確定とする家種の石廟であり、その前方には家種の後妻の中型石廟（半壊）が見られる。石廟が本人（家種）の墓標の可能性もある事は豊田氏や日本常民研諸氏の研究成果で既に明らかな事から藩政初期中興初代の石廟は、海の民水軍一族の尊崇対象として意味を持つものであろう。

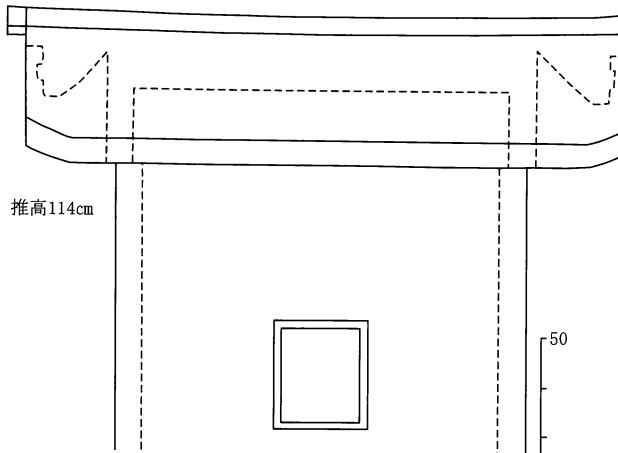
家種の石廟内部には小型宝篋印塔（平野石＝安産石、山口県青野火山帯の支脈に属す）を安置し愛媛県内に分布する文禄、慶長頃に多い16世紀前後で普及するタイプの基礎、塔身部一体型を内蔵する。一方、東側後妻内部には16世紀末葉頃の一石五輪塔安置している。

石廟の外観は屋根の内側を刳り貫き、下部塔身部は前面に小さな窓を設け、平常は下界保護用の為、中心部に小さな穴を明け塞がれてい る。反面で後妻の窓は正面部面積の割に大きくその塞ぎ石材は損壊し既に無い。また屋根天井部は前者の場合、丁寧な三角形彫りに対し、後者は丸彫り式粗造りである。

この二神島三基（後述の一基を含む）と三の段の基礎、塔身部の二基の宝篋印塔全体から見る限りにおいて、外観の造りと内部の安置物の違い等からは、人物に合わせた格差選択が見られ単なる時代編年形態格差ではなく時代的な短期導入による人物、目的に合わせた品質ランクを示しているように思える。残る形態内容については紙面の制約もあり実測図にて参照願いたい。

一の段 家種の廟墓ラントウ





二神島オクビにある廟墓ラントウ復元図

同類石材第三の石廟に二神港の外れ、城山の元、お首（ホノギ）に特大（屋根のみ残し、塔身部は全壊）を見る。この場所は代々西野家が祀り、本場山口県内でも類例は少ない廟墓ラントウで文禄、慶長の役後の伝承から家種の父（通種）の廟墓と考えられている。照り屋根式でゆるく反り、天井内部は家種同様、三角の深掘りに本体正面部は正方形を成し、窓は後妻廟墓と同サイズである。造立時期は慶長から寛永前後の家種石廟と同時期頃と考える。

生産地周辺の同型対比と精査、年代判定は今後の課題と言えよう。四国内、愛媛県への平野石廟墓ラントウの流入は珍しく、筆者の知る処では二神島のみである。

数年前、豊田涉氏と周防大島への調査予定であったが、当方の手違いより現地へは行けず、結局、写真と図面を頂きながらも細部比定の結果報告を提出出来ないまま今日に至った事、当人へ深くお詫びする次第である。

最後に「二神島廟墓ラントウ」の造立意味について全国から見た地方の形態変化を探り簡単な結論とする。

二神島には小学校の近くに近年迄、両墓制の埋め墓（埋葬墓）である墓上施設、もがり屋（シズクヤ、シズメ堂など山口県の名称）を造

り板状柵と屋根のある木造家型墓の風習を残す。この周り柵は四九枚の板塔婆等（四十九院全院名を各板墨書記入）で廻りを囲い正面上部に「静寂」文字を記名する。これは兜率天（とそつてん）四十九院（内院）を表し、弥勒信仰の表現様式である。

時は中世末（桃山期）から近世に至る前後の頃、平安時代に流行する流れを受けて大流行した信仰に高野山（真言宗）の基本信仰（弥勒信仰）がある。その内容は、弥勒信仰には下生信仰と上生信仰があり、弥勒が下生していない現在、弥勒の住しておられるのが兜率天（四十九院の内院、宝宮）であり、上生信仰では、死後、弥勒がおられる兜率天に往生してその傍（かたわ）ら、つまり、四十九院に住みたいと願う信仰である。高野山を開いた弘法大師、空海は亡くなつておらず、即身成仏で今も高野山に入定し、現在兜率天四十九院で修行しており、将来弥勒仏がこの世に下生して龍華樹のもとで三会の説法が開かれるその時を待つ弥勒信仰は全ての人々を救済する信仰形態であり、従つて空海を信仰すれば、たとえこの身が死んでも空海と共によみがえる如くである。この信仰は中世から近世の移行期、多くの大名靈廟が競つて高野山奥の院に建立した。その様式は四十九院外柵造りと五輪塔がセットになった造りから、真言宗で流行以降、浄土宗もこの流れの影響を受け採り入れたようである。

二神島の木造もがりの設（しつら）え及び石廟は埋葬時あるいは四十九日を目処（めど）に建てる「埋め墓」と石廟の詣（まい）り墓=祀り（祭り）墓が島内で共存しており、初期段階の「もがり屋」と半永久的な祀り墓の存在は、石廟の四十九院の痕跡はなくても、同様の弥勒信仰に根付いた石廟と言えよう。

全国各地で造立の「廟墓ラントウ」は弥勒信仰の考えの元に建立され、内部一石五輪塔、板碑、小型宝篋印塔、石仏を入れる事もあり、四十九院形式を内外に墨書や彫刻し、簡略式やその後の痕跡消失した流れを辿る遺品も多いが、真言宗の流布より全国に普及伝播した経緯が伺える。

総合的にみる「二神廟墓ラントウ」は生前逆修造塔や遺骨を埋蔵する墓塔の建立であったとも考えられ、愛媛県内では、当時流行分布の

多い香川産（豊島石、角礫凝灰岩）の流通に押され、山口県産の平野石（安産岩）廟墓ラントウは隣接の二神島迄に留まり、以降小型石材（一石五輪や近世宝篋印塔）のみの流入に限定される。

二神島において防予境界の石材文化の流れは中世五輪塔（伊予の凝灰岩）の主流から江戸初期の真言宗、弥勒信仰を受け、加工し易い軟質系豊島石ではなく硬質の安産岩を選択した事は、この地域の県境における海の民の交流を物語る必然性であったのかもしれない。字数の都合により廟墓ラントウの複雑な説明、島内墓地内全体の視点等、要点を得ない不十分な報告の事、筆者の浅学非才の至りにて平に御容赦願いたい。

おわりに、

二神家大型五輪塔及び廟墓ラントウは共に県内屈指の海の民、水軍墓地にあり、また中世供養塔類の量、質において周辺島内では珍しく貴重である。河野氏有力水軍の一翼を担う二神水軍の力量を知る有力な証拠であり、今後の関係者の展望を期待する者である。最後に二神系譜研究会事務局長、二神英臣氏及び常任理事、豊田渉氏には再三の資料協力を頂き重ねて感謝申し上げる次第である。

安岡 道雄氏 愛媛県南宇和郡愛南町城辺甲2349-2

愛媛県西南部と高知県西部の地域を中心に歴史文化を相互に探求して学びあい、交流しあうという目的で平成11年7月に発足した西南四国歴史文化研究会の会員で、石造物の調査研究に精力的に取り組んでいる。これまでにも同研究会論叢「よど」でも調査報告などを度々発表してきた。主なものとして「西南四国と中世宝篋印塔」（2005年3月『よど6号』）、「予土海辺部の水軍と石塔群」（2006年5月『よど7号』）、「伊予の石祠型墓石を訪ねて」（2007年5月『よど8号』）、などがある。

なぜ、二神島・松島なのか

常任理事 豊田 涉

●二神島の名前の由来……

「二神島、ふたがみじま。二つの神の島？」と言われることがある。

「しかし、神様が二つある島はいっぱいあるし、日本では神様は、二つくらいじゃなく、数えきれないくらいの神様がいますからね……」と答えるが……。

「じゃあ、島の名の由来は……？」

「う～ん……はっきりしたことは、わかりません。古くから、海と山に関する二つの神様があったからと言わてるけど、そんな状況の島は全国にいっぱいありますし……」。これじゃ説得力弱いな～。

同じ名前で二神島っていうのが、もう1つ長崎県平戸市の北方沖にある。大二神島・小二神島という。大と小の一対で二神島なのだろうか。今は、無人島で、大二神島には燈台がある。今のところ全国で、それ以外に二神島という島は無いようである。

物事は「対」でなければ成り立たないものが多いのは事実だろう。子供は男女が居なければ普通には、生まれないし、ほとんどの動植物の世界ではそうである。雄と雌、狛犬も仁王像も阿吽で一対、神様も、伊邪那岐・伊邪那美の二神が最初。人間の身体も一対で、眉毛・目・耳・鼻の穴・手・足等、一対でできている。

●伊予史談における「二神島の研究」

「伊予史談・第72号」（昭和7年12月25日発行）で、菅菊太郎氏が「二神島の研究」と題して書かれている。それには、

A説……元は松島と言っていたが、後、二神島と称した。（「忽那嶋開発記」には、二神島の古名は松島と書かれている。）

B説……山口県から移った豊田氏が来島したときに二神島と称していた。（豊田氏が来島した時期が分からないので、二神島と呼んでいたかどうか不明。）

C説……島に古くから二柱の神（八幡神、厳島神）があり二神島と唱えた。（二神島には、現在の宇佐八幡神社のあった場所に、松島神社という氏神様があり、宇佐から勧請したとき、荒神山に遷されたといわれ、今も二神豊田氏が祀っている。）

とある。いずれも、時代設定がいつなのかがわからないので、決定的なものではない。ちなみに、菅菊太郎氏は、C説を推している。

●瀬戸内海絵図の「二上」

「二神文書」などをはじめとする室町期から江戸期の文書類には「二神」と記載されている。比較はできないかもしれないが、江戸時代に描かれた瀬戸内海絵図などは、二神ではなく「二上」と表示されたものもある。

二神島は、南北約1キロメートル、東西約3.5キロメートルの細長い形をしており、島の北側及び南側から望むと一対とも思える二つの山が象徴的に見える。東側にあるのが二神島で一番高い米山（約184m）、その西側に、米山より少し低い妙見山がある。二つの山（上、頂）があるので、「二上」と表示したのだろうか。妙見山の名前については、山口県から入ってきた豊田氏が妙見社を勧請したときに名づけたと思われ、それ以前は、違う名称だったかもしれない。



妙見山

米山

●二神島は松島

「忽那嶋開発記」によると、二神島の古名は松島だと記載されている。現在、二神島の荒神山に松島神社がある。集会所のすぐ裏の山であり、昔から桜の名所として知られている。二神島では、荒神山イコール桜の名所と言うことだ。明治時代以降、荒神山の麓には松嶋学校があった。このほかに、松島旅館があり、島の銭湯は松島湯といい、老人会の名は松島クラブだった。(婦人会、青年団は、二神婦人会、二神青年団だった。)。案外、気をつけてよく考えてみると、二神島は松島でもあったということになる。しかし、この松島という名も、「島に松が多くあったから松島」と呼ばれていたというが、松の木の多い島はいっぱいあるのに、なぜ二神島が松島なのだろう……。

●はっきり分からぬ……

いずれにしても、二神という名の由来ははっきりしない。二神島の人たちは、「二つの神様があるから二神言うんよ。」というのを信じて疑わない。

二つの神は、厳島神と妙見神であったり、厳島神と八幡神であったりする。ここでは、二つの神のうち厳島神は揺るぎのないものようだ。厳島社の文献での初出は、弘仁2年(811)「延喜式神名帳」に見える。それとも、二つの神は米山と妙見山の2つを指しているかもしれない。

二神と書いて「にかみ」、二上と書いて「にじょう」など、読み方はいろいろある。二神と書いて「ふたがみ」と濁るものも、妙に気になる。この字なら「ふたかみ」と読むのが妥当かもしれないのかなとも思ってしまう……。いろいろとあってもいいと思うが、はっきりとするものは見当たらない。

(平成24年3月6日)

二神島の「三月様」と「松島神社」^{さんげつさま}

豊田 渉

1 三月社（三月様）

私は小学校に上がる前、よく祖父母の家で寝起きしていた。祖父母の家は、二神島の集落から西へ1km行ったイナグラ（稻倉？）という場所にあった。戦前からその場所に造船所を構え、木造の機帆船から伝馬船などを造っていた。祖父で何代目になるのかは分からぬが、船大工の家だった。造船所、製材所は何十人の職人を抱え、島では一大産業の一つであったともいえる。その横に、祖父母の家があった。妹ともよく泊まっていた。今考えると危険極まりないが、造船場を遊び場にしていて、足場から転落したことも何回かあった。なのに、なぜかその場所が好きだった。特に、進水式では船がレールを滑って海になだれ込み、見事に浮かぶさまがたまらなく嬉しく楽しかった。



▲三月社

その祖父母の家がある造船所から、東200m位の斜面に祠があった。早起きをして、祠の下まで続く砂浜を歩いて、祖父とよく参拝していた。それは、三月様（さんげつさま）と呼ばれていた。幼い私にそんなものはよく分からず、むしろ、参拝に往復する砂浜で見つ

けるハマンボという小さな生き物や漂流物のほうに興味があった。その、三月様のことについては、それから何十年もすっかりと頭のなかからは遠のいていた。再び、三月様について調べ始めたのは、二神系譜研究会が発足してからだった。

● 「忽那諸島の民俗」に記載の三月様

「忽那諸島の民俗」（昭和43年4月、愛媛大学農学部付属高等学校郷土研究部発行）の中に、三月様について取材した記述がある。

三月様……昔、サンゲツという人が住んでいた。大般若経を書き残して死んだ。そこで人々は、かけの浜に祠を建てて祀った。9月23日が祭日で、その翌日には大般若経箱を村人が担いで各戸をまわる。各家では、これを拝んで家内安全を祈る。

「忽那諸島の民俗」45ページ、民間信仰

● 「二神氏末家之次第」に記載の三月様

二神島本家に伝わる

「二神氏末家之次第」（安永10年＝1781）に、三月についての記述が残されている。

二神氏末家之次第の二神家種三男種末の女（娘）のところに「嫁宇佐三月此三月者豊前宇佐ノ社職タリシカ二神嶋ニ来テ居住ス」とある。これで考えると、家種は、寛永5

年（1628）4月10日に没しており、その孫娘の夫が三月という人物になるので、17世紀の人物だと思われる。二神島では古くから、「九州からやって来たサンゲツという人物が、庄屋の娘と一緒に、安養寺にある大般若経を筆写した」という話が伝わっている。

二神島の二神春子家（二神種末の末裔の家）には、三月を祀る三月社の幟が残されている。家伝によると、9月23日（旧暦？）に代々二神家（春子家）と角谷家（現当主：角谷吉盛）が1年ごとに祀りを執



▲左端に「宇佐三月……」と見える

り行なってきた。三月社のある場所が角谷家の土地（乙363番地：角谷長吉）であると思われ、それで角谷家も関わっているという可能性がある。現在は、秋祭りの日に併せて幟を立て、共同で行っている。



▲二神春子宅にある三月社の幟

●三月とは何者

三月（さんげつ）という人物は、江戸時代前期に豊前の国（今の大分県）、宇佐の社職（神職）で、二神島に来て二神種末の娘と一緒にになった。そして、大般若経の筆写をしていたという。大般若経が安養寺ではなく、宇佐八幡神社に置かれていた時期があった。江戸時代に安養寺が2回の火災に遭ったときには、そのおかげで難を免れ、無事に現在まで受け継がれてきた。般若経は僧侶の関わりが強いと思われるが、神仏習合の時代においては、社職が関わっていても不思議ではなかったのだろうか。ちなみに、二神氏が勧請したという妙見社は安養寺の別当、つまりは神社が寺社の管理に置かれている形だ。

今のところ、三月という人物については史料が少なく、これ以上のことは分かっていない。ただ、縁あって二神島に九州から来て、二神一族の一員として島の中で役割の一端を成していたことが考えられる。

2 松島神社

現在の二神島にある集会所の山手にこんもりとした丘があり「荒神山」と呼ばれる。この荒神山は桜の名所で、「海の民ふたがみ第10号」の表紙写真左にその様子を垣間見ることができる。そこに「松島神社」がある。住所は、二神甲500番地。

言い伝えによると、この松島神社は、現在の宇佐八幡神社がある場所にあったが、長門から来た豊田一族が宇佐から勧請したときに、氏神様の「松島神社」を荒神山に遷したという。

この松島神社は、現在でも秋祭りの日に幟をたてて神職を呼び、お祀りしている。時代は知れないが、二神島本家二神家から分かれた豊田一族が交替で管理していたと思われる。現在は、荒神山の東隣地にある豊田繁昌家が行っている。繁昌家は、大正から昭和初期にかけて海岸部から現在の場所に住居を構えている。それ以前も、繁昌家が祀っていたのだろうか、それとも別の豊田家と一緒に行っていたのかは、定かでない。

この松島神社のある場所の隣に、平坦な畠地が今もある。ここに豊田家一統の住居があり、「テントモ屋敷」と呼ばれていたという。この豊田家も、ずっと松島神社を祀ってきたのだろうか。やがて、その場所からいなくなってしまって、繁昌家との交流は豊田一族として以前からあり、交替で祀っていたのかもしれない。繁昌家は、後になって現在の場所にたまたま移っただけのようだ。それは、借金のかたに、以前住んでいた家は人手に渡り、荒神山のすぐ東の現在地へ大正9年（1920）頃に移ったと祖父たちから聞いている。今、テントモ屋敷の痕跡は無く、その豊田家もよくわからない。

松島神社の「松島」については、別稿「なぜ、二神島は松島なのか」



▲松島神社（二神島・荒神山）



▲豊田繁昌宅にある松島神社の幟

でも述べているが、「忽那嶋開発記」の中に「二神島の古名は松島」という記述がある。松が多かったから松島だと伝えられる。他にも松の多い島はたくさんあるのに、なぜ二神島が松島なのかが分からぬ。ただ、現在も城ノ山（二神港東の出入口にある岩山）から南東にある小丘の厳島社（今はこの場所になく平成21年（2009）6、7月頃に移転）のあった場所を過ぎて宇佐八幡神社に続く尾根は、宇佐八幡神社所有地・神域であり、そこには見事な松林が続いている。今はもう枯

れ死して面影は古写真でしか確認できないが、島の人は、この尾根にある松を「お林の松」と呼んでいた。

厳島社は元々、城ノ山の附近にあったのを南東の小丘に移し、更に現在地に移しているのである。ということは、古くは厳島社と宇佐八幡神社の神社地（神域）をつなぐ場所に松林が続き、他の島々には見られない形態を成していたので、あえて「松島」と呼んだのかもしれない。その神社地（神域）の範囲内には城ノ後（ジョウノシロ）の墓地区域が含まれている。神と仏とが混在している区域でもあった。

3 おわりに

三月様と松島神社に共通しているのは、どちらも二神本家との関わりが強いのではないかということである。三月様は、二神本家の末家である種末の末裔二神春子家が、松島神社は、二神本家から分かれた

又末家とする忠次の家（「二神氏末家之次第」から）の豊田繁昌家が世話をしているという点である。この忠次の家は、二神姓から再び豊田姓を名乗っている。二神春子家も豊田繁昌家も家紋は、二神本家と同じ「丸に一文字」を使っているのも興味深い。

文書類が乏しい中で、系図や家伝などによっての稿を起こすことは憚りを感じるが、今後の研究の一助にという一念でご容赦をいただきたい。

海の民・二神氏の信仰 —宇佐八幡と妙見社

二神 英臣

1. はじめに

二神を名乗る私たちや関係者が初詣や、輪越し、秋祭りなどでお参りする場合にはどこの神社を選んでいますか？元来氏神と云うのはその地域の豪族である古代の氏族組織であるウヂが祖神または守護神として祀っていた神のことでした。

二神氏の祖先は豊田氏であり、さらに系図を遡ると藤原氏に辿り着きます。その藤原氏の氏神は祖神の天児屋根命を含めた春日神（春日大社）を氏神としており、祖神に基づいた古い形式に分類されます。この説に従えば二神氏の氏神は春日神（かすがのかみ）ということになります。この神は、神道の神で、春日明神または春日権現とも称されます。

二神氏の信仰についてこれまで系統的に調査研究された記録は少なく、特に系譜全体を調査して分類するような研究は殆どなされていませんが、これまでに二神氏や二神島について書かれた著作や論文の中で「二神氏の信仰」について触れた歴史家や研究者、関係者の方々が存在しています。

今回、特集「二神氏発祥の時代を探る」を編集する中で、この問題について、これまでに歴史家や研究者、関係者の方々が取り組んできた「二神氏の信仰」の調査研究報告を確認しておく必要があると考え、この稿を企画したものです。

『海の民 ふたがみ』第14号の特集は、二神氏発祥の時代の伝承や史跡について様々な角度と視点からの解明を試み、ここではそれを「信仰の側面」から検証するものです。皆様が季節や、年間諸行事を通じての神社参拝や日々信仰の参考になれば幸いです。

2. 宇佐八幡信仰—豊田氏の氏神

二神氏の祖先は長門国豊田郷を発祥とする豊田氏ですが、その豊田氏は宇佐八幡神宮を氏神として尊崇してきました。源平の時代、源氏側に就いた7代目豊田種弘は豊前国宇佐から八幡宮を勧請し、文治3年（1187）東八幡宮を、さらに建久2年（1191）西八幡宮も宇佐から勧請し建立しました。種弘はその後豊田郷の各地に源氏の氏神である八幡宮を建立し、それは8代目の種隆の時代まで継続され、その後宇佐八幡神宮は豊田氏代々の氏神として継承されてゆきました。（『豊田町史・八幡宮の創建』）

▽豊田氏の信仰

豊田氏と八幡宮信仰の関係について豊田町の郷土史家中野盛紀氏は論文「豊田氏と八幡宮」の中で次のように述べています。

「豊田氏は関白道隆の第四子「隆家」を祖とし、古代日本神道の一つ、本土の最西端の靈峰「大神山（華山）」を本山として、平安時代に定住した。続いて若宮八幡宮が、長門国大津郡の北西部各地に勧請され「豊田郡」が成立。次いで鎌倉時代は次々に宇佐八幡宮を勧請し、住民共ども豊田郡は繁栄した。然し豊田宗家12代、種長一族郎党が自決したあと向山に分立していた13代、種藤一族は大内氏に服属したが、東八幡宮の社坊日輪寺の焼亡に伴ない豊田氏は終り大内氏と運命を共にした。以上が豊田氏と八幡宮の概要である」

このように豊田氏の発祥と豊田郡の成立、宇佐八幡宮の勧請と豊田氏の盛衰を簡単に述べ、豊田氏が八幡宮（東八幡宮）を創建し豊田郷の鎮守としてゆく過程について「この八幡宮の創建者は、六代豊田郡司、輔隆か、7代種弘か、何れにしても種弘とするのが最も妥当のようである。種弘は地方の郡司でありながら、仁安2年（1167）正月18日、「正二位」の官位を授かり（27歳）、また、この年2月11日には、平清盛は「従一位、太政大臣」に任官した（50歳）。種弘は清盛に次ぐ「左大臣」相当の官位である。余程何事かがあって清盛の「覚え」に預かったものようである」「一方、この年、周防の大内氏の16代大内介盛房は常陸国に、17代大内弘盛は、下野国に、鷲頭氏祖盛保は

伊豆国に、忠遠は安房国に、それぞれ遠流されている。周防国街の在庁宮人として、余程太政大臣に対して不都合があったのであろう。後、治承2年（1178）天体異変に内裏の炎上等、天変地異があって恩赦があり、10月8日多々良一族は東国より11ヶ年を経て召還された。この通り豊田氏は八幡宮創建と共に隆盛期を迎える。豊田郡各地の若宮勧請に続いて、豊田郡本郷に、文治3年（1187）3月15日、総鎮守として改めて八幡宮を宇佐より勧請創建した。豊田種弘49歳の時であった」

（「豊田氏と八幡宮」中野盛紀著）中野盛紀氏は豊田氏が豊田郷に宇佐八幡神宮を勧請した経緯をこのように述べています。

3. 妙見信仰—大内氏の氏神

次に、二神氏が尊崇する妙見信仰について考えてみました。

妙見信仰とは、一般には仏教でいう北辰妙見菩薩に対する信仰を云いますが、その原姿は、道教における星辰信仰、特に北極星・北斗七星に対する信仰です。

道教では、北天にあって動かない北極星（北辰ともいう）を宇宙の全てを支配する最高神・天帝（太一神ともいう）として崇め、その傍らで天帝の乗り物ともされる北斗七星は、天帝からの委託を受けて人々の行状を監視し、その生死禍福を支配するとされた。そこから、北辰・北斗に祈れば百邪を除き、災厄を免れ、福がもたらされ、長生きできるとの信仰が生まれ、その半面、惡行があれば寿命が縮められ、死後も地獄の責め苦から免れないともされました。

この北辰・北斗を神格化したのが『鎮宅靈符神』で、それが仏教に入って『北辰妙見菩薩』と変じ、神道では『天御中主神』と習合したといわれます。この北辰・北斗信仰がわが国に入ったのは推古天皇の頃といわれますが、その真偽は不明。ただ、奈良・明日香の高松塚古墳の天井に北斗七星が、北壁に北斗の象徴である玄武像が描かれ、また正倉院御物にも金泥・銀泥で北斗七星が描かれた合子（ゴウス）があることなどからみると、奈良時代に知られていたことが確認されています。

この北辰・北斗信仰が妙見信仰で、長門、周防の守護大内氏の氏神となりました。

▽大内氏の信仰

山口県下松市の妙見宮鷲頭寺は、推古5年（597年）大内氏の太祖琳聖太子によって開かれ、大内氏の氏神として栄え、妙見信仰発祥の宮寺と言われています。現在の下松市の地名発祥とも深いつながりがあります。この寺の妙見様が、推古3年9月18日に、松の木に降臨したことにより、下松の地名ができたと伝えられています。鷲頭寺の本尊は妙見大菩薩で、真言宗御室派に属しています。

多々良姓は、周防、長門地方を平安時代の昔から長く治め妙見信仰の最大の庇護者だった大内氏の古い姓です。下松市、光市、田布施町などの町々は、瀬戸内海に連なる北辰尊星妙見大菩薩と朝鮮半島、百濟の国の琳聖太子の来朝帰化の伝承の地です。「降星伝説」この地では、妙見信仰は長く保護され、人々に根付きました。

南北朝時代には、大内弘世は南朝側として豊田氏をはじめ周防、長門の豪族を服属させ、「建武親政」に協力すると、正平18年には一転、北朝側に寝返って周防、長門両国守護に任せられました。この寝返りは大内氏の存続を守り、南朝の皇子「良光（ながみつ）親王」を密かに匿い、守る為の算段だったとも伝えられています。

▽豊田氏と妙見信仰

南北朝時代、大内弘世は南朝側として「建武親政」に協力し、北朝側に属した厚東氏と対立してゆきました。厚東氏が正平23年（1368）頃に滅亡し長門の形勢が定まり、豊田氏も大内氏に服属する中で豊富な旧領地を安堵されてゆきます。14代目種秀のころであったと云われます。大内氏の氏神である妙見信仰が豊田氏にも影響を与えるようになるのはこの時代ではないかと見られます。この頃、豊田氏は豊田郷の神上山（華山）から北方に見える「北極星」の真下の山を「妙見山」と名付けました。今日の長正司の城山になります。そして神上山（華山）の末寺「真言宗明見寺」を建立し妙見信仰を始めたのではないかと考えられます。「二神氏系図伝書略記」が伝える後継者を巡っての種世、種家間での家督争いはこの後に起こることになります。

また、「真言宗明見寺」は寛永14年（1637）長勝寺の修行僧「淨雲」

が、この跡地に「明見山弘願寺」を開山し、今日に至っています。

4. 海の民の信仰

海には陸とはまた違った歴史と価値観が存在しています。かつて海にはそこを生活の基盤とする者たちがいました。「海の民」と呼ばれる集団で世界中に存在し、ある意味では共通した価値観による信仰や生き方が存在しているとも云えます。

▽「海の民」と北斗七星信仰

古くから、船人、「海の民」の航海には、北斗七星の導きが必要とされ、それは神様の導きのようなものでした。又、海の航海の危険をお守りいただく、大切な神様。妙見様は北極星という地軸を示す星です。日本では3～5世紀頃には宗像・住吉・安曇の民たちが瀬戸内海・玄界灘を支配し、日本と大陸との間の海上交通の護衛者として活躍していました。住吉・八幡・伊勢などの神も「海の民」の信仰をそのルーツとしていると云えます。

中世には初期の頃、史料上の言葉で海賊と呼ばれた水上の武装集団が、後に水軍という研究上の名称を受け組織化されてゆきます。彼らの多くが八幡を守護神とし、そこから源氏の子孫であると称しました。その中でも特に瀬戸内海芸予の村上水軍・九州の松浦党・紀州の九鬼水軍などは大きな戦力を持ち戦国時代に盛んな活動を行いました。また一部の海賊たちは東シナ海を中心に広い活動を行い、周辺諸国から倭寇として怖れられていました。このように「海の民」は世界中で「北斗七星信仰」や日本国内では「八幡信仰」を氏神として広がってゆきました。

▽厳島神社と大山祇神社は「海の民」の守り神

厳島神社が鎮座する瀬戸内海の宮島は、古代から海の守り神として「海の民」に信仰されていました。推古天皇の593年に土地の豪族、佐伯氏による社殿の創建が始まりと云われます。海の神である宗像三女神が御祭神として祀られていて、それを平清盛が今日のように海に

浮かぶ赤い大鳥居を持つ社殿として、大規模に改築したのです。

大山祇神社は山を支配する神であると同時に海の神でもあり、地神、海神兼備の靈神として日本民族の総氏神、日本総鎮守の神として崇敬されてきました。

山の神、海の神、戦いの神として歴代の朝廷や武将から尊崇を集めた神社で、源氏、平家をはじめ多くの武将が武具を奉納し、武運長久を祈ったため、国宝、重要文化財の指定をうけた日本の甲冑の約4割がこの神社に集まっています。

この地に鎮座した由来として、大山祇神の子孫の乎千命（おちのみこと）がこの地に築いたとする説、伊豆国の三嶋大社（現、静岡県三島市）から分霊を招いたとする説、朝鮮半島から渡來した神であるとする説など諸説がありますが、摂津国の三島江（現、大阪府高槻市）からこの地に移されたとするのが一般的です。いずれにしても、かなり古い時代から存在した神社であることは確かで、平安時代には朝廷から「日本総鎮守」の号を下賜されています。この大山積大神を祀ったのが愛媛県越智郡大三島町宮浦にある元国幣大社の大山祇神社です。

5. 二神氏の信仰と氏神

豊田氏は14代目種秀の後継者を巡って種世、種家間での家督争いの結果、敗れた種家が二神島に来島し二神氏を名乗ったと伝えられています（「二神氏系図伝書略記」・片山二神文書）。

種家が二神島に来島した時期や動機について、「二神氏系図伝書略記」に記録された事項については、かつて網野善彦先生も次のように述べ疑問を呈して居られました。

「長門において、大内、厚東氏と並ぶ有力な国御家人であったと見られる豊田氏の一流が、その所領とした二神島に本拠を置いた時期については、諸説が分かれていますが、たやすく断定し難い。……（中略）……「二神氏系図伝書略記」は、この法善を吉種とし、その父種家のとき、はじめて伊予に居住したと記すが、種家の曾祖父種長が延慶3年（1310）、「依長門国二宮就造營之事被成下関東御教書之由、前近江守判形証文有之」とも伝えている。この前近江守は長門守護北条時直、

その前年に二宮が炎上し、造営が行われたことは「忌宮神社文書」によって知りうるので、この記事は正確であるが、種長を吉種の4代前の人とすることは、いかにしても不自然で、恐らくここにはなんらかの誤伝あるいは作為があるものとしなくてはならない。法善=吉種及びその父種家と、この種長とは同世代の人で、豊田氏一族が長門の本拠で氏神として尊崇する宇佐八幡宮を二神島に勧請し、その傍に「浦御堂」を建てたのは、おそらく鎌倉後期、この父子のときとするのが適當、と私は考える」(『歴史と民俗』1 <1986.4>・平凡社 史料紹介「伊予国二神島をめぐって」— 二神氏と「二神文書」(網野善彦))

▽豊田種家二神島に来島、宇佐八幡宮を二神島に勧請

このように、網野先生は「長門国時代から尊崇する宇佐八幡宮を二神島に勧請したのは二神種家、吉種の時代で、その傍らに「浦御堂」(安養寺の前身)を建立したのは鎌倉末期と考える。」と述べています。

また、戦前に『二神島の研究』を執筆した郷土史家の菅菊太郎氏は宇佐八幡神社について「宇佐八幡大神社は嶋内大字二神泊浦と本浦との境をなす出鼻の小丘上形勝の地にあり、社傳には嘉保2年勧請とある由なれど明確ではない」(中略)……嘉保2年は今より恰も820年前に遡る、自ら此説眞なれば二神氏入嶋の前なることは勿論、島内最古の鎮座神のやうであるが、此処には疑しき点がある。されどこの神社が永祿12年より以前に存在したることは、同年二神種長花押の妙見、巖嶋二社御頭文に、八幡社云々の記事あれば疑ふ余地なし、(後略)……」(『伊豫史談』第十八卷第四号「二神島の研究」菅菊太郎・昭和7年12月25日発行)と述べ、宇佐八幡神社が二神氏入島以前の嘉保2年に勧請された。とする「二神島宇佐八幡神社社伝」の記述を真っ向から否定されています。

▽宇佐八幡信仰と各地の二神系譜

二神系譜研究会が結成され、会報『海の民 ふたがみ』の系譜紹介

欄で各地の二神系譜を紹介してきました。その中で菩提寺、氏神について触れた項目がありますが、これまでの調査では本島宗家二神氏以外の系譜で宇佐八幡を氏神として尊崇している系譜は、以前調査した愛媛県内で、神社名を宇佐八幡としている下記の7地域周辺にある二神系譜を除いてはそれ程多くはありません。現在の愛媛県内宇佐八幡神社の建立状況を見てみました。県内には宇佐八幡神社と名がつく神社は今のところ次の7社が確認されています。

二神島宇佐八幡神社	温泉郡中島町二神甲570	二神島宗家系譜
熊田宇佐八幡神社	温泉郡中島町熊田541	吉木二神系譜
野忽那宇佐八幡神社	温泉郡中島町野忽那2	吉木二神系譜
磯河内宇佐八幡神社	北条市磯河内森甲345	風早二神系譜
道後宇佐八幡神社	松山市岩崎町2丁目10-4	道後二神系譜
宮窪宇佐八幡神社	越智郡宮窪町家奥2494	東予二神系譜
河原津宇佐八幡神社	東予市河原津末政	東予二神系譜

(『全国寺社名鑑』より・市町村名は平成の合併前の呼称)

以上、県内の宇佐八幡神社の建立状況から見ますと、二神氏や防予、芸予の水軍衆と歴史的に関係のある地域にあることが理解できます。

愛媛県内にはこの七カ所以外に宇佐八幡神社と銘打った神社が存在していません。各地に広がった二神氏が、それぞれの地で宇佐八幡の信仰文化を持ち込んでいるかどうかは、今後の研究、調査を待たなければなりませんが、同時に瀬戸内水軍衆と宇佐八幡神社、厳島神社、大山祇神社信仰との関係についても調査研究の必要性があると考えます。

△二神氏と妙見信仰

網野善彦先生は二神氏の宇佐八幡と妙見社、厳島社との関係を島の領主のあり方として捉え次のように述べています。

「……これに対し、寺地の周辺に若干の寺領田畠を持つ安養寺と宇佐八幡宮を背景に、「二神殿」は浦・泊にそれぞれ居屋敷を持ち、吉

浦・小池、それに明見（妙見）社、厳島社の神田を手作田とし、経免（大般若經）をふくむ十箇所の畠地を手作としている。浦・泊の二つの集落の人々の信仰する二つの神社を支えつつ、居屋敷を通してこれを支配する島の領主のあり方を、これは見事に示しているといってよからう。また主として島の西部に田畠を持つ家子衆七人があり、この人々は「二神殿」の家臣であった。』『伊予国二神島をめぐって』—二神氏と二神文書（網野善彦・1986年4月）

豊田郷時代からの家臣青木忠右衛門と妙見社

網野先生が報告されている、「二神殿」の家臣で、家子衆七人の内の一人、二神種家に豊田郷時代から家臣として仕え、二神島に召し連れてきた人物に青木忠右衛門がいます。この人物について、宗家二神氏34代目で安永年間に「二神氏系図伝書略記」を整備した二神種章が「二神氏末家之次第」の中で次のように述べています。

「二神藤十郎種家家頼、青木忠右衛門、此者往古種家豫州二神島工居住之節召連参家頼也於干今家続スル也。妙見神元来二神家ニ所持シテ二神ニワタルト云モ二神ニ居住スル故今之妙見山ニ安鎮セシムル時此忠右衛門ヲヒキタテマツリテ行ヨシ又於干今當家之歳男ヲツトメ永ク家臣タリシ者ナリ」（『二神氏末家之次第』二神藤右衛門種章尋古記
干時安永十辛丑年正月吉日）

これによれば「妙見社は元々長門国時代から二神家（豊田家）で信仰していたもので、二神島に来島してから妙見山に妙見社を祀る際にも豊田郷時代からの家臣である青木忠右衛門の指示により執り行うようにな……安永10年（1781）正月吉日」との意味にとれます。

妙見神社は二神種家が建立—菅菊太郎氏

また、前出しの菅菊太郎氏は二神氏の妙見信仰について次のように述べています。

「……妙見神社は同嶋妙見山の中腹にあって奮里正二神家の祖先二神藤四郎種家の安鎮せしこと一書に見ゆ、是れ大蛇封じの神なりしことは後段に述ぶる所の如し。」

「さて二神文書に前記の如く永祿十二年九月、二神種長代其花押のある「御妙見大菩薩御巖嶋明神御頭文」と称するものあれば、両社の古く存在したることは明かなり、但し巖嶋神社は他に祭祀もありしものを後ち八幡社に合祀したるか、二神氏はこの二神を鎮守神として、崇敬を傾け、軀ては其神孫なりとして、豊田姓を二神姓と改めたりとの説あることも既に前述したる所にて、多少傾聴に値するものとなすべきか。」

「安養寺の開創の年代に就ては既に前段にも疑問を存し置きたる如く、二神系図にては永享以後に於て二神家眞の開創と見るべき記事あり、然るに大般若經奥書の一つに延文の良尊を以て始之僧と記もあり……（後略）」

「嶋内最高の山を妙見山（一八三・九米）と云う。妙見神社は其の山腹にあり二神家の祖先二神藤四郎種家の安鎮せしものなりと云ふ。妙見は元来菩薩の名にて、その実体は北辰即ち北極星なるが、妙見神像は或いは青龍の上に立ち、或いは足亀蛇を踏むあり、或いは、逆髪中に六蛇ある四臂の像あり、いずれも龍蛇を以て使者とする如き形態より、妙見神を以て蛇を鎮むる神とするは我が国一般の習俗のやうである。（後略）……」

（『伊豫史談』第十八卷第四号「二神島の研究」　菅菊太郎・昭和7年12月25日発行）

二神島妙見のルーツを知る手掛りー『妙見を訪ねて』濱本孫行氏

一方、二神島の出身で関東地方に在住の画家、濱本孫行氏は生前の宗家二神氏39代目の二神四朗氏（二神系譜研究会前名誉会長・故人）から島の妙見神社の由来を尋ねられたことをきっかけにして全国の妙見社の調査を実施。著書『妙見を訪ねて』を刊行しました。それには次のように述べられています。

「愛媛県松山市沖の瀬戸内海に二神島がある。島の妙見山に妙見大権現が祀られているが、この妙見は、島の旧家二神氏の先祖が、490年程前（永正年間）に開山したとされている。十数年前に、二神氏39代の当主二神司朗氏（1999年死去）から、「二神の妙見はどこから勧

請されたか不詳である。何とかルーツを知りたい」と聞かされたことがある。昔、江戸っ子の神社参りに百社参りというのがあって、これは主に男性が行った。同じ神を祀った神社を百社巡拝する風習で、その対象として、稻荷・金比羅・不動尊・聖天宮のほか、妙見宮があった。そこで、現在も全国に数多い妙見宮（寺）を訪ね、その縁起、由来を調べることで、二神島妙見のルーツを知る手掛りを得られると考え、妙見探訪の旅を始めた。（後略）……」（『妙見を訪ねて』「まえがき」2000年7月1日・濱本孫行著）

瀬戸内海の西部に点在する忽那諸島の一つに二神島がある。（現在愛媛県温泉郡中島町二神）島の妙見山中腹に妙見大権現を祀る社があり、凡そ490年前、藤原鎌足公の系をくむ二神氏によって開山された。航海安全、豊穣豊漁を授かる神として島民に崇拝され続けている。開山当初、社は妙見山の頂上に祀られていたが、神威ことのほか灼かで、戦国時代沖行く公用船、漁船は帆を下して妙見社に拝礼を捧げた後通過した由で、若し怠ると船は転覆し航行不能になったと伝えられ、島民は恐れ戦いた。あまりの尊厳さに山頂から船影の見えない中腹に遷座奉り、其の後は船の航行が平穏になったという。妙見社は、現在も女人禁制が守られており、女性は離れた場所にある女神様の祠まで入山が許され、そこで参拝している。伝承によると、妙見大権現は女神であることから、同性に嫉妬するとして、女人禁制とされているという。

妙見山の南東側崖下の海辺に高さ5m近い大岩があり、島民は妙見岩と呼んでいる。この岩にシーズンになると、岩蠣が見事に多く附くが、これを採って食すと腹痛を起すといわれ、島民はおそれてこの岩の蠣は採取しないという。最近この話について島の老婦人の一人に確認の問合せをしたところ、以外にも、「そんな話は聞いた事がない。シーズンには沢山附くし、実がおいしいのでよく採りに行ってたべた」と返事があった。案ずるにこの話は一部の部落でたまたま腹痛にあった人が出たことで、話に尾鰭が付いて部落内で語られていたものとおもわれる。

島民の妙見信仰は篤く、過疎となった現在は、戦前、戦中の程では無いが、平成元年には社を新築し、島内外の信徒が淨財と労力を捧げており、正月、お祭（八幡神社）、旅立の前には参詣して、御利益を祈念している。伝説によると、昔、妙見様の金仏を盗み、アラレが浜から船で運ぼうとした泥棒が、動けなくなり、そこへ金仏をほうり出して逃げた。そのとき金仏の片腕が折れたという。また妙見様は犬と鶏が嫌いなので、二神島には一匹もいないのだそうだという。（『妙見を訪ねて』本文・「二神島妙見」）

妙見を訪ねて、旅と文献さがしで10年がたつ。絵の仕事を持つ身であるが、随分のんびりしたものだと反省している。各地の妙見それぞれの縁起・由来に、その地域の人々の信仰への原点がみえて、感動をおぼえたものであるが、二神島妙見のルーツについては、今もって見極めがつかぬままである。

二神氏は、藤原隆家の嫡流で、豊田姓を称して長門国豊田郡に居住し、自ら大領と称したという。そして二神島（松島）に移住した時期は、室町時代の初期と推定されている。（中島町誌）

山口県百科事典の歴史年表に、気になる記述があり、関連の程はさだかでないが紹介してみたい。

1167年・藤原種弘、長門国豊田郡大領に任ずる。

1333年・石見の高津通性、長府の探題館をせめる。豊田種長、道性に一味する。

1351年・豊田種本、南朝に帰順した足利直冬におうじて、小野資村の本拠地豊浦郡光富をせめる。

1352年・足利直冬、一色・大友氏と九州にたたかい、長門に敗走し豊田種藤をたよる。これより豊田氏は直冬に味方し、同じ南朝方の大内弘世とむすんで、厚東氏と対峙する。

以上であるが、この中の豊田氏が二神氏関連の豊田氏と仮定して、次のように考えた。豊田氏と大内氏がむすんだことで、妙見を守護神

と崇敬する大内氏の信仰が、豊田氏にも影響をあたえたことが考えられる。後に大内弘世は貞治2年（1363）には、室町幕府に味方し、周防・長門の守護職を安堵された。大内氏の祖は百濟聖明王の第三皇子琳聖太子といわれ、海上交通の要衝に位置する地の利から、朝鮮・中国貿易で巨額の利益を得て、武家政権の支配機構に組まれていったわけである。豊田氏にとって羨望の存在であったと思う。

室町初期二神島（松島）に移住した豊田種家も、妙見と無縁とは思えず、二神氏となって百余年後の永正年間に、当主が妙見山を開山したその根本は、大内氏縁りの周防・鷺頭妙見宮と推測出来ないだろうか。分霊・分祀の姿でなく、二神氏の当主自らが、開基となったとも考えられる。独善的な仮説である。各位の御教示・御批判をいただければ幸いである。（『妙見を訪ねて』・「あとがき」）

▽二神島宗家系譜

二神島宗家系譜の信仰は宇佐八幡神社と妙見神社を勧請、菩提寺は真言宗妙見山安養寺で過去帳がお祀りされています。安養寺の山号が妙見山と付けられているように、宇佐八幡信仰と妙見信仰は豊田氏時代からのものをそのまま引き継ぐ形で二神島に勧請したものと考えられます。また、二神種章の時代に属島、由利島に「矢立大明神社」を建立し、自らを莊官と名乗りました。これは安永年間に松山藩が由利島を召し上げようとした時、種章が取った藩に対する様々な抵抗姿勢と決意（「二神氏系図伝書略記」等の整備、宇佐八幡神社と妙見神社の整備に併せた「由利大明神社」の建立など）を示したのではないかと見られます。これを証明するかのように二神島の宇佐八幡神社石段登り口左右には、この時種章が奉獻した石灯籠が今も一対建っています。また、二神島の松島神社と巖島神社は二神氏入島以前から海の民である島民の信仰を集め祀られていたものと思われます。ただ、「海の民」の守り神の一つである大山祇神社は二神島では祀られていなくて、その理由が定かではありません。

△柳原二神系譜

菩提寺が善応寺から法善寺に代わった理由は妙見信仰

天正13年秋、小早川隆景の四国侵攻により湯築城を明け渡した後、河野氏の菩提寺臨済宗善応寺が無住職となり荒れ放題になり、この期間が約百年間だったと云われます。

この間に多くの寺宝が流失し、檀家離れが進みます。二神氏も例外ではなく元和2年に没した通範と夫人を弔って以降は二神氏を善応寺で弔うことが少なくなって行きました。この時代善応寺は無住職となっていて、河野氏の菩提寺でもある善応寺に代わる菩提寺に選ばれたのが日蓮宗法善寺でした。法善寺は元亀元年大内義隆の遺子幾代丸（後、豊田幾之進）によって大内義隆の菩提を弔うため創建された寺院で、氏神を妙見社とする大内氏の信仰と、北辰妙見信仰として、妙見菩薩を祀る日蓮宗法善寺の教義とが一致した結果であると見られます。法善寺を菩提寺とした柳原二神氏はその後分家の片山二神氏、常竹二神氏も檀家にしながら発展して行きました。

このように日蓮宗が妙見信仰と結びつく過程については次のように説明しています。「妙見とは“妙なる視力”、事の善惡や真理をよく見通すという意で、七仏所説神呪經（5・6世紀頃中国で成立した偽經）には、『吾は北辰菩薩、名づけて妙見という。……吾を祀らば護國鎮守・除災招福・長寿延命・風雨順調・五穀豊穣・人民安楽にして、王は徳を讃えられん』と現世利益の功徳を讃えている。わが国では密教や修驗道で重要視され、これを勧請しての国家鎮護・除災招福の祈願が密教僧あるいは修驗僧によって盛んにおこなわれたという。特に日蓮宗では「日蓮が宗門隆盛を祈っているとき、天から大きな明星が降りてきた」とか「日蓮が伊勢の常明寺に滞在しているとき、北辰妙見菩薩が姿を顯した」といった伝承から、宗祖・日蓮との関わりが深く、妙見菩薩を祀る星祭りが盛大におこなわれたという。星の導きは、航海には、神様の導きのようなものである。又、海の航海の危険をお守りいただく、大切な神様。妙見様は北極星という地軸を示す星です。北辰妙見信仰として、妙見菩薩を祀る日蓮宗との係わりはこのようにして発展して行った。」（「社寺拝礼記・妙見信仰とは」より）

▽豊後森二神系譜

慶長6年秋、主家来島康親に随行し豊後国森に転封していった二神系譜の氏神様は大山積信仰の三島神社、菩提寺は日蓮宗成覚寺となっていますが、豊後森二神三系譜には主家来島来島氏と同じ曹洞宗安樂寺を菩提寺にしている系譜もあります。さらに調査研究が求められます。

▽その他二神系譜

これまでに「二神氏の信仰」で、系譜別の調査研究はあまり進んでいません。今後の系譜調査に合わせて進める予定です。

6.まとめ

二神氏の信仰で、宇佐八幡と妙見信仰を中心に、その歴史と周辺の流れ、経過についてこれまでに歴史家や研究者、関係者の方々が取り組んできた調査研究の報告を見てきました。はじめにも述べたように「豊田二神嫡流系図写」によると二神氏の先祖をたどれば長門国豊田氏から藤原氏へと遡ります。藤原氏の氏神は春日神社（春日大社）ですが、これまでの調査では豊田氏にも二神氏にも春日神社を氏神とし、祖神である天児屋根命を祀った記録は残されていません。僅かに本島宗家家紋が、春日神社の神紋「下がり藤」と同じであった。とする記録が残されているのみです。

本号の特集「二神氏発祥の時代を探る」とのテーマであり、その中の重要な部分である「信仰」面での流れと動きを見る中で、「ではなぜ二神島でなければならなかったのか?」「二神島の由来は何か?」「松島が先か、二神島が先か?」「豊田種家が二神島に入島した動機は何か?」「藤原姓から豊田氏の名字を付け、さらに二神氏に移ってゆく課程の中で出て来る二神の神とはどれとどの神様なのか?」「その神様とは宇佐八幡と妙見の神様なのか?」などの疑問に出会います。

今回の特集で、これらの疑問に過去も含めて一定のお答えを出して頂いた先生方もありますが、なかなか難しい問題もあり今後の調査研究に待たねばならないものも多くあります。

「二神氏の信仰」のテーマでは「宇佐八幡社と妙見社が宗家二神系譜に伝わる信仰であった」と見られる。との結論に達しましたが、その後の系譜の発展に伴い、例えば、二神島には見られない海の民の大山積信仰、三島神社が豊後森に転封していった豊後森二神系譜には主家来島氏の信仰と共に伝承されてきた事実などもあります。

また、江戸中期、宗家二神系譜の二神種章が由利島の帰属を争う松山藩との闘いの中で見せた「由利大明神社」の建立などもありました。

今、全国各地に広がる二神系譜の御子孫の方々が、今後二神氏系譜の信仰面での由来や疑問が生じた時の参考になれば幸いです。

【参考文献】

『二神氏末家之次第』(二神種章筆・安永5年正月吉日)

『伊豫史談』第十八巻第四号「二神島の研究」(菅菊太郎・昭和7年12月25日発行)

『大山積神社関係文書付二神家文書』(景浦勉著・昭和52年1月5日発行)

『室町時代における二神氏の活躍』(景浦勉著『伊予史談』・1977年)

『豊田町史』(豊田町役場・昭和54年3月31日発行)

『伊予国二神島をめぐって』二神氏と二神文書(網野善彦・1986年04月)

『古文書返却の旅・海の領主 二神氏と二神島』(網野善彦・1999年10月25日)

『目で見るふるさと豊田の歴史と文化』(平成11年3月1日発行)

「豊田氏と八幡宮」中野盛紀

『妙見を訪ねて』(濱本孫行著・2000年7月1日発行)

系譜、家紋紹介（No.14）

編 集 部

高山二神氏

1. はじめに

高山（こやま）二神氏が居住する、松山市河野高山は藩政時代には風早郡河野郷高山村と呼ばれ、河野氏菩提寺の臨済宗善応寺の南方に位置し、明治初年の所帯数は36戸。男87、女84、計171人で構成された村でした。高山はコウヤマとも呼ばれ、小高い所、あるいはコゴが転訛してコーとなったものと云われ、嶮しいとか岩がゴツゴツと重なった山の意味であるとも云われています。それを指し示すのが、善応寺の背後に聳える雌甲山、雄甲山で中世の嶮しい山城跡です。＊1『豫陽郡郷俚諺集』には「女甲、男甲城高山村二神長門守、此氏は矢根蘇香蒙の氏族也、小社を立て神と崇む、氏族彼嶋に住む、神孫也とて二神と称号と云々。」と記載され、二神長門守が高山村の雌甲、雄甲山



高山村全景（左雌甲山・右雄甲山）

城に居城したことを伝えています。また、道後湯築城を築いた河野通盛もかつて善応寺とともにこの山城を守備した記録が残されています。

『豫陽郡郷俚諺集』で紹介されている二神長門守とは二神氏4代目家直の第二神家経のことと、後に御荘二神氏の祖となった人物です。

今回の、「系譜・家紋紹介」は河野氏とゆかりのある地域に居住されてきた、高山二神氏にスポットを当ててみました。

* 1 『豫陽郡郷俚諺集』・松山藩家老奥平氏が村々に命じて寛永7年にまとめた俚諺集。

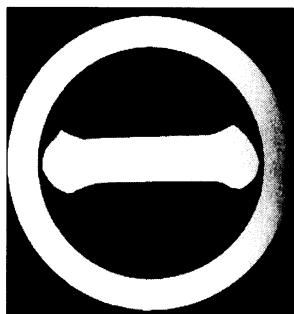
【由来記】

高山二神氏は愛媛県松山市河野高山に江戸中期より居住する系譜です。河野氏の菩提寺、善応寺の背後に聳える雌甲、雄甲山城跡の南山麓に広がる現在でも50所帯140人足らずの村です。村中を高山川の清流が流れ現在お住まいになられているのは分家筋の二神正夫氏（平成10年没・故人）の一軒のみで他に二神を名乗る家はありません。宗家系譜筋の二神功氏（平成11年没・故人）は勤務先の関係から昭和年代に高山村を離れ、ご先祖墓地も含めて新居浜市に引っ越しされています。

菩提寺は臨済宗善

高山二神氏

神社…………高繩神社
菩提寺…………善応寺（臨済宗）
墓地…………高山村墓地 他
文書・系図……なし
家紋……丸に一の字（宗家）
丸に二枚重ね羽（分家）
系譜拡大地……新居浜地区・松山地区
系譜会員……金村善美氏



丸に一の字
(高山二神宗家紋)



丸に違い鷹の羽
(高山二神分家紋)

応寺で、氏神様は高縄神社を信仰しています。系図、文書類は残されていません。宗家家紋は「丸に一の字」、本島宗家家紋と同じで、分家筋は「丸に並び鷹の羽」となっています。

1. 聞き取り調査

【高山二神氏宗家系譜】

▽二神艶子さん（88歳）の話。（故二神功氏夫人・新居浜市在住）

高山二神氏宗家系譜と伝えられています。当主の二神功氏は13年前に他界、長男、次男は関東地方に在住され、後を継いだのは三男の啓之氏。功氏はかつて住友化学に勤務されていた関係で、新居浜市に居住されていました。その後、父健四郎氏が亡くなり、高山村の墓地には度々お参りすることが出来ないため、新居浜市に転墓、高山村代々墓の土を少しづつ壺に入れて新居浜吉岡墓地に埋葬しました。元来の菩提寺は善応寺で、過去帳の前文は前善応寺住職の筆になるものです。新居浜市に移転後は同じ禅宗系の瑞応寺に移されご先祖をお祀りしています。現在は新居浜市の吉岡墓地で江戸中期からのご先祖をはじめその後の位牌は残されています。先祖伝來の話に「二神家の母屋敷は七つの門があり、先祖の新左衛門は旗をふり、海を通航する船を動かしていた」と云う話がありますが、これは二神島の宗家に伝わっていた話で、海や船が見えない高山村二神家にもこのような話が伝わっていました。家紋は丸に一文字です。この家紋は本島二神氏と同じ家紋であり、高山二神氏は本島系譜であることが判明しました。

【高山二神氏宗家系分家系譜】

▽金村善美さん（76歳）の話。（旧姓二神・松山市在住）

私は父二神友太郎、ワサの六女として松山市で出生しました。祖父才市は文久3年に高山村で生まれ、善応寺村の豊田家から祖母のシゲを迎え、父友太郎をはじめ二男四女に恵まれました。私が15歳の年に父が亡くなり、二神家のことなどを詳しくは聞くことが出来ませんでした。ただ、父がよく「二神家は昔は侍だった」とか「従

兄弟が善応寺に住んでいる」等と云っていました。また、家紋は丸に一文字です。ご先祖の墓地、位牌などは余り詳しく知りません。

【高山二神氏分家系譜】

▽二神ナミ子さん（84歳）の話（故二神正夫氏夫人・高山村在住）

高山二神系譜分家筋に当る二神正夫氏夫人のナミ子さんから同系譜の聞き取りを行い、次のような事実が判明しました。

分家筋は先代の二神百太郎、カメヨ夫妻に子供がなかったため、カメヨの姪に当るナミ子さんが養女として入籍。その後、他家から正夫氏が養子として入籍した。このため二神家のことは余り詳しく伝承されていない様子で、高山村墓地に眠るご先祖19霊の戒名、俗名などの取材をする中で同系譜の状況が少しづつ判明してきました。家紋は丸に二枚羽。

2. 墓地調査

【高山二神氏宗家墓地】松山市河野高山二神功家墓地跡

- (1) 高山二神氏宗家墓地は昭和30年代初め頃に新居浜市の吉岡墓地に転墓しました。過去帳によれば江戸中期の享保年間に亡くなられた人物が最古となっていますが、墓石との照合は未実施なので場合によってはもう少し時代が遡る可能性があります。
- (2) 転墓の際に同家墓地に残されたと見られる墓石が5～6霊ほど確認されています。この墓石の調査は未実施なので、過去帳と残存墓石との照合確認の必要性があり、近いうちに実施する予定です。
- (3) 善応寺住職の筆による過去帳前文には「善応寺は建武二年通盛の建つるものにて七堂伽藍十三塔頭備える所なり。二神家は當時代よりの檀家たる。」と記されています。

【高山二神氏分家墓地】松山市河野高山二神正夫家墓地

- (1) 高山二神氏分家墓地は高山村の南斜面にある村墓地にあります。同系譜墓地はかつて2カ所に造立されていましたが、上の段にあ

った宗家が新居浜市に転墓し、現在では下の段の分家筋の墓地が確認されています。

- (2) 分家の二神正夫家墓地には現在14基の墓石が造立されていますが、墓石の風化が進み今回は個別の墓石調査は行いませんでした。別に位牌調査は実施しておりその範囲で見限りでは最古の人物は寛政7年に没した少女と見られます。
- (3) 14基の墓石には五輪塔や地蔵様を彫り込んだ墓石も見られますが、殆どが江戸末期から明治初期の位牌型墓石です。墓石調査は未実施。

3. 過去帳・位牌調査

二神功家過去帳前文（善応寺住職書）

風早郡河野の郷は古来より開け 河野の祖孝靈天皇より十八代小千の玉純この土居の里に居館を造営し河野通有の子通盛（四十五代）まで代々の居館たりし所なり

道前、道後の要衝高縄山を背に 瀬戸の海の展望を前に天地変の害稀にして土質よく水のうまきこと之比なく 為に小千を河野と改めると伝う

善応寺は建武二年通盛の建つるものにて七堂伽藍十三塔頭備える所なり 二神家は當時代よりの檀佳たる

二神功家過去帳

高山二神氏宗家（二神功家）過去帳調査記録

	戒名	没年月日	俗名・続柄・その他の記録
1	拈香末親信士	享保5年(1720)2月26日	彦兵衛子
2	梅隱疎雪信女	享保6年(1721)12月28日	彦兵衛娘
3	覺体明恵信士	明和4年(1767)4月24日	四郎左衛門ノコト
4	本空童子	明和7年(1770)5月2日	政右衛門子
5	春暁童女	明和9年(1772)3月2日	政右衛門娘
6	霖天童女	安永4年(1775)2月21日	政右衛門子

	戒名	没年月日	俗名・続柄・その他の記録
7	善岸悟心信士	天明3年(1783)5月8日	政右衛門倅
8	自涼童子	天明5年(1785)7月14日	松右衛門孫
9	實相妙理信女	天明9年(1789)12月28日	松右衛門妻
10	妙荘童子	享和3年(1803)6月1日	政右衛門孫十左衛門子
11	智聖童女	文化6年(1809)5月8日	政右衛門孫
12	繁林妙昌信女	文化11年(1814)11月9日	二神十左衛門母政右衛門妻
13	黃菊童女革	文政5年(1822)9月16日	政右衛門(鹿五郎)
14	脯盡端正信士	文政11年(1828)12月27日	二神政右衛門コト
15	通玄宗徹信士	記載なし	政右衛門コト二神鹿五郎内
16	露吟童子	記載なし	二神鹿五郎ノ子彦兵衛孫
17	一開宗通信士	記載なし	松右衛門
18	心月妙觀信女	天保11年(1840)7月19日	二神十五郎妻
19	勝因妙果信女	天保12年(1841)2月21日	二神九良左衛門娘
20	自性童女	天保13年(1842)2月25日	二神十五郎娘
21	通峯玄達信士	弘化2年(1845)12月5日	二神彦兵衛コト
22	天眞惠窓信女	嘉永4年(1851)6月19日	二神彦兵衛妻
23	梅室智芳信女	嘉永5年(1852)2月24日	二神彦兵衛妻
24	實相妙貞大姉	嘉永6年(1853)6月22日	彦兵衛娘音次妻
25	脯盡志春童子	元治元年(1864)12月27日	彦兵衛コト音次娘
26	春山惠空童子	慶應2年(1866)3月28日	彦兵衛乙次倅
27	惠敦童子	明治2年(1869)8月19日	二神彦兵衛孫鹿五郎子
28	觀道淨光居士	明治7年(1874)1月11日	二神音次
29	好室妙相大師	明治9年(1876)6月2日	二神鹿五郎母好47才
30	法露童子	明治12年(1879)1月28日	二神鹿五郎ノ子
31	禪志童子	明治18年(1885)8月23日	二神鹿五郎ノ子
32	覺岩智圓信士	明治19年(1886)1月17日	十五郎父新左衛
33	本源妙空信女	明治21年(1888)9月11日	二神十五郎母72才
34	妙圓童女	明治31年(1898)11月24日	二神才市小女マサエ
35	寂然壽光信士	明治43年(1910)3月12日	二神鹿五郎コト
36	幻心嬰女	大正9年(1820)10月30日	健四郎子1才

	戒名	没年月日	俗名・続柄・その他の記録
37	良燈嬰女	大正9年(1820)10月30日	健四郎子 1才
38	寂室壽敬大姉	大正13年(1924)12月14日	健四郎母ケイ68才
39	正覺院圓堂智衛居士	昭和18年(1943)1月9日	健四郎子衛27才
40	高月院眞光妙鏡大姉	昭和22年(1947)6月11日	健四郎妻アイノ51歳
41	泰徳院照玄健道居士	昭和31年(1856)10月31日	健四郎コト
42	功雲院俊岳清良居士	平成11年(1999)8月4日	二神功79才

二神正夫家位牌

高山二神氏分家（二神正夫家）位牌調査記録

	戒名	没年月日	俗名・続柄・その他の記録
1	法眞童女	寛政7乙卯年(1795)9月6日没	清治の娘
2	自活童子	寛政戊午10年(1798)2月7日没	清汰の子
3	一等妙貫信女	寛政11未年(1799)10月24日没	清汰の妻
4	洞雲童子	寛政12庚申年正(1800)月17日没	
5	栢翁道樹信士	士文化4丁丑(1807)9月15日没	
6	安室智祥信女	女天保元庚寅(1830)3月22日没	
7	早世心室童子	天保5甲午年(1834)10月3日没	
8	心月妙觀信女	天保11子年(1840)7月19日没	
9	自性童女	天保13寅(1842)2月25日没	
10	玄道自久信士	慶応2寅年(1866)10月18日没	
11	智眞童女	明治9年(1876)4月9日没	いせ
12	幻身童女	明治9年(1876)4月16日没	よ志
13	覺岩智圓信士	明治19戊午(1886)正月17日没	二神新左衛
14	早世宗宥童子	明治19戊午(1886)8月13日没	二神清吉
15	壽山妙光大師	昭和12年(1937)5月5日没	妻カメヨ 88才
16	月山無聲居士	明治44年(1911)11月29日没	庄次郎 71才
17	惠海光朝信士	昭和7年(1932)7月10日寂	二神浅太郎 54才

* 繰出し位牌の記録のみ掲載

4 寺社調査

(1) 氏神神社・高縄神社

本島宗家二神家の信仰は宇佐八幡と妙見社であることがこれまでの調査から判明していますが、現在の高山二神氏に伝わる氏神様は高縄神社だと伝わっています。時代が流れて行く中で子孫に伝わらないこともあります。引き続き調査研究を継続してゆきます。

(2) 菩提寺・臨済宗善応寺

本島宗家二神家の菩提寺は現在は真言宗安養寺ですが、河野氏家臣団として本土に居て、元和2年に没した二神通範は臨済宗善応寺に葬られました。河野氏滅亡後善応寺は衰退し、無住職時代が百年余り続いたと伝えられています。この百年の間に二神氏の檀家も変化していった可能性があります。

本島二神系譜と見られる高山二神氏が善応寺で祀られているのは過去帳記録では江戸中期からで善応寺が再建された頃と重なっています。この辺りの事情も考慮しながら慎重に進めたいと考えます。

5 まとめ

- (1) 高山二神系譜はこれまでの調査では宗家系譜と分家2系譜が確認されています。宗家系譜は既に高山村を離れ、新居浜市に移転していく高山村にあった墓石も転墓しています。分家は2系譜あり、高山村に1系譜が残り、旧松山市内に1系譜が確認されています。
- (2) 新居浜に移転した宗家墓石は未確認ですが、高山村の墓地跡には地蔵墓をはじめまだ少し宗家の墓石が残されています。分家墓石は全部で14塋が確認されていますが調査はされていません。
- (3) 過去帳・位牌の調査は宗家・分家系譜共に実施しています。(別表参照) それによれば宗家系譜の過去帳に記録された最古の人物は享保5年(1720)2月26日に没した拈香末親信士で彦兵衛子となっています。

また、分家系譜の位牌に記録された最古の人物は寛政7年(1795)9月6日没に没している法眞童女で清治の娘です。15才までの人物が亡くなった場合に戒名に童子、童女を付与します。この事実から

江戸中期には高山村に二神氏が存在していたことが確認されます。

(但し、宗家の墓石調査の結果、時代が遡る可能性がある)

- (4) 高山二神系譜の家紋には2種類があり、宗家家紋は「丸に一文字」で、この家紋は二神島の本島宗家家紋と同じです。もう一つの分家家紋は「丸に違い鷹の羽」となっています。ここで注目されるのは、宗家系譜に残されている「二神家の母屋屋敷は七つの門があり、先祖の新左衛門は旗をふり、海を通航する船を動かしていた」との伝承が残る高山二神宗家系譜は本島系譜に近い系譜であることが予測されます。今後の調査を継続することが求められます。
- (5) はじめに述べたように、後に御荘二神氏の祖となった二神長門守家経が高山村の雌甲、雄甲山城に居城したと伝わる『豫陽郡郷俚諺集』の記述から考察する場合、その後の高山村に二神氏がどのように関わってきたのかについての資料が未発見で、現在この村に残された二神氏の足跡から推測し、関連資料の発掘と調査が必要です。
- (6) 高山二神分家系譜の二神正夫家は雌甲、雄甲山城が背後に迫る高山村の最奥地に建っています。家前の道端には「城山道」の案内標識が建ち、かつて二神長門守家経が拠った雌甲、雄甲山城へ最短地にあると云えます。こうした周辺情報を収集しながら、あらゆる可能性を探りながら調査を進めることが重要です。

参考文献

『北条市誌』(北条市誌編纂会・昭和56年3月27日発行)

『河野氏ゆかりの地を行く・改訂版』(風早歴史文化研究会・平成20年10月10日発行)

『豫陽郡郷俚諺集』(愛媛青年處女協会・大正14年11月22日発行)

会員さんからの投稿

日本国宗本家、天皇はどこから来たか

溝田 孝一



妻、吉村作治教授、私

戦前の古代史において、日本は古代以来、万世一系の天皇により統治されていたと教えられていました。それが戦後一挙に崩れ去りました。王朝交代説であります。

古事記、カンヤマトイハレヒコ（神武）東征伝承によると3世紀初ごろ九州高千穂宮を出発した神武一行は豊國の宇佐、筑紫の岡田宮（遠賀川河口付近）を経て瀬戸内海を東進し、阿岐（広島県）の多キ理宮、吉備の高島宮を経て浪速に上陸している。

この初代神武より、第5代孝昭については当時の記録がないので省略するとし、

初期—三輪王権 4世紀初から4世紀中まで（4代）

孝安（第6代）から開化（第9代）

中期—河内王権 4世紀末から5世紀末まで（16代）

崇神（第10代）から武烈（第25代）

現在一継体王権 6世紀初めから現在
継体（第26代）から始まる。

初期の三輪王権については、古墳の調査を待つとして、中期の河内王権については、埼玉行田市稻荷山古墳から471年（一説では531年）に製作された鉄剣が発見されたことによって、この時代の大王の存在が明らかになると共に、その系譜までが明らかになりました。

古事記の成立が712年ですから、これよりも241年も前の115文字の銘文（表57文字、裏58文字）はそれまでの歴史を改めるものでした。

（表）471年7月中、ヲワケ（充恭）の臣が記す。上祖、名はオホヒコ（崇神）、其の児、名はタカリノスクネ（垂仁）、其の児、名はテヨカリワケ（景行）、其の児、名はタカハシワケ（成務）、其の児、名はタサキワケ（仲哀）、其の児、名はハテヒ（応神）。

（裏）其の児、名はカサハヨ（仁徳）、其の児、名はヲワケ（充恭）の臣、世々、杖刀人の首（カシラ）と為り、奉事し來り今に至る。ワカタケル（雄略）の大王の寺（役所）、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。



国宝：金錯銘鉄剣



稻荷山古墳鉄剣発見場所

というもので、九州においても熊本菊水町、江田船山古墳出土の75文字を刻み込んだ鉄剣が出土されている。5世紀末の大和政権の勢力圏は東においては関東、西は九州にまで及んでいたことが伺える。

稻荷山古墳を訪問しての感想

- 1) 稲荷山古墳群はサキタマ（埼玉）（現在の呼び名はサイタマ）にあり県名発祥の地であります。
- 2) 前方後円墳の全ての方位は西の方角、ヤマト王権に向けて作られている。
- 3) 国宝、金錯銘鉄剣は稻荷山古墳の後円部頂上下僅か60cmところから発見された。約1500年もの間、盗掘にあわなかつたのは不思議である。
- 4) 当初10年間は、展示室にて展示してあったが、あまりにも腐食がひどくなつたので元興寺考古学研究所にて腐食部分を剥がして補修調査中に金象嵌の文字が刻まれていることを発見して国宝となる。
- 5) 古墳時代、西暦471年に115文字が刻まれている鉄剣。古事記の成立241年前のことである。
- 6) 大王の上祖、崇神から8代の系譜を鉄剣の表と裏に刻み、先祖代々大王の親衛隊長としてお仕えしワカタケル大王の朝廷がシキの宮におかれている時に私は大王が天下を治めるのを助けました。何回もたたいて鍛えあげたよく切れる刀を作らせて、私と一族のこれまでの大王にお仕えした由緒を書き残しておくものです。とある。今日でもこれだけのものを残した人はいません。感動しました。
- 7) 1590年、石田三成が忍城水攻めのときに、これらの古墳群を利



稻荷山古墳

用して堤防を築き、城を見下ろす場所にある稻荷山古墳の隣の丸墓山古墳の頂上に陣を張ったという記録があるが、当時古墳とは思わなかつたのではないかと感じた。

それでは、何故これだけ栄えた中期河内王権は、第25代武烈天皇で滅びたのでしょうか。このことについて愚管抄には、次の様に記録されています。

愚管抄—作者慈円、天台座主を務めた高位の僧、関白九条兼実の弟。

日本で初めて個人の筆によって書かれた通史。

これによると、仁賢の太子に武烈という言葉では言い表せないほどの悪王が現れ、10歳で皇位につき18歳まで在位されたので群臣は泣くよりもほかなかった。しかし、この武烈は皇子を作らずに崩じられたために国王の血筋が途絶え世の嘆きとなった。そこで、臣下の者が集まって越前国に応神天皇の5世の孫がおられるのを探し求めて皇位におつけしたのであった。(日本書紀と同じ)

慈円のコメント

繼体天皇について、長年田舎にいて民の様子もよくよく知っておられたので、このとき特に国がよく治まり、その皇子3人も順番に皇位をお継ぎになった。

現在の天皇は第26代繼体天皇から始まる。

繼体天皇の父、母について

父—彦主人王（ヒコウシオウ）

15代応神5世孫

高島町歴史民族資料館から250m北の鴨稻荷山古墳

母—振媛（布利比弥命）

垂仁天皇7代

越前三国の出自

夫の死後、ひとり婚家に残された振媛は、幼い王子を抱いて実家のある越前三国に帰る。

第26代継体天皇

越前か近江の豪族

57歳で大王となる。

507年即位、その後5年から7年の後に崩じた。

高槻市郊外の今城塚古墳、宮内庁は茨木市の太田茶古墳というが5世紀中ごろに造られている。

15代応神天皇6世孫

大伴金村連によって擁立された。

新王朝の創始者

息長氏（オキナガ）の一族、住所は滋賀県坂田郡近江町大王家の皇女を妻とすることによって入り婿の形で王位を継承、河内王朝と継体王朝とを王朝として区別できるかどうかが疑問。応神やホムツワケ王に結びつけるのは、のちに生まれた説だろう。

后妃は8名、近江から4名、越前出身はゼロ

一人は前大王家の皇女（尾張連草香（ムラジクサカ）の豪族の娘、目子媛（メノコノイラツメ）この婚姻関係の子息は、第27代安閑天皇（在年4年）と第28代宣化天皇（在年3年）がいる。

古事記、日本書紀、上宮記一云

妻一手白髪皇女（タシラカ）

先帝武烈の姉

仁賢天皇の娘

子息は、第29代欽明天皇（在年32年）がいる。

継体天皇と同じように不遇下から天皇になった例を上げると

第88代後嵯峨天皇

鎌倉時代の1242年3月18日即位、1246年1月29日退位（在年4年）一承久の乱後、北条泰時の計らいで天皇となる。

邦仁は貧乏な生活を強いられていた。草深き庭、扉も破れたる門、物古たる御簾簾（ミスレン）の屋敷に住まつてい

た。長く不遇な生活を送っていた彼が晴天の霹靂のように即位を要請された「保暦間記」

私事で恐縮ですが、余生は邪馬台国、卑弥呼女王の墓を探して見たいと思っている今日この頃です。この時代の古墳はいくつか見学していますので其の内、発見できるでしょう。乞うご期待を。いつまでも夢を求めるることは若さの秘訣であり、私のモットーです。

【参考文献】

古事記、日本書紀

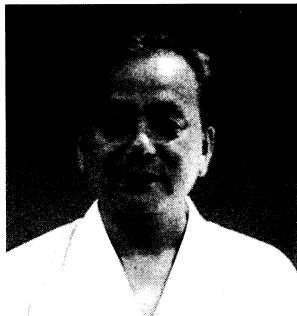
謎の大王、繼体天皇、 水谷千秋、文春新書

大系日本の歴史、古墳時代、和田あつむ、小学館

埼玉県教育委員会、稻荷山古墳出土鉄剣報告書および概報

二神嘉林の過去帳について

双水執流清漣館館主 眉木良彦宗隆



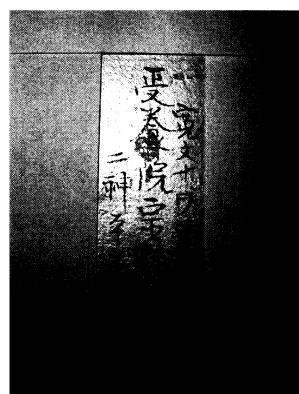
二神嘉林については、元禄2年（1689）に森藩より召し放ちの後、豊後竹田に移り元禄6年に死去、竹田円福寺に埋葬されたとされていた。しかし、近年二神系譜研究会の調査で、嘉林の過去帳が豊後森の成覚寺で発見されたことからその真偽について研究課題とされている。

そこで、平成23年5月に豊後森の玖珠成覚寺のご住職と過去帳についての調査検討をお願いしたところ、新たな資料が見つかったのである。このことから多角的に嘉林について検証してみたいと思う。

まず右の写真は、成覚寺に現存している二神嘉林の過去帳であるが、元禄6酉年正月（寛文6酉年正月5日）、戒名が「梅翁虛白」で俗名が「二神初左衛門」となっている。この写真で分かるように晩年の嘉林は初左衛門と名乗っていたことが分かる。

また今回、新発見されたものに、嘉林の長男と思われる人物の過去帳も発見された。寛文10戌4月（寛文10戌年4月26日）、戒名「政養院宗林」で俗名が「二神平之丞」とある。

嘉林の長男は二神系譜研究会では、定成、半右衛門、十右衛門とあるものの、家督は次男の嘉鑑が継いでいるため、私は以前から長男は早く亡くなっていたと考えていたが、これを見ると戒名の「宗林」が「嘉林」と通じ



るものがある。

ところで、この二枚の過去帳の解読にあたっては、私の仕事関係で(財)日本美術刀剣保存協会学芸員数名に依頼して解読していただいた。それによって「初左衛門」や「政養院」が解読できた。特に政養院の「政」は、江戸時代には左右の偏を縦に並べて書くことがまれにあり、このように左の偏の「正」が上に乗っている状態ではあるが、「政」という字を表しているという。

ここで、私どもが伝承している双水執流という武術の流祖二神半之助正聰とういう人物を通して考えてみる。

玖珠史談会の竹野孝一郎氏は、福岡藩の寛文官録に記載されている二神九太夫は二神嘉林と同一人物で間違いないとしている。私も同感で、さらに双水執流の流祖二神半之助もいくつかの状況証拠から二神九太夫、嘉林と同一人物と見ている。

二神半之助は江戸初期の承応頃（1652）舌間又七の招きで福岡藩の支藩である東蓮寺藩内（後、直方藩に改名。現在の福岡県直方市）に移住した。その舌間又七とは、豊後竹田出身で旧姓臼杵氏であったが江戸初期にこの直方舌間氏の養子となつた。直方に移住した二神半之助はここで双水執流を開眼し、東蓮寺藩の家老であった伊丹九左衛門の側近として働くようになった。

伊丹は、寛文2年（1662）に一旦福岡藩に戻るのだが、その時半之助も一緒に移動したと思われる。そして、伊丹の推挙で福岡藩の馬廻組二百石を与えられた。実は寛文官録は寛文4年までに記載されたものをまとめたもので、それ以後のこととは記載されていない。

二神半之助は寛文2年頃200石を与えられていたものの、寛文3年（1663）に東蓮寺藩主の急死により伊丹は再度東蓮寺藩に戻ることになるのだが、当然半之助も戻ったはずである。そしてその後、寛文6年（1666）に双水執流を田代清次郎に譲るのだが、その後の東蓮寺藩での二神半之助の記載は一切見ない。そのことから見ても何らかの事情で寛文6年には豊後森藩に戻つていったと私は考えている。そして、直方時代の半之助には長男がいたがそれがこの平之丞で、豊後森に戻

ってわずか4年後の寛文10年（1670）に亡くなったと考えられる。

ではなぜ嘉林の過去帳が豊後竹田ではなく豊後森の成覚寺にあったのであろうか。それに関しては成覚寺のご住職の話として、江戸時代までは墓の有無はどうでもよく、その寺で法要するとそのまま戒名が残されることが多いという。実際私も直方舌間家の調査を長年しているが、たとえば舌間本家の菩提寺は直方市頓野（とんの）というところにある光明寺という寺で、しかし実際にはその寺に舌間本家の墓はない。舌間家の墓は上境（かみざかい）という舌間一族が住んでいる敷地内にその墳墓がある。つまり江戸時代までは、死んで埋葬する場所と寺が必ずしも一緒と言うことではなく、むしろ違う場合が多いようである。だからその寺に墓はなくても菩提寺として法要などすれば過去帳として残されているケースが多い。したがって、成覚寺のご住職も嘉林は豊後竹田で亡くなったと考えておられる。また、平成21年に私どもが竹田円福寺の調査をしたときも、円福寺のご住職もこの寺に二神家の墓は確認できないものの、この寺になくともこの地域は山肌に無数の無縁墓があるので、その中に存在する可能性を指摘しておられた。

嘉林が豊後竹田に来て亡くなり円福寺に葬ると言う記載のものは、孫にあたる二神種在の書いたとされる古文書にある。この種在の養子に入ったのが林猶次郎であり（二神嘉林－嘉鑑－種在－猶次郎）、猶次郎にも子供が出来なかつたため、ここで二神家は途絶えた。猶次郎（祐安）安永5年（1776）7月14日没後、この古文書は大分の林家へ戻されて今日まで現存しているという。

一連の成覚寺でのやり取りで見て来たことは、嘉林が死去後間違ひなく円福寺に埋葬された。そして死んだことは豊後森の二神家にも報告され、そこで豊後森の二神一族が独自に嘉林の法要を行う為に、長男の過去帳がある成覚寺で嘉林の法要をし、そこに戒名が残ったのではないだろうか。当然竹田円福寺でも二神家は嘉林の法要をしているはずで、玖珠成覚寺と竹田円福寺とで二つの過去帳が存在していたのだ。ただし残念なことに円福寺は明治初期に火災に見舞われ、江戸時代までのすべての過去帳類は消失してしまったという。さらに、

嘉林の戒名「梅翁虚白」と嘉鑑の戒名「襦林院了白」での虚白と了白とが類似している点も興味深い。やはり嘉林の戒名は円福寺でつけられたものを豊後森の二神家に報告した時そのまま成覚寺でも使われ、今日まで受け継がれたと言っていいだろう。

二神時成と二神嘉林の関係について

二神時成と嘉林は親子と言われている。寛永14年（1637）に始まった島原の乱に参加、寛永15年（1638）1月二神時成は70歳で戦死、嘉林自身も負傷したとされている。それではこの時嘉林は何歳だったのか。

時を経て、嘉林は元禄6年（1693）1月に豊後竹田で亡くなった。寛永15年から数えて55年後のことである。これらのことから、客観的に見て寛永15年当時の嘉林は20歳前後と考えることが自然ではないだろうか。しかしそうなると、実子としての時成と嘉林との年齢差が気になる。

ところで明治初期に作られた双水執流略史（以下、略史）というものには、二神半之助は豊後竹田の出身となっている。この略史の元になったものはよく分かっていないが、江戸初期において豊後竹田に二神一族がいたという事実はない。したがって、この略史なるものは間違った記載をしたということになるのだが、実はこれも一概にそうは言えない。

私は、半之助は確かに豊後竹田で生まれたと思っている。そして何時どういう経緯かは分からぬが、二神時成に養子に入ったと考えている。それを直接決め手になるものは存在していないが、半之助の足跡をたどってゆくと、そうならざるを得ないというのが私の見方である。

この略史には、もう一人舌間又七のことも書かれており、冒頭でも書いたが又七は豊後竹田の臼杵氏で、江戸初期に直方舌間氏の養子なっている。そして、承応頃又七は半之助を直方に呼び寄せてはいるのだが、この略史で又七と半之助は「いわれある間柄」と表現している。つまりこれは特別な関係をさしてて、私はこの二人は兄弟だと見て

いる。兄の半之助は二神家へ、弟の又七は舌間家へ養子に入ったため、直接的な兄弟という表記ではなく「いわれある」関係として表現したものと考えられる。

その後の半之助の足跡は、先にも書いたように東蓮寺藩から福岡藩へ、また東蓮藩に戻り、今度はさらに豊後森藩へと移動し、元禄2年（1689）に召し放ちにより生まれ故郷の豊後竹田に移り住んだと私は考えている。

ところで興味深いものに、元禄2年に森藩から召し放ちされたと時と同じ元禄2年に、森藩では入れ替えるように二人の人物を召し抱えている。近江国坂本の出身の四藤隼人、与惣右衛門兄弟である。その理由として、「ある年、藩主久留島通清が江戸へ参勤の途上、野武士が一団に襲われた。通清の一行がどこで襲われたかははっきりしていないが、森藩士達はたちまち苦戦に陥り、通清の命も危ない状態となつた。この時、四藤兄弟が通り合わせて森藩士に助太刀した。このため野武士達は散り散りに追い払われた。これが縁で四藤兄弟は、元禄2年に召し抱えられたという。」その後、宝永5年（1708）に通清から村上姓を拝領、四藤から村上に改名した。

この話の信憑性はともかくとして、ただこの時の兄の隼人の禄高は150石で、二神嘉鑑と同じである点でも注目すべきことである。元々財政難にあった森藩で、多くの家臣をリストラして財政引き締め政策を行っているのにもかかわらず、ただ単に人の入れ替えだけでは何の意味もないことであるが、通清はこの二神親子のみならず父久留島通春からの側近をすべて排除し、新参者の薄葉氏や浅川氏なども起用し、自らの権力を強化した。したがって多くの古くから仕えている家臣は藩主のこのやり方には不満をもったのも当然と言えよう。

実際兄の隼人は、元禄6年（1689）2月には250石に、元禄14年（1701）3月には350石に加増されている。さらに、宝永元年（1704）には、450石と刀一振を拝領、江戸表では100石も加増された。また弟の与惣右衛門も知行250石で御用人として仕えたという。かなりの出世だが、やはり家臣にとっては面白くなかったのは事実だろう。

興味深い話はさらにここから先で、通清が元禄13年（1700）に死去

するとこの村上兄弟は家臣団からさらに疎んじられるようになつていった。その兄弟に対しての反感ぶりの代表が江戸家老の得能伝平衛であった。

宝永6年には村上兄弟が次の藩主久留島通政に料理を献上することがあったが、得能は一部の家臣や侍医と共に謀りその料理に毒物を盛ったのである。そして毒入りの料理を届けられた通政は激怒し、宝永6年（1709）10月26日に大乗寺で切腹させたのである。まことしやかな伝説だが、いずれにしても得能が中心として彼らを失脚させたのは事実である。そして、この得能伝平衛こそが旧姓二神禎宗なのである。

得能が二神親子のリストラの原因はこの村上兄弟であると恨んで、このようなことをしたと書けば時代小説的で面白みはあるが、現実には森藩での政治的な問題が本当であって、たまたま得能が村上兄弟を処分したと言うことにはすぎない。勿論、得能の心情は複雑であったに違いないが、だからと言って得能が心情のみを優先してこの兄弟を排除した訳ではないと、私は思っている。

平成23年12月15日

参考資料

双水執流略史（隻流館）

舌間家譜（舌間宗益著）

福岡藩分限帳集成（福岡地方史研究会編）

海の民 ふたがみ 第四号（二神系譜研究会）

二豊小藩物語（大分合同新聞社）

福岡県地域史研究 第三号、第十二号（福岡県地域史研究所）

森藩（Wikpedia）

写真提供

玖珠 成覚寺

協力

(財)日本美術刀剣保存協会

二神時成について

双水執流清漣館館主 白木良彦宗隆

双水執流に関して、多く書かれている武道関係書物の元になつてゐるのが明治初期に書かれた「双水執流略史」である。そして、この「略史」の冒頭には次のように書かれている。

「豊後竹田の藩士にして竹内流小具足腰之廻りを学び一流を興し二神流と称せり、然るに正聰必勝の術全からざるを憂い普く諸国を巡りて修行し、更に大和国吉野山の深谷に37日間立籠り諸流の奥秘中より善惡を取捨し、終に必勝の利を究めしが吉野川の清き流れを見て其の行水の滞らず速なるに心を止め益々己の心胆を鍊磨すると共に大いに刻苦工夫して事理無礙なる事大悟し二神流を改め双水執流組討腰之廻りと称せり」

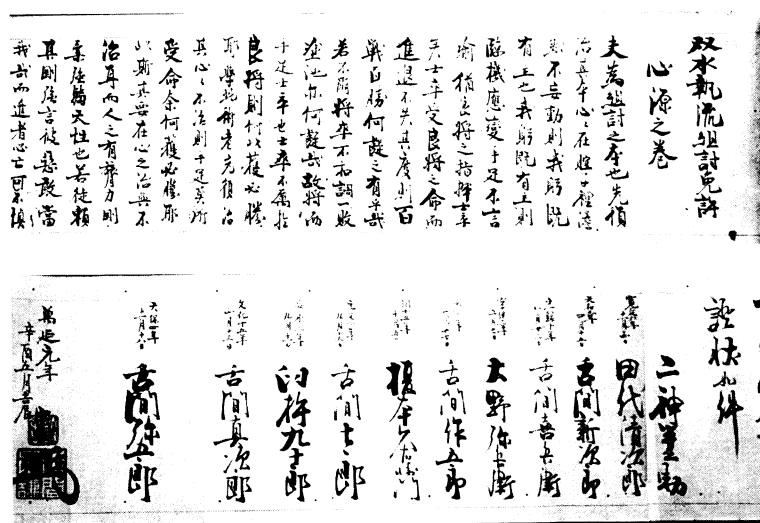
これが元になって多くの武道書に書かれているのだが、不思議な事に武道書にはいつの間にか二神半之助が竹内流の流祖竹内久盛に竹内流を学んで後二神流を起こし、さらに双水執流と改名したとなつてゐる。しかし略史を見れば分かるように、ここには竹内久盛に学んだとは書いていない。このような現象は読み手が自分の持つてゐる知識や情報を勝手に思い込んで書いてしまったケースが多いようだ。また時代つり上げと言って、少しでも古ければ古いほど優れているかのような思いがあつて、意図的に書き加えられる事もある。無意識にいつの間にか時代つり上げされていることもあるが、文化の継承を本当に考えるなら冷静に時代を検証しなければ、とんでもない方向に行ってしまう。

例えば、江戸時代に出来た武術なのに甲冑を身に着けて刀を振り回してなどと言えば、これなどは武術史から見ても江戸文化史からみても基本的にあり得ない話で、仮に十歩譲ってこのような事をしていたとすれば、ただの変わり者か、あるいは謀反を企てているかと思われるのが関の山で、良いことなど一つもない。もっと大げさに言えば集団でそのような事をしていれば、その藩自体徳川幕府から目をつけら

れてしまうこともあり得る話である。本来武術を編み出して自分のセールスポイントにするのは、牢人などがあわよくばその藩に取り立てられて就職できるのが目的だから、それに反する行為など普通はない。それなのに現在伝承されている古武道の中には、江戸時代初期に出来たものでも、室町時代だとか古いところでは鎌倉時代からあつたかのように言っている流派もある。自流を誇りに思うならば事実をきちんと伝えるべきと、私は思う。

現実には、二神半之助が何時生まれて何才で死んだかは正確には未だ不明ではあるものの、江戸初期の承応以降に東蓮寺藩で双水執流を伝えたという事実がある以上、二神半之助が室町末期に生まれて竹内久盛の弟子であるなら、この時点で90才近くの年齢に達していることになり、二神半之助だけは超人的な人物で長生きしたのだと言う論法で片付けてしまうことがいかに危険かは理解してもらえるだろう。だから室町末期に亡くなった竹内久盛の弟子とする方がむしろ無理があると思うのが自然な見方だ。

ところで竹内流系図によると、初代竹内流の竹内中務大輔久盛（たけのうちなかつかたいふひさもり）から免許皆伝を得た門人は四人いることになっている。長男の竹内五郎左衛門久治（その後竹内歛流を



開きその開祖となる)、次男の竹内常陸介久勝(竹内流二代目継承)、高畠大膳益友(備中郷士)、二上某(竹内流免許、二上流)である。さらに二上某の次に二上半之丞正聰(竹内流印可、二上流、双水執流)とある。

この記載の竹内久盛の二人の実子は当然の事で、高畠大膳益友も正確に名前が記載されているのにもかかわらず、なぜか二神を「二上某」と曖昧な表記になっている。二神を「二上」となっている点は、昔は発音重視の文化で漢字は往々にして当て字で表記される事が多いが、現存する双水執流のすべての伝書は二神であることからしても、明らかに竹内流が二神の事を正確に認識していない事を示していると言える。二神自身が自ら竹内久盛の所まで行って学んだとしたら、苗字を当て字で表記し、名前を某と言うことは通常あり得ない。また、二神半之助を半之丞としている事も、これは丞も「すけ」と読む事から、やはりこれも当て字であろう。

ではこの二神某とは一体誰であろうか。それは二神嘉林の父、二神時成ではないかと私は考えている。そしてそうであれば本当に二神時成は備前国美作の竹内久盛に竹内流を学んだのだろうか。

二神嘉林(半之助)の父二神時成は、永禄11年(1568年)伊予松山で二神種良(修理進、瑞庵)の長男として生まれる。もともと四国での二神氏の発祥は、伊予に近い瀬戸内海にある二神島がその発祥地とされ、現在も愛媛県には二神姓が多くある。

天正12年(1584年)、二神時成16才の時に岸和田城攻めに参加した。岸和田城攻めとは、天正10年(1582年)に本能寺で織田信長が倒され、天正12年(1584年)羽柴秀吉が小牧長久手で徳川家康と信長の子信雄との連合軍と対戦している隙に根来寺を本拠としている強大な武力を持つ根来衆が岸和田城を包囲した。

当時岸和田城には、これより14年前の元亀元年(1570年)に始まった石山合戦で、紀州雑賀と根来の一一向宗徒(浄土真宗)が和泉地方に侵入し、大坂の石山本願寺と呼応して織田信長と対敵していたのだが、信長は大軍を率いて一一向宗を平定し、唯一紀伊に残る一一向宗徒に備え

る為に、信長は中村一氏（かずうじ）を岸和田城主として入城させていた。根来衆が岸和田城を包囲した事で、中村一氏は当時大阪城を預かっていた黒田孝高（如水）の援軍を受けて根来衆に打ち勝ったと言うのが岸和田城攻めである。

永禄4年（1561年）村上水軍の一族である来島村上家当主、来島通康の四男来島通総（みちふさ）が生まれる。ただこの時はまだ来島姓ではなく、村上姓であった。村上水軍は、日本中世の瀬戸内海で活躍した水軍で、その拠点は広島、愛媛の諸島を中心とした海域で、後に能島村上家、来島村上家、因島村上家の三家に分かれた。また来島は、愛媛県今治市の来島海峡の西側に位置する島で、その由来は潮流が早く、潮向も複雑なことから「狂う潮」が訛り「くるしま」となったと言う説がある。

来島通総は永禄10年（1567年）、父が急死したため7才で家督を継いだ。通総の母は河野通直の娘である事から河野家とも付き合いがあり、そのような関係で河野氏と同盟関係のあった毛利氏が大友宗麟を攻めた時には援軍として参加、大友水軍と戦っている。

河野氏は、伊予国（愛媛）の有力豪族で室町期には道後に湯築城を築き、その分家は河野水軍となり室町末期には瀬戸内最大規模の水軍になっている。しかしこの海戦で毛利水軍を元々率いていたのは能島村上水軍であったことから、村上武吉と不仲になったと言われている。

天正10年（1582年）、通総は毛利方であったにもかかわらず、羽柴秀吉の勧誘を受けて織田方に寝返ったため、毛利や河野に攻められて本拠地を追われ、一時は秀吉の元に身を寄せていた。秀吉は村上氏の中でも早くから味方かについていた通総を「来島、来島」と呼んで重用していたので、この時に村上から来島と改名したのである。

ところで二神系譜研究会の調査で分かった事だが、河野水軍と来島と二神水軍は親密な仲であったことが判明している。そう言う事から間違いなく来島通総と7才違いの二神時成とは密接な関係があると言って良いだろう。だからこそ毛利方にいた通総が織田方に寝返えってもそれに従って二神時成も動いていた事が理解出来る。さらに、天正14年（1586年）の夏に、秀吉は九州の平定を決意して、黒田如水を中

国軍の軍艦として出陣、天正15年（1587年）に通総も如水に従って九州に遠征しており、その時二神時成も遠征していたのは間違いない。

竹内久盛が竹内流を創始したのが天文元年（1532年）とされている。ただしこの天文、永禄、天正と言う時代はまさに戦国の真っただ中にあり武術どころではないのが事実である。久盛自身、自分が城主であった美作国一之瀬城が天正8年（1580年）に宇喜田氏の攻撃を受け落城し、久盛はこの一之瀬城の再築を計るため備後の小早川隆景を頼つて旧縁の播磨の三木城主別所氏の家来尾越弾正のもとを訪ねたが、すでに三木城も秀吉に占領されたことを知り、乱世のむなしさを痛感し戦国武将をやめ武術の道を選んだと言われている。

ここで二神時成の年代を当てはめてみると、竹内流が創始されたとする天文元年はまだ時成は生まれていない。では竹内久盛が武術に専念し始めた天正8年ではと言うと時成は12才であり、基本的には考えにくい。また四年後の天正12年（1584年）に16才で岸和田城攻めに参加している事から、やはりこの年代は無理な話である。

翌年天正13年（1585年）来島通総は秀吉が四国征伐を決行した時、備後国的小早川隆景の指揮の下に伊予で先鋒を務め、旧家であった河野氏を攻めたのだが、その時も二神時成は参加していた。通総はその後も、天正15年（1587年）の九州征伐、天正18年（1590年）の小田原征伐にも参加している事から二神時成もやはり一緒に行動をしていたと考えられる。

ところで、竹内久盛は文禄4年（1595年）93才で亡くなったとされ、それは天正18年から五年後のこと、この間にわざわざ備前美作まで出向いて、ましてや88才を過ぎた竹内久盛に竹内流を学んだかどうか疑問がある。

このように見てゆくと、やはり二神時成と竹内久盛との接点が見当たらない。私はこのような歴史の流れから、実は二神時成が竹内久盛から直接竹内流を学んでいないと見ている。しかしそれでも不思議なのは、竹内流の系図には竹内久盛の門人に二神某とされている。これを調べて行くうちに備前での二神の接点はないものの、四国で竹内流が伝授された形跡が存在していた事が分かったのである。

それは、天正18年に小田原征伐に参加した二神時成は天正19年（1591年）には四国に戻ったと思われるが、実はこの天正19年に竹内久盛の次男竹内久勝（後の竹内流二代目）が修行のため九州を周り、さらに四国に渡って修行していた事が分かった。

私はこの時、二神時成が竹内久勝と出会って竹内流を伝授されたのではないかと考えている。その後、竹内久勝は父の竹内久盛のもとに帰り修行話のなかで、四国で二神と言う男に教えたと言う事を話した。それが竹内久盛にすれば聞き書きで、門人帳に「二上某（なにがし）」と記載され、いつの間にかそれが竹内久盛の弟子で免許皆伝まで付け加えられたのではないだろうか。ただし、免許皆伝と言うと長い年月をかけて修行し取得するものと一般的には思われがちだが、昔は技を一通り出来れば免許と言うのはあったようで、以外と久勝が勝手に免許を出したのかもしれない。

慶長2年（1597年）の慶長の役に来島通総が参加したが、二神時成も行動を共にしたと思われる。そして、この慶長の役で来島通総は戦死、家督は次男の来島長親（ながちか）が継いだ。

その後、来島長親（後に康親と改名）は慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いで西軍についたため、敗戦後伊予の領地は没収された。しかしその代わりになぜか豊後森藩一万四千石に取り立てられている。その理由は、はっきりしておらず諸説があるようだが、一説に長親の妻の伯父である福島正則の取りなしにより本多正信（徳川家康の重臣で江戸幕府の老中）を通じ、慶長6年（1601年）に幕府より豊後森藩を与えられたと言う。

さて、ここで今まで述べた二神時成の経歴を整理して時系列的に並べてみた。

永禄11年（1568年）伊予松山で生まれる。

天正12年（1584年）岸和田城攻め 16才

天正13年（1585年）四国征伐 17才

天正15年（1587年）九州征伐 19才

天正18年（1590年）小田原征伐 22才

天正19年（1591年）四国へ戻る 23才

文禄	4年	(1595年)	竹内久盛死去	27才
慶長	2年	(1597年)	慶長の役	29才
慶長	5年	(1600年)	関ヶ原の戦い	32才
寛永	15年	(1638年)	島原にて戦死	70才

これで分かるように、二神時成は天正12年の16才から慶長5年の32才まではほとんど戦場での明け暮れで、めまぐるしい生活をおくっていた。しかしその後、寛永15年（1638年）の島原の乱で戦死するまでの38年間の消息は分かっていない。この間に黒田藩に移動したと考えられているが、実際には黒田藩に二神時成の記載されている資料は今のところ発見されていない。

参考資料

- 双水執流略史（隻流館）
- 日本柔術の源流 竹内流（竹内流編纂委員会編）
- 黒田三藩分限帳（福岡地方史談話会）
- 福岡県地域史研究 第三号（福岡県地域史研究所）
- 福岡県地域史研究 第十二号（福岡県地域史研究所）
- 海の民 第四号（二神系譜研究会）
- 伊予二神氏と二神文書（福川一徳著）
- 二豊小藩物語（大分合同新聞社）

平成24年2月1日

片山墓地の柿の木

二神 慶子

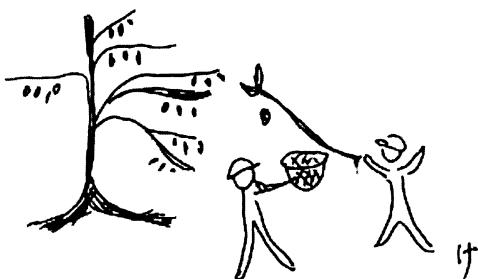
北条の片山墓地は二神通範公をはじめとするご先祖の眠る墓地です。その墓地の入り口に一本の柿の木があります。この柿の木は、片山墓地をやさしく見守る役割とともに、近隣の方々との交流の象徴の役割も担ってくれています。

平成12（2000）年5月に墓地の北側に北条希望の丘キリスト教会ができました。以前は墓石が土に押されぎりぎり立っているような危うい並び方をしていたのですが、北側を教会が造成し整備されたことによって掃除もしやすくなり、またお墓参りもスムーズに車で乗り入れができるようになりました。

そんな教会と、片山墓地の北側の境界の墓地側に柿の木は立っておられます。工事の際には現場作業員から切った方がいいと言われましたが、興三郎がこれを突っぱね現在にいたっております。この柿の木の実は、干し柿にすると、大振りの良品で実に美味なことがわかつきました。

ある年のこと、柿の実を採りに墓地に出向いてみたところ、ちょうど牧師さんが柿の木に登っていて柿の実を採ろうしているところでした。

またある年には、南側のミカン畑の農家の青年が柿を柿の木の上で2個ほど採ったところに出くわしてしまいました。「採ってもらってすみません」というと「これはとても美味しいので。」といって照ながら柿を置いて帰っていました。



このお二方にはこちらが採った後には「どうぞ！」といって残りを自由に採っていただくようお声掛けをしております。

昨年もこの競争率の高い柿の実を、カラスやスズメにつつかれないよう工夫しながら、干し柿を作りました。お正月からおいしくいただきました。



片山墓地

役員のつぶやき☆☆☆

「右眼の奥で、ピカピカ光が……
これは、ヤバイ」

二神 傑一

11月中旬のある日、懇親会を終えて帰宅し、休んでいると右眼の奥で、ピカピカと光のような物がみえる。飛蚊症のような症状もある……これは変だなあ！ そういえば、一昨日あたりから、右眼がなんか「重たい」感じがしていたので、「メボ（ものもらい）」でもできたんかなあ？ 眼科で診てもらわないといけないなと思いながら、そのまま寝てしまった。

翌朝も眼に違和感があるものの、いつも通り朝食をすませ電車で出勤途中、市内で一件用件を済ませたあと、やはり右眼が変な感じがあるので、行き付けの松山市民病院（人間ドックなども受けているので）へ直行し、直ぐに眼科で診てもらった。散瞳の目薬を入れて暫くして、眼底検査をしてもらった。

担当医師がちょっと険しい顔つきで、「これは、二神さん、網膜はく離ですよ、直ぐ手術しないと駄目ですね」とショッキングな診断を下してくれた。「エツ」という感じであった。

「二神さんの場合は穴があいているので、レーザーでは無理で手術しないといけない」旨、「手術は県病院か愛大でなら可能です」とのこと。「どちらにしますか？」と急に言われても……しかし、放っておいたら、失明しかねないなどと、脅されたので、近い方がいいと思い、（どこがいいかという知識も持ち合わせていないし、穴が開いているといわれても状況がよくわからないので）とにかく「県病院にします」と返事した。

先生から、「紹介状を作成しますので」「県病院へ直ぐ行ってください

い」（いまなら、午前中の診察に間にあいますから）ということで、タクシーで県病院へ直行した。昼前であった。

左目は、なんとか見えるので、タクシー内から携帯電話で家族へメールをうち、県病院についてから改めて、ワイフへ電話した。「これから、右眼の手術をして入院しないといけないから、入院に必要な物を持ってきてや」、一番驚いたのは、私本人であるが、家族もびっくり。会社へも連絡を入れて、当面のスケジュールはキャンセルの依頼をしてもらう。

県病院へは、以前、親戚のお見舞いなどで、行ったことはあるが、私自身が、受診というのは初めてだった。昼前なのに、通路というか待合室は患者さんなどで、ごった返していた。兎に角、受付で「診療カード」なるものを作ってもらい、眼科の前で長い時間待たされた。結構待たされて先客が少なくなってきた頃に順番が回ってきた。

眼の精密検査、眼底の写真を撮ってくれたり、いろいろ見たこともない機械で計測された後、主治医のU先生が、模型を使って「網膜はく離」の状況などを説明してくれ、手術を早くしないといけないが、「翌日が手術日なのであるが、その日の夕方、別件の緊急手術がなければ、その日の夕方手術ができる」とのことなので、「夕方で構わないでのその日にしてもらうよう」お願いした。

慌しく入院手続きなどをして、スーツから病院着に着替えて病室へ入ったのが17時位であった。ワイフも入院の七つ道具を揃えて持ってきてくれた。個室は空いてなかつて、とりあえず4人相部屋のベッドへ。

予定通り18時から手術をしてくれることになった。あれこれ、考えている間のない、スピード手術であった。病名は「裂孔原性網膜はく離」の手術で、右眼の近辺に3回注射されて、局部麻酔のままなので、意識はあるので、想像ただけで、ちょっと怖い感じであったが、2時間弱の時間が結構長く感じられた。終わって病室へ戻ったのが20時

くらいであった。妻と長女が孫を連れて、心配そうに来てくれたが、右眼に眼帯をしてうつむき姿勢のままで、手術は成功した安堵で、1時間くらい俯いて休み、21時頃やっと遅い病院食にありつけた。

先生の説明では、眼のなかにガスを充満させて（そのガスが網膜を元の位置にくっつける手助けをしている由）いるので、ガスがもれないように、うつむきの姿勢を保って安静に寝なければいけないとあった。

真ん中が空いて息ができるような、枕を準備してくれていて、指示された通りの姿勢で寝ることとした。しかし、この状態を約2週間程度続けていくということが、これほど大変なことは、初日は想像できなかった。

その日は兎に角、手術の疲れか、本来はぐっすり休める筈であったが、相部屋の人のイビキや、夜中のナースコールなどで、看護師がバタバタ走り回り……おまけに俯きのままなので、1、2時間おきに目が覚めてしまい、なかなか眠れなかった。睡眠不足でしんどいけれど、食欲は通常通りあり、病院食では足りないくらいであった。

県病院は消灯が21時半で6時が起床である。6時に看護師が目薬を入れに来てくれたが3種類の目薬を5分毎にいれなければいけない。初めは、顔は蒸しタオルで拭くだけ、風呂も駄目、洗髪も駄目、廊下を歩くのも制限され、行き来できるのは、トイレとベッド間くらいだけ、歩くときも、俯いて歩き、真正面に向いてはいけない……など、相当制約のある安静状態であった。

横向いたり、上向きで寝ていないか、2時間おきに看護師が見回りにきて、俯きに寝るように、注意されたりするらしい。幸い、私の場合、眞面目に俯いて寝ていたのか、一度も注意されたことはなかった。

しかし、寝返りしないで、俯いたままで、寝ていると、肩が痛くな

ったり、首が凝ってしまい、おまけに腰の方も痛くなつて……これが、大変な苦痛となつた。肩こりに貼るシップ薬を貼つてもらい、大分楽になつた。

翌日、気がついたのであるが、県病院の5階の西病棟には、眼に眼帯をした人によく合い、眼のトラブルを抱えた人が多いのでびっくりした。これまで、あまり気にかけていなかつたが網膜はく離の患者は結構多いという話も聞かされたが、日常生活で、何を気をつけていたら防げるのか、難しいものである。直接の原因がはっきりわかれば、いいのですが、なかなか、これといった原因が突き止められない。加齢が原因ですといわれたら、これは仕方がないことである。

結局、3週間の入院生活で、毎日、眼の診察をしてチェックしてくれ、一日3回、3種類の目薬を入れて、当面の網膜はく離は収まった。後は、「眼に力が加わらないように」「眼の疲労を避けること」「眼の振動・圧迫をさけること」など、諸注意事項を指導され、自宅で少し様子見て、手術から約1ヶ月後に仕事に復帰した。

私の場合、右目は白内障の手術もついでにしてくれたので、以前より随分鮮明に見え出した。改めて医術に感謝し、健康の有り難さを痛感しているこのごろである。

(平成23年12月22日)

正義とは砂上の楼閣か、 老いたる者のたわ言か

理事 二神 久蔵

正義とは正しいことを行うことでしょうか。不正は悪か、誰が決めるのか。正しいか正しくないか、イエスかノウか、白か黒か、右か左か、保守か革新か、ファジーや曖昧ではダメなのか。結論を出す前に、色々な考えがあることを共有しなくともいいのか。二者択一でなければダメなのか。デモクラシーは多数決で決めるが、これは正義か、個人の良心で決めているのか、それとも個人の欲望、他からの脅迫・恐喝で決めているのか。解らないと迷うことはいけないのか。自分の利益、利権、権力の在る方につく、名誉欲のため安全な方へつく、1人なら認識できるが、集団に加わると洗脳されてしまう。

神や権力・財力にすがるのでなく、個人の責任で行動をいたし、その結果が不利でも、失敗でも他人のせいにせず、自分で行動責任をとるのが少なくとも正義だし、時期早々で正義が通らなくても、責任ある人生を送ることが大切ではないか。それとも、ただ頑固で窮屈な人生なのか。

正義とは学び、努力致し、たとえ少数意見でも最後まで決断を変えず、理由を述べることではないだろうか。異なる意見も聞き、筋が通らない解らないことは信念を貫く。そのためには情報収集に努め、決断に責任を取ることではないだろうか。北朝鮮・シベリア等は、不正が正で、正が不正となる。なぜなら不正者が、その同調者が多数だから。デモクラシーは多数決で正義とされてしまう。

大相撲の法人化も善く判らない。国技であれば、なぜ正義が前提で話が進まないのか。そもそも大相撲はスポーツなのか。八百長在りで聾員筋が楽しむ単なる興行・ショーとどう違うのか。大学相撲部出の



知人がいるがプロスポーツだが興行に近いとのこと。

今、東京・大阪などで住民投票で原発廃止を多数決で決める運動が盛んだ。多数で決めれば、正義が通る。確かに、イタリア・ドイツは住民投票で決めたが、欧米は発送電分離で実情が違う。

何かあると実情を知らず、情報収集もせず、極端に正か悪か、白か黒か、イエスかノウかと極端に振れる悪い癖の方々がいらっしゃる。ファジー・曖昧な考え方方が先ではないか。即時、原発全廃になれば、電気料金が上がり、製造業は国際競争力を無くし、失業者が増えコストの安い海外移転が当然加速する。日常でも、クーラー・電子レンジが無い生活の覚悟があるのか。今までの原発の恩恵を考えず、いきなり全否定はファシズムだ。原発のより一層の安全制御を進め、同時に代替えエネルギー開発を進めたうえで、原発を人類が制御できぬのであれば廃止すべきです。今回の福島第一原発事故は、東京電力の傲慢な人災であると思う。

なぜなら、事故近くの東北電力の女川原発は、非常用電源を一人の設計者が過去の津波のデータから、高地に上げるべきと考えて設置し、津波の高さから守られていた。地震の被害もなく発電所そのものは、安全に停止し発電所内が地震被害者の一時避難場所として使用されたと報道されている。管理・制御が通常であれば安全だと思われる。これが正義だ。すべてが、塵芥ではないと思います。

また、原発事故にかこつけて、非常時だから節電せよ。しない奴は非国民扱いのキャンペーンを張っている。公共施設・交通機関でもエスカレーター、エレベーターを止め、照明も落としている。階段の上がり降りは健康に良いなどと賢者は言うが、私は老いているし膝が痛む。足腰の弱っている老人・妊婦さんも階段の上がり降りは辛いと思う。これも多数決、健康な方々が多数。だが、妊婦さんは次の世代を育んでいる。優しく安心してもらいたい。これが正義であってほしい。

最後に、森鷗外の「高瀬舟」で喜助が弟殺しの罪で島流しになるが、今は「正義」だろうか。偏見と独裁と思われてもいい、正義をつかさどる若き（歳に在らず）ニューリーダーは出ないのか。K首相、S内閣官房長官、N知事、M知事、H市長、そのほかの方に、砂上を少し固めていただけたらと存じます。

名古屋帰化人のお墓事情

理事 二神 亮郎
あきよし
亮郎

昭和43年、大阪「株式会社淀川製鋼所」での10年間のサラリーマン生活に終止符を打ちまして、名古屋にて、事業を起きました。

仕事の関係上、役所に出す書類、謄本その他で背部、何度も不便な思いを致しましたので、本籍を名古屋に移し、帰化いたしました。

さて、歳を重ね、仕事も終えまして、後期高齢者となり隠居生活となりました。

現在は老々介護と云うべき生活。妻・道子も5年余り、名古屋大学附属病院神経内科に通院、難病との闘いを続けています。

今年は満七十七喜寿になります。ぼちぼち、自らの半生いや人生を振り返る機会でもあり、墓地について真剣に考えました。

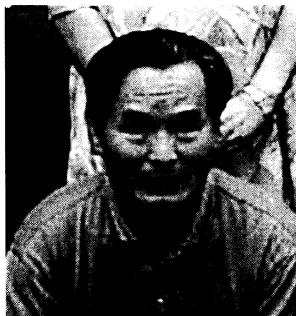
私の両親を始め先祖を祀っている故郷の墓には墓守がいません。

先祖の墓と云っても私にとって祖父・初太郎は昭和9年11月1日、私の生れる一年前に没している。

私が祖父の生まれ変わりと云われた由縁である。祖母は大正14年に他界している、故に身近い先祖は父・母である。

高知・小才角二神の墓は、寛永4年(1707)亥の大変(宝永大地震)により、大津波で全て流され、現存するのは、大先祖の寛政元年(1788)没の金助の墓に始まり、中興の祖といわれ万延元年(1860)没の扇谷幾右衛門の墓から初太郎までの13代の墓地と、父母の墓地である。

私にとって、父母の墓が墓参りの対象であり、それ以前の、先祖の墓参りは、あくまで同時参り位の気持であった。それでも歳と共に、墓参りが出来なくなり、年に一度が二年に一度、それも今後は難しい状況になる。



墓守をする人がいなくなった先祖の墓はどうなるのか。遠い親戚や友人に頼むのは一時的なもので、無常任であると云う考えから、私は最終的には親と先祖を永代供養してから、父母の骨を分骨して名古屋に墓を作り、一緒に先祖を祭るという結論に達しました。

故郷・高知・小才角の墓地は、弟・敷吏に、今後の後始末やその他の処置を（妹・敦子の思いもある事だから）お願いした。名古屋市・八事霊園に新しい、「二神家の墓」を新設する。

自分の墓を造ると云うことは、自分の死に様を考え、墓参りする人の思いを巡らせる事です。その他、場所とかいろいろあるでしょうが、ベターと思う所を選んだのです。

幸い墓地は、名古屋市立八事霊園公募抽選にて入手しました。（平成22年1月1日）。地下鉄八事駅から10分以内、車椅子でも行ける事を条件に選んだ。車を降りて約3分の場所である。名古屋のほぼ真ん中で、どこから来ても便利であります。住所は、天白区天白町大字八事字裏山69　名古屋市立八事霊園第一区、一等地、は号45番2の3
(2.2×3.01メートル=6.6平方メートル

墓石は見積もりを取り、進行中でしたが、そんな折り、3月11日の東日本（東北・関東）大震災です。大変な大惨事です。少し落ち着いてから決行するという事になりましたが、妻の病気が予想外に重く進み、思うようにはならず、年を越してしまいました。“慌てずにのんびり” やります。

故郷は
遠くにありて
盆帰郷

宏介さんのもだばなし!! 4題

中部・関西支部理事 二神 宏介

はじめに

最小不幸

東日本大震災により被害を受けられた地域の皆様に、謹んでお見舞い申しあげます。

一日も早い復興と皆様のご健康を心からお祈り申しあげます。前総理の約束、最小不幸の世界は、東北地方の原発処理、地震処理、風評被害等対策の遅れの失政により最大不幸に。

又、私たち年金生活者に消費税値上げで低所得者いじめもたまりまへん!! これぞ究極の最大不幸の世界です。

先日も子供がコンビニへ100円持って菓子買いに来てたが5円足らんと言われ半べそ!! 孫持つじいちゃんとしてかわいそうで5円出したったがな。消費税が10%になつたら孫へのおこづかいも一割り増しや。たまりまへんな!!

前総理は愛媛の延命寺54番から遍路回りを始めたみたいやが、のんびり自己の保身安泰を願う前に、ウランで汚染された松の枝を杖に東北地方を自分の足で訪ね、東北地方の県民にお詫び行脚が先だと思うけどな。私も71歳、最小不幸が最大不幸に……。一昨年は、心臓手術、昨春には脊椎圧迫骨折でさっぱりですわ!!

富山から山口へ

息子が2011年10月から山口県に転勤になりました。

息子が富山在任中に一度、富山県の二上山を訪ねたかったのですが行けなくて残念です。

二上山（富山県）

二上山（ふたがみやま）は、富山県の高岡市と氷見市に跨がる標高



274mの山。地元では「ふたがみさん」と呼ばれることが多い。

高岡市の最高峰「二上山」の名は、現在の二上山（東峰）と西隣の城山（西峰）を2柱の神に見立て、「二神山」と呼んだのが語源であるとする説があります。奈良の二上山も二神島も2柱のご神体でしょう。

山口県に早速行きました。息子に「山口を知るには、仕事の引継ぎよりも観光が第一」と豊田町を訪問、豊田氏屋敷跡、館の椿と二神のルーツを説明!! 息子は、お得意先で「二神さん！珍しい名前ですね」と言われる前に、豊田町がルーツですと話し、話題が盛り上がると喜んでいました。

愛媛県大阪事務所

「愛媛県大阪事務所？」て、なんやネン。二神系譜研究会に関係あんのん！。支部会で愛媛県人会に加入しました。支部会員さんには愛媛までなかなか行けないが、ふるさとの香りのするところと積極的に愛媛ふるさとのイベントにも参加してもらいたく思います。実際に何度もイベントに参加していますが楽しいですよ。

昨年の県人会新年互礼会には久藏理事が参加され、愛媛県知事、松山市長、宇和島市長と親しく名刺交換をしています。2012年度は県人会新年互礼会には宏介理事が参加しました。お陰様で県事務所所長、県人会事務局長もご協力下され、県事務所に海の民「ふたがみ」の冊子を置いて頂けるようになりました。

奈良・談山神社（二神姓を見つけた）

二神系譜研究会支部会総会に、広島の二神種昭さんを講演会の講師に迎え講演をお願いしました。お話の中に藤原鎌足が二神氏の祖である話を聞いていましたが、昨秋、談山神社に紅葉狩りに行った際、神殿で二神姓も祭られていました。（二神姓を見つけた）です。

うれしくてお賽銭はずみました（最大幸福です）

愛媛県事務所 海の民「ふたがみ」展示風景



井門事務局長、黒瀬所長さんと
愛媛ふるさと祭り会場にて

話の締めはいつものように「大阪手打ち」です
それではよろしゅー
二神系譜研究会の発展を祈念して
打ち一まひょ（う～ちまひょ） チヨンチヨン
もひとつせ チヨンチヨン
祝って（いをーて）三度 チョチヨンガ チヨン

今年も中部・関西支部をよろしゅーたのんます!!

兄との思い出

二神美知子

昨年、10月15日兄（信助）が肝臓がんで亡くなりました。私自身、お医者様に危ないと言われても、まだ大丈夫なのではとかすかな望みをもっていましたが、打ち砕かれました。入院して1週間で帰らぬ人となりました。会社には入院する日の前日まで行き、会社のことをいつも思い……黙々と働く人でした。兄の家族のことを思えばどれほどつらいか、測り知れません。

兄は4人兄弟の3番目として育ちました。子供のころは、母の里が多喜浜（新居浜市）だったので、母は学校が夏休みになると子供たち4人を連れて、里帰りをしていました。教師だった父はいつも後からやって来していました。また、父と兄（信助）と私と3人で行った記憶もあります。トンネルの数え合いをしたり、父が古本屋で買ってきてくれていた本を読んだり、つばえたりして、3時間は長かったけれど、今思えば楽しい汽車の旅でした。蒸気機関車なので、トンネルを通りたびに鼻が真っ黒になるので、急いで窓を閉めていました。子供の頃のことをいろいろ思い出します。

またこんな事もありました。兄が私立の中学校に通うために父が自転車を買いました。兄はその時、流行のスマートな自転車が欲しかったのですが、父は見るからにスマートとは程遠いがっちりした自転車を購入しました。さすがの兄もいらないとは言えず、がっかりしていた様子を思い出します。





(高校時代の伯父と兄) 新居浜にて

私が北条の宇佐神宮へお参りしたのをきっかけに、兄は二神系譜研究会の方たち、光次様に出会い、そしてホームページを通じて、齊藤先生、村上様にお会いすることができました。余戸二神について新しい発見もありました。兄もこれから余戸二神のことをゆっくり少しづつ調べていこうとした矢先にこんなことになりました。残念でなりません。今頃、これまでのことをご先祖様や両親、親戚の人たちに、報告しているのではないでしょうか。また前浩三会長にも報告していることでしょう。そしていつまでも家族のこと、二神系譜研究会のことを見守ってくれていることと思います。私も兄に代わることはできませんが、これからも少しづつ調べていこうと思っています。二神系譜研究会に携わることができ、皆様と交流ができ本当に感謝しております。これからもよろしくお願ひいたします。

また、父が亡くなつた（昭和57年）時、上の兄は、すでに東京で会社を始めっていましたので、兄（信助）が松山に帰つて来てくれ、跡を継ぎました。私にとっては、本当にありがたかったです。友達の勧めもあって、コンピュータの会社を始め、あれから27年の歳月が過ぎました。私も平成2年に会社に入社させてもらい、今日に至っています。兄に対しては感謝の言葉以外何も見つかりません。私たち兄弟姉妹は、お互い、何かあるごとに助け合ってきたように思いま

二神氏の神々

監事 二神 良昌

私は客王神社の宮司を拝命していますので、二神氏に関係ある神々のお話をさせて頂きます。

二神氏の先祖の豊田氏は藤原氏の末裔と言われていますし、殆どの二神氏の家系図は藤原氏かその前の中臣氏が先祖となっています。

その中臣氏の祖神は、天児屋命（アメノコヤネノミコト）と言われています。

天児屋命は、古事記に天照大神が天の岩戸に隠れた際、岩戸の前で祝詞を唱え気持ちを和ませ太玉命と共に岩戸から太陽神である天照大神を高天原に戻したと伝えられています。

その後、命は天孫降臨の際ニニギノ命に随伴し、地上に降りて中臣氏の祖となったと記されています。

御神徳は言霊の神・学業成就・出世開運と言われており、代表的な神社は奈良の春日大社で全国の春日神社の本宮です。

中臣氏は宮中祭祀を担当し物部氏と共に排仏派として行動をしましたが、親仏派の蘇我氏に物部氏が戦いに破れ蘇我氏三代の専横の時代となります。

しかし、中臣鎌足が中大兄皇子と共に蘇我入鹿を倒し(大化の革新)天智天皇8年(669年)藤原の氏を賜りました。

その後、子の不比等の子孫のみが藤原朝臣の姓を引き継ぎ、他の親族は神事を供する家として中臣朝臣の姓に戻しました。

神主の家が中臣家の末裔と言われる方が多いのもその故事が原因と思われます。

又、仏教で言えば大般若経に



客王神社：松山市伊台町

あたる大祓の祝詞は別名中臣祓と呼ばれるほど神道では重要な家系と言えます。

二神氏が信仰したといわれている宇佐八幡神社の本宮は、大分県宇佐市の宇佐神宮で全国4万4千ある八幡神社の総本宮です。御祭神は、八幡大神（応神天皇）、比売大神（宗像三女神）、神功皇后（息長姫命）で、その御神徳は、勝負必勝・開運除厄・子孫繁栄ですので、水軍の守り神として信仰したのではないかと推察されます。

宇佐神宮の拝礼作法は、2札4拍手1拝ですので、もし行かれることが有りましたらご注意下さい。

又、旧中島町熊田甲541に鎮座する宇佐八幡宮と吉木765に鎮座する五十鈴神社は、私の家の本家にあたる二神重分氏が宮司を拝命しています。五十鈴神社の御祭神には二神氏の祖神天児屋命も合祀されていますので機会がありましたらご参拝下さい。

私が宮司を拝命している客王神社は、松山市下伊台1127に鎮座しており、御祭神は八幡大神も合祀されています。神社の階段の右側にある神名石と両脇にあるメ石に書かれている『天地一指』と書かれている文字は、三輪田米山の書によるもので、名筆と言われていますので一度ご参拝下さい。

但し、私は兼業神主で別の仕事も持っていますので、普段は無人です。申し訳ありませんが神社の説明は拝殿の右側にある由緒書をごらん頂ければ幸いです。

拝

父親の思い出

二神 康郎

私の属する港山二神氏の初代二神茂七は今から約150年前二神島を出て松山市の郊外港山に定着した。その4代目に当たる私の父故二神長憲をご参考まで紹介する。

彼は明治34年（1901）港山二神氏二代目の二神愛次邸の長男として生まれた。姉一人と弟3人がおり父はおんぶやだっこで弟達の面倒をよくみたと聞いている。“坂の上の雲”で有名な秋山好古が校長を務めた松山北予中学校を卒業し慶應義塾大学経済学部の予科に入学した。本科に進んだが卒業を控えた時点で悪性の結核に冒されていることが判明、長期療養後ついに中退して実家に帰った。

松山市の商港である三津浜に信用組合設立の機運が高まり昭和4年（1929）の三津浜信用組合の創業に参画したあと長期間専務理事を務めた。信用組合は借用金庫となり父親は昭和36年（1961）、60歳で理事長に就任以来10年間その職にあった。

父親は堅物の銀行マンで浮いた噂など一切なかった。一人息子の私に対するしつけと教育は厳しかったが優しい半面もありいろんなことを教えてくれた。

私が物心ついたころ、家族は三津浜の事務所の二階に間借りしていた。幼いころの思い出はいろいろあるが、三津浜から渡し船に乗って港山に渡り伊予鉄梅津寺駅前にあった温泉に親子三人で毎晩通った。私が泳ぎを覚えたのはこの温泉の浴槽で幼稚園生の頃だった。渡し船は今ではエンジンで走っているが、当時は船頭が櫓をこいでいた。父親は櫓を漕ぐのが上手く、乗ると必ず船頭に代わって櫓をこいだ。

私の母親は松山市生まれで県立女学校を卒業後父親に嫁いだ。結婚後は30年以上も借用金庫で働き夫を支えた。母親と父親とはいとこの関係でそのせいか子供がなく私は乳飲子のころ養子として引き取られ育てられた。私の実の父親は母親の兄だ。

父親は銀行マンには適していたのであろう、毎晩遅くまで事務所に

残り一人で仕事に取り組んでいた。その甲斐あってか経営状態は健全で何度も話のあった松山信用金庫との合併話も都度断ってきたようだ。父親は心不全のため昭和47年（1972）9月に逝去した。そして同月付けて内閣総理大臣（臨時大臣三木武夫）名で勲六等単光旭日章を受章し私は大蔵省まで勲章をもらいに行った。

その三津信が父親の死後34年目に当る平成18年（2006）10月に松山市に本拠がある愛媛信用金庫と対等合併し77年の歴史に幕を閉じた。同じ市内に二つもの信用金庫は不要であったのであろう。このことは父の遺業が形の上では消滅したことを意味し残念であった。

父親は一生の内一度も二神島を訪れたことはなかった。しかし山西駅南にあった自宅の庭には二神島から移植された松が育っていた。港山二神氏に7代目の跡取りが生まれたことは本誌前号で紹介した。その孫も今では1歳9ヶ月になり好奇心の強いやんちゃ坊主に育っている。父親も草葉の陰でこのことを喜んでいるに違いない。



昭和40年代の三津浜風景。ほぼ中央の突き出たところに港山がある。
(「ふるさと松山」平成22年2月 郷土出版社発行より)

二神系譜研究会 関西・中部支部会員のみなさん !!

二神系譜研究会も、一昨年の秋に創立十周年を迎えました。

その間、多くの古文書等を集め、また実地検証につとめるなどして大きな成果を収めています。それらは、13冊に及ぶ「海の民ふたがみ」や速報などにより、会員に届けられました。

支部会員の皆さん！

現在、関西・中部支部には約30名の仲間が集っています。残念ですがそれは名簿上のことであって、まだ一度もお目にかかったことのない方が大勢おられます。お住まいが愛知、三重、奈良、和歌山の各県と大阪府の各都市に拡がっていることが最大の理由と言えましょう。

今回、支部はなんとかしてその欠点を補いたいと、新しい交流の場を作ろうと考えています。

まず第一は、年に一度は、京阪神で学習会を兼ねた懇親会を持つこと。

第二は、年2回、お互いの消息を確かめるために支部会報などを発行することです。

第三には、ご自身の親族、知人の中に研究会の実績を広め、興味を示された方々に二神系譜研究会の会員となって頂く活動です。

さて、これまでを振り返ってみると、研究会の運営実態は、本部役員ならびに松山近辺の会員諸兄姉に全面的に負担をお掛けしている状況にあります。

このようなことでは会は長続きしません。

いうなれば、会員一人ひとりが、ご先祖様が残した古資料保存者であり、小さいころから聞かされた貴重な話の伝承者であることは間違いないありません。ただ、個人として学術的に系統化する手段を持たないのでやってこなかっただけです。

支部でもやれることは沢山あるはずです。例えば、会員それぞれに基礎調査表をお配りして、我が家ならではの資料を作り、研究の基礎

資料に役立てることです。

私たちが、二神系譜研究会に加入したのも、二神という珍しい姓にどんな歴史が存在するのだろうかとルーツを求め、縻どころとする純粹な思いがあったからではないでしょうか。

本部にだけ活動の負担をかけるだけなく、自らも研究する場を作ろうではありませんか。歳をとりすぎたとか、健康に支障がでてきたとか、いろいろ事情があって活動に参加できない方は、みんなの活動を温かく見守ってください。

それだけで、研究会にとっては大きな力となります。

共にがんばりましょう。よろしくお願ひします。

支部会員の皆様のお声を事務局まで届けてください。お待ちしています

平成24年1月吉日

二神系譜研究会関西・中部支部
支部理事一同

編集後記

この度、第14号をやっとお届けすることができました。

いつもながら、若干予定より遅れましたが、ご寄稿頂いた方、編集委員のメンバーの方々のご協力・ご支援に厚く御礼申しあげます。

二神系譜研究会の活動については、昨年から「事務局の動き」を速報ベースでメールアドレスを登録させて頂いている方に配信させていただいています。

本冊子は1年ごととなっているため、日頃の活動をタイムリーにお届けするためには、速報ベースで諸情報をお送りして情報の共有化を図っていく必要があります。通信費などコスト面からすれば、インターネット網を利用させて頂くのが最適だと思います。出来るだけ、インターネットにもチャレンジしていただきたいと思います。

メールをご利用されていない会員の皆様への対応も鋭意検討させていただいておりますので、引き続き二神系譜研究会の発展のために皆様のご意見などお寄せ頂きたくお願い申しあげます。

2012年3月20日

二神 俊一

編集後記

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が起こって津波を引き起こし、果ては福島原発問題へと発展しました。犠牲者の方は、この3月で1万5000人を超え、行方不明の方も多く、1年経った今も復旧への道は遠いと感じます。

昨年の11月に、全国の島の知人たちと気仙沼市とその沖にある気仙沼大島を訪ねました。その時は8か月経過していましたが、活気づいていたであろう人々の暮らしを垣間見ることはできませんでした。大きな漁船が何百メートルと流され、陸地部にでーんと座っている光景を目にしたとき、改めて自然の力の大きさを感じました。そんな中で島の人たちが、「自分たちの住んでいる場所を必ず復興するんだ」という力強い思いを語ってくれました。私たちが逆に励まされたようで、みんなで支えあい協力していくことの大切さを感じました。

地震・津波は自然のもたらすものです。今回の原発問題は、地震・津波の影響があったとはいえ、基本的には人の手によって引き起こされたものと言わざるを得ません。今後も、原発に頼る暮らしを続けていくのか、原発に頼るのではなく従来の火力・水力による発電方式や太陽光等による方式などを取り入れながらの暮らしを選ぶのか、大きな岐路にあります。

私たちの世代は、冷暖房システムやストーブなど満足にない時代で育ち、冬は火鉢や重ね着、夏は団扇などの生活でしのいきました。今やこれからの方々には生まれた時から、生活環境は十分すぎる状況にあります。「我慢」という言葉が死語になりそうな時代。少しでもいい、節約できるところから皆なで取り組んでいくという気持ちを持ち続けていくことが必要です。

大事なことは、物事に「絶対はない」ということだと思います。絶対安全、絶対大丈夫、絶対間違いない等、「絶対はありえない」と思います。これからどうしていくのか、みんなで意見を出し合い、考え

ていくことは大事なことだし、そうしなければならないと思います。
これは絶対に！

こんな大変な時期に、系譜研究だ、歴史や文化がなんだと思われるむきもあるでしょう。ですが、先祖からきちんと受け継ぎつないできたものは、今に生きる私たちが、次の世代にバトンタッチする使命があります。今回の震災でも、多くの文化財、歴史的遺産などが破壊されました。何百年という歴史が消滅してしまったところもあり、新しい歴史を作っていくかなければなりません。苦しくても大変でも、それが生きていくということなのでしょう。二神系譜研究会もがんばりましょう。

これからが正念場ですが、被害にあった地域だけの問題ではなく、日本全体、みんなの問題として共通意識をもって、それぞれができる事をやり続けることだと思います。そんな気持ちを無くさない限り、復興できると信じています。「絆」から「復興」へ向かって。

(豊田 渉 2012.3.11)